

---

# 迷宮の魔王さま 改訂版

井戸端 康成

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

迷宮の魔王さま 改訂版

### 【Nコード】

N3388Q

### 【作者名】

井戸端 康成

### 【あらすじ】

数千年の時を生き、そして死んだ魔王。だが彼の魂はそのままあの世へ行くことはなく……！？

元魔王が迷宮で繰り広げるファンタジーの開幕です！

## 第一話 ある魔王の死

### 第一話 ある魔王の死

魔界の果て、闇深き地に城がそびえていた。魔を統べる象徴たる城はすべてを威圧し、見下ろしている。高く厚い壁は何者の侵入をも拒み、尖塔は天へと睨みを効かしていた。

その城の最深部にある玉座の間。艶やかな深紅の絨毯が敷き詰められ、高貴な空気に満ちたそこには数え切れないほどの者たちが集っていた。その者たちは皆一様に玉座に向かって頭をたれている。その顔は虚ろでどこか悲痛な面持ちであった。その光景はなにか喪に臥しているかのようにであった。

数百もの瞳に見つめられていた玉座の主は、弱々しく息をするばかりであった。深く皺の刻み込まれた皮膚は蒼白、唇は土気色。彼に死が差し迫っているのは明白であった。しかし、未だにその青い瞳は刺すような光を保っていた。

「みな集まったようであるな」

玉座の主が口を開いた。威厳溢れるその声に、場の空気が一気に張り詰める。一切の物音がその場から排除され、無音の空間が出来上がった。玉座の主は場が静まったのを確認すると、再び口を動かす。

「もう知っていると思うが、余の命は持ってあと数刻。最後にみな顔が見たくてな。こうして集まってもらったというわけだ」

「魔王様、そんなことをおっしゃらないで下さい！」

魔王の言葉に、集まった家臣たちは動揺を隠せない。すでに知っていたことではあったが、本人から言われたのと人づてに聞いたのでは重みが違った。不安、恐怖、死への嫌悪。様々な感情が渦巻き、集まった者たちの心を揺らす。やがて、玉座の間がざわめきによって乗っ取られた。だがそれとは対照的に魔王は落ち着き払っていた。

「落ち着くのだ。余とて気分の良いことではない。数千の齢を重ねてきた中で一番嫌なことだ。だが避けられぬ、故に騒がぬ」

魔王はこの一言で場をおさめた。そして手に握っている黒光りする杖を揺らして、一人の男を呼び寄せる。漆黒の甲冑を纏った男は神妙な態度で玉座へと上り、うやうやしく膝をついた。

「顔を上げよ」

「はっ！」

魔王は魔を統べる者とは思えない慈悲深い目で男の瞳をみた。男は緊張で身体を強張らせる。

「うむ、良い瞳をしておる。これからも国を頼むぞ」

「ありがたき幸せ！」

男は涙で頬を濡らして下がっていった。魔王は満足げに頷くと、また別の男を呼び寄せる。そしてまた同じような行動を繰り返した。

魔王の別れの挨拶はしばらく続いた。そして、いよいよ最後の家臣と挨拶をしようとしたところで、魔王の命が尽きてきた。彼は胸を抑え、苦しみに喘ぐ。

「魔王様、大丈夫でございますか！」

「もうとうの昔に大丈夫ではない。構わんから早く最後の者よ、来るのだ」

魔王は駆け寄った家臣の手を振り払った。そして最後尾に座っている男を執拗に呼ぶ。男はきぬ擦れの音を響かせながら魔王の玉座の前に早足で移動した。

魔王はその男の姿を見ると、少し驚いたような顔になった。最後の最後に、もっとも信賴していた男が残っていたのだ。

「最後はおぬしか宰相。さあ、顔を上げるがよい」

宰相はゆつくりと顔を上げた。魔王は最後の力を振り絞り、声を出す。それはしわがれ、小さな声であったが、宰相の心を打った。

「おぬしには世話になった……。実によく余を支えてくれた。今後は王子たちを……ぐうつ……支えてくれ」

「ははっ！ 命に代えましても！」

宰相は頭を下げた。しかしそのまま下がることはなく、魔王の手を握りしめる。魔王の手からわずかずつ、わずかずつではあるが体温が失われていた。命が燃え尽きていくのが、はっきりと宰相には感じ取れた。

「魔王様……」

宰相は魔王から手を離れた。手がだらりと垂れ下がる。その身体はもう、力を失っていた。悲しみが玉座の間に溢れ出て、嘆きの声が幾度となくこだました。

一人の偉大な魔王が今、死んだのだ。

魔界とも、そこから繋がる人間世界ともまったくことなる世界にある、神秘の大陸アルゲニア。魔界の魔族とはまた異なるがモンスターたちが息づき、人間たちがいくつもの国を建設している世界である。

その大陸のほぼ中心に位置する迷宮都市と呼ばれる都市。そこは地の奥へと続く神秘の建造物、迷宮を中心として成り立っている都市である。それゆえ今日も迷宮へと赴く者たちで騒がしいその街の端で、一人の男が目を見ました。

「うつうつ……ここが地獄か？　だいぶ想像とは違っているが……」

男は立ち上がると、困惑したようにつぶやいた。彼は艶やかな深紅のマントと銀に輝く髪をゆらして辺りを見回す。その困惑した声はかなり若返っていたが、さきほど死んだはずの魔王とほぼ同一であった……。

## 第二話 魔王から冒険者へ

### 第二話 魔王から探索者へ

夕焼けに染まり、昼の顔から夜の顔へと移ろうとしている迷宮都市。ある者は家路を急ぎ、またある者は稼いだ金を手に街へと繰り出す。その人々でこった返す街の中では割合静かな裏通りを、魔王は辺りを見回しながらゆっくりと歩いていた。

「あの世のどこかではなさそうだな。雰囲気から言うと人間世界か？　だが余は死んだはず……」

夕焼け空に太陽が昇り、家や商店の立ち並ぶあたりの様子に魔王は思い悩む。彼の知っている限り、このような光景があるのは人間世界だけであった。

しかし、魔界から人間世界に行くのは特別な大魔法を使わなければならぬし、第一彼は死んだはずだ。それらの事実が魔王の頭を悩ませていた。しかもさらに理解しがたいことに、すでに老齢であったはずの彼の肉体は何故か若返っていた。

色が抜けていた髪は元の鮮やかな銀に染まり、しわに埋もれていた顔は本来の彫りの深い容貌をあらわにしている。魔力や筋力も衰え始める前にきちんと戻っているようであった。

「……今はとにかく情報が必要だな」

魔王はそうつぶやき、一端思考を打ち切った。そして辺りを歩いて人の姿を探す。冒険者の街の裏通りには到底似合わない豪華なマ

ントが揺れ、杖がかつかつと音を立てた。

「よう、兄ちゃん。金もってそうじゃん？俺達にわけくれよ」

魔王から放たれる高貴な気配に金の香りを嗅ぎとったのか、よからぬ輩が近づいてきた。人数は三人、それぞれくたびれた革の鎧を身につけている。大方冒険者崩れのチンピラだろう。

「余は金など持ってはあらぬ。他を当たれ」

魔王は気怠い顔をしてけんもほろろに男たちを追い返した。まったく相手になどしていない様子である。男たちはその態度にナメられたと苛立ち、腰から獲物を抜き放った。

「おい、なめたこと言ってんじゃねえぞ！」

男たちはナイフをちらつかせ、魔王を威圧した。しかし、魔王は眉をひそめるだけだ。それも当然、魔王にとってこの男たちの威圧など、子犬に吠えられた程度のことにしか感じられなかった。

「金を持ってないのは事実だ。無い袖は振れぬ」

「ちいつ、なら身ぐるみ置いていけ！」

男たちは魔王に襲い掛かった。荒事には慣れているのか、なかなかの速度だ。三つの刃は滑らかな直線を描いて魔王に向かう。

しかし、その程度の攻撃が魔の頂点に君臨していた魔王に通用するはずがなかった。

「弱い者をいたぶる趣味はないが……余はやられたらやり返す主義だ」

魔王は身を翻すと、瞬く間に拳を繰り出した。右、左、正面。計三発の拳は男たちをくの字に曲げた。男たちは悲鳴すら上げずに白目を剥き、泡を吹く。

「うむ、若返ったせいかが入りすぎたな。だがまあいい」

魔王はやれやれと呆れたような顔を見ると男たちを通りの端に寄せた。そしてそのまま通りを歩き去ろうとする。だが、そこで彼はふと妙案を思いついた。

「そうだな、慰謝料代わりに記憶を覗かせてもらおう」

魔王は男に近寄ると顔を上げて額をさらけ出した。そして一言、呪文を紡ぐ。

「ジャックイン」

魔王は目を閉じ、男の額に手を重ねた。魔王の頭に男の記憶や知識が流れ込む。文字、歴史、生活の知識……ありとあらゆる膨大な量の情報に、魔王の頭の中はたちまち埋め尽くされていった。

だがさすがに魔王というべきか、しばらくすると情報処理を完了し、彼は男の知識がある程度は自分の物とした。だが所詮は街のチンピラの知識、ごく基本的なことしかなかった。もつとも、それだけでも魔王を興奮させるのには十分であったのだが。

「面白い、アルゲニアに迷宮か。何者が余を導いたのかは知らぬが、

感謝しなければな」

魔王は口元を歪め、愉快そうにつぶやいた。未知の世界に未知の存在。特に、この迷宮都市に存在する迷宮は魔王を興奮させた。深い階層に潜む強大なモンスターに彼らの残す秘宝。さらに祝福を受け迷宮を探索していく冒険者、通称シーカーたち。

チンピラ男は迷宮にはあまり詳しくなかったようだが、その表面的な知識だけでもこれらの存在は魔王に少なからずある好奇心をくすぐった。

魔王本人は決してそうは言わないだろうが、魔王城に時折現れる勇者と戯れたのも彼が勇者という存在に好奇心を覚えたからである。それぐらい、彼は好奇心旺盛であるのだ。

「守るべき国もここにはない。気楽に冒険して暮らすのも悪くないな」

当面の生活方針を決定した魔王は、男の記憶にあつたシーカーたちの拠点、シーカーランへと向かうことにした。だがその前に、機嫌の良くなつた魔王は男に施しをしてやろうと考えた。魔王とはやはり気まぐれなのだ。

魔王は道端に落ちていた石を拾うと魔力を込め始める。石が透明な宝石のようになり青く輝き出した。魔王は満足そうな顔を見ると怪しい輝きのそれを男の懷に滑り込ませる。

「良かったな。十年は餓えずに済むぞ」

魔王はそう言って笑った。彼が数分で造った宝石には、この男の

稼ぎ十年分ぐらいの価値はあったのだ。

魔王は立ち上がると今度こそその場から歩き去る。そして、周囲から奇異な目で見られつつも通りを歩き、十分ほどでシーカークランに到着した。

「ほう、ここか。神の気配がするが……致し方ないか」

魔王が目にしたシーカークランはその後ろにある神殿と半ば一体化していた。ちょうど長方形に近い形のシーカークラン建物が三角屋根の神殿に接合したような形である。魔王は少し嫌な顔をしたが、さして気にはしない。

神と魔王の仲は悪いが、人間たちに思われているほどは悪くない。どちらかがどちらかを害したというのであれば容赦しないが、普段は互いに無関心。それに世界規模の危機に陥った時には協力したこともある。ちょうど同じ建物に住んでいる仲の悪い住人同士のような関係だと思えばわかりやすい。

だから、マナーさえ守れば神殿に入るぐらい大したことでは無いだろう、と魔王は考えたのだ。そのため、彼はゆっくりではあるがシーカークランへとためらうことなく足を踏み入れたのだった……。

### 第三話 シーカー克蘭

#### 第三話 シーカー克蘭

夕闇が深まる中、シーカー克蘭は今日もシーカーたちでこつた返していた。シーカーたちのがやがやとした声が響いていて、とても混沌とした様子である。その中に、一人の男が足を踏み入れてきた。艶やかな紅いマントを揺らすその姿は魔王のものだった。

「いらつしゃいませ。何のご用ですか？」

カウンターに座っていた受付嬢は少々動揺しながらも魔王に、錆び付いたような営業スマイルで応えた。そしてその心の中で思う。またどこかのアホな貴族が来たのかと。

シーカーになるためにシーカー克蘭に来る貴族というのはたまにいます。そういうのはたいてい自身の腕に自信を持っていて、それを見せつけてやろうという連中だ。だが、そんな連中は普通シーカーになって三日ぐらいでその自信を打ち砕かれ辞めていく。

豪華な紅いマントを着てこれまたきらびやかな杖をついていた魔王は、どこからどう見てもそういうアホ貴族にしか見えなかった。

「シーカーになる手続きをしたいのだが」

「はい、わかりました。……ではこちらについてきて下さい」

魔王は受付嬢が笑顔の裏に放った『場違いだ、帰れアホ貴族』というメッセージを黙殺した。というよりはそもそも気がついていな

い。受付嬢は仕方なく魔王を手続きのできる奥の個室へと案内した。

魔王が受付嬢に案内された部屋はとても小さな部屋だった。椅子が二つ、真ん中のテーブルに向かい合うように置いてあり、さらにその真ん中のテーブルの上には水晶球と書類が置かれている。部屋にはそれだけしかなく、またそれだけしか置けるスペースがない。

「こちらにお座りになって下さい」

受付嬢は魔王を先に手前の椅子に座らせた。そして自身は奥の椅子に座る。椅子に腰を落着かせた彼女は書類をばんぼんと整えると、魔王に説明を始めた。

「手続きを始める前にシーカーの義務と危険性について説明します。

……」

魔王が聞いた受付嬢の説明はかなり長かったが、その主な事柄だけを抜き出すところだ。

まず、第一にシーカーとなるとシーカークランに税金のような物を納める義務を負うということ。このお金は月ごとに支払うもので、シーカーによって金額がことなる。収入が多い上位のシーカーほど多い仕組みだ。なお、シーカーになって最初の一月は払わなくても良いらしい。

第二に、シーカーになるとこの街から出るのが面倒になるということ。優秀な戦力であるシーカーに勝手気ままに動かれては困るからだそうで、街を出るのに非常に煩雑な手続きが必要になるのだそうだ。ちなみにその手続きには最低でも半年はかかるらしい。

最後に、シーカーたちの死亡率について。何でも初心者シーカーの死亡率は三割近くになるそうで、熟練者の死亡も良くあるらしい。ただし、魔王はこの部分の説明をほとんど聞き流していたが。

「説明が終わりましたので、いよいよ登録作業です。まずはこの書類に必要な事項を書いて下さい」

受付嬢は魔王にペンと書類を手渡した。魔王は書類を受け取ると、必要事項をサラサラと記入していく。文字の知識はさきほどの男から得ていたし、書き込む情報は適当でもばれないと魔王は高を括っていた。

「全部記入できたぞ」

「はい、どれどれ……名前がプロイス・フリード・ハイン……」

名前の欄を見た受付嬢の顔が曇った。欄いっぱい小さな字で書かれている。覚えるのに苦労するどころか、読み上げるだけで大変だ。

しかし、ここで魔王が助け舟を出した。彼自身も名前が長すぎることは自覚していたのだ。何故自覚しているのかはつきり言ってしまつと、彼自身も思い出しながら記入したからである。

「魔王で構わん。長いからな」

「魔王ですか？ はい、わかりました。そう呼ばさせていただきますね」

受付嬢は妙な顔をしたが、何も聞かなかった。この世界にはモン

スターはいても魔族はいないので、魔王という言葉に特に意味はないのである。

しばらくして、受付嬢は書類に目を通し終えた。そして彼女は仕事終えたような顔を見ると、水晶球に何か薄い紙のような物を差し込む。彼女は紙が奥までささったことを確かめと、魔王の方に向き直った。

「ではいよいよステータス測定です！ この水晶球に手を当ててみて下さい」

魔王は受付嬢に促されるまま、水晶球に手を触れた。しかし水晶球は何も反応しない。受付嬢が高価な水晶球が壊れてしまったのかと困ったように首を捻った。だがその瞬間、水晶球が太陽のように明るく輝き出した。

「うわああ！ 何でこんなに光るんですか！！ いつもはこんな風にはならないのに！」

「そういうものなのか？」

「はい、いつもはぼんやり明るくなる程度です！ あつ、カードが出て来ましたよ！」

受付嬢は未だにチカチカとする目を擦りながら、水晶球の隙間から出てきたカードに目をやった。そしていまだに痛い目を労りながらゆっくり目を通してゆく。

すると、その顔色がどんどん青ざめていった。やがて彼女は震えながら、カードと魔王の顔を見比べる。そして次の瞬間。

「な、なんでこんな人がレベル五百もあるんですかああ!」

受付嬢の渾身の叫びがシーカークランにこだました。窓ガラスが割れそうな程の音量だ。さしもの魔王もこの音波攻撃には耐えられなかったのか、ギュツと耳を抑える。彼の耳にキーンと耳鳴りがした。

少し後で、耳鳴りが収まった魔王。そこで彼は空気を読まないことを承知で、受付嬢に気になったことを質問をした。

「雰囲気壊して悪いが、レベルとは何だ？　それが五百とはそんなに驚くことなのか？」

この質問に受付嬢がまた叫んだことは言うまでもないだろう。

## 第四話 魔王とおせっかい少女

### 第四話 魔王とおせっかい少女

朧げな月に街が照らされる宵の口。シーカー克蘭も少し人が減って空いてきていた。その奥にある個室では、受付嬢が魔王をどこか疲れたような目でみていた。

「えーと……はあ。レベルというのは強さの単位です。一般的には高ければ互いほど強いということになります。それがあなたの場合はなんと五百！今まで最高とされた人でも百三十程度でしたのに……。あなたは一体何者なんですか？」

「さきほどそなたに言ったような気がするが、余は魔王だ」

「いや、そういうことではなくて」

「別に余が何者であつてもそなたに迷惑がかかるわけではあるまい。気にするな」

受付嬢は言葉に詰まった。確かに、魔王の言う通りではあつた。彼が何をしてきたのかなど、シーカー克蘭は知る必要はない。むしろ、無理に詮索して臍を曲げられたりしたら困る。彼ほどシーカー克蘭に貢献しそうな人材はいないからだ。

そのような理由で無理矢理に自分を納得させた受付嬢はため息をつき、肩を落とした。そして小さな声で魔王に話しかる。

「わかりましたよ魔王さん。確かにあなたの言う通りです。ですが、

あなたのレベルのことについては絶対に言いふらしたりしないでくださいよ！ 混乱が起きるのは目に見えていますからね」

「余は不要なことは言わぬ質だ。言いふらしたりはせぬ」

「本当の本当にですね？」

「ああ、本当の本当にだ」

受付嬢は魔王の目をじつと見つめた。魔王もまたそれに応えて動きを止める。二人はまるで氷のようになった。

辺りが静けさに覆われた。二人は互いに互いの顔を見たまま動かない。部屋の中は空気で動かないほど変化に乏しくなった。その状況はしばらく続いた。

「信用しましょう。はい、これがクランカードです」

受付嬢はとうとう魔王のことを信用して、シーカーの証であるクランカードを手渡した。魔王はそれを受け取り、興味津々な様子で入念に観察する。

クランカードは光沢のある黒で、表には大きな文字で魔王と書かれていた。そして裏にはたくさんの数字が書き込まれている。攻撃、とか守備とか書かれている。魔王の能力を数値化したものだろう。だが、魔王はそれには興味を示さなかった。簡単なこと、自分の力は自分が一番良く知っていたからだ。

「良くできているな。これで登録は完了か？」

「はい、一応クランですべきことはすべて完了しました。ですがまた何かありましたら気軽に尋ねて下さいね」

「ふむ、手間をかけたな。礼を言うぞ」

「いえいえ、これが仕事ですから」

魔王と受付嬢はそう言葉を交わすと席を立ち、受付のカウンターの方へと戻っていく。魔王は気分が乗っているのか、足取りが軽い。

「ではさっそく行くでしょう」

「えっ、ちょっと待って……行っちゃった」

受付まで戻ってきた魔王は一言つぶやくと、受付嬢が止めるのを聞かないで出て行ってしまった。気がせいていたので受付嬢の制止など気がつかなかったのだ。

取り残されてしまった受付嬢はクランの奥の方へと視線を向けた。ちょうど、クランと繋がっている神殿の方である。そして彼女は眉を歪めて困ったような顔をした。

「神殿で洗礼を受けて行かなくて良かったのかな？ まあいつか、困ったらまた戻ってくるでしょうし」

そういうと受付嬢は魔王の相手をしている間、滞っていた仕事を再開するのであった。受付嬢の仕事は意外と多いのである。

「えーと、確かこちらであつたな」

一方、シーカークランを出た魔王は迷宮の入口に向かって歩いていった。月明かりに彼の銀髪が揺れ、マントがたなびく。人々は浮世離れたその姿に、好奇や憧憬の眼差しを送った。夜の魔王はとも絵になるのだ。

魔王が街を歩き始めて数分後。彼は大きな広場に到着した。その中心部には大きな長方形の石でできたモニュメントのような物があり、その根元の部分に大きな穴が空いている。

鎧を着て武器を携えたシーカーらしき姿が多数出入りしているところを見ると、そこが迷宮の入口らしい。そこで魔王は夜の闇よりなお暗いその穴に入ろうとした。だが……。

「うぬ、結界か？」

魔王の行く手を何か透明な壁のような物が阻んだ。魔王は足に力を入れて入ろうとするものの、入れない。なかなかどうして頑丈な結界のようだった。

「うぬぬ……！」

しばらくしても、結界は破れなかった。痺れを切らしてきた魔王は力をさらに込め、強引に入ろうとする。魔王を阻む結界が光を放ち、稲妻がほとばしった。迷宮の入口がみしみしと軋みはじめる。

魔王のただならぬ気配に、シーカーたちが集まってきた。彼らは何か言いたげな顔をするが、魔王の必死の形相に言うことができない。

さらに魔王の服装も災いした。紅いマントに宝玉をあしらった漆黒の杖をもっていた彼は、どこかの貴族にしか見えなかった。そのせいで貴族を恐れる一般人のシーカーたちは彼に話しかけにくいことこの上なかった。

そんな折、一人の少女が迷宮の前を通りかかった。紅い髪を長く伸ばし、革の鎧を身につけた少女だ。その少女の顔は姫といっても通りそうなほど繊細な美しさを誇っていたが、引き締まった細い身体を見る限りではシーカーのようだった。

彼女は騒ぎを見つけると、集まっていたシーカーたちに話しかけてみた。するとシーカーたちは魔王の方をちらつと見て困った顔をする。そのシーカーたちの様子に彼女はだいたいの事情を察した。

事情のわかった少女は魔王に近づいていった。そして貴族のように見える彼の機嫌を損ねないように、できるだけ丁寧に話しかける。

「あの、何をやっているのですか？」

「見ての通り、中に入ろうとしているのだ」

「……ぶっ」

魔王の返答に少女は吹き出しそうになった。赤い髪を揺らして、その小さく整った顔を歪める。笑いを堪えるのに必死なようだ。

「……あの、もしかして洗礼を受けてないのですか？」

「洗礼？　なんだそれは」

魔王はぼかんとした顔をした。少女はその様子にいいよ笑いを堪えられなくなってくる。笑ってはいけないとわかつてはいたが、限界が近かった。

「……くっ……誰か供の者から洗礼についてお聞きにならなかったのですか？」

「供の者など余にはそもそもおらぬ」

魔王の言葉に少女は彼を上から下までゆっくりと観察した。そして、恐る恐る彼にあることを尋ねてみる。

「供の者がいないって……もしかしてあなたは貴族ではないんですか？」

「貴族……ではないな」

「なんだ、脅かさないでよ！ 貴族にしか見えなかったじゃない！」

少女は貯まりに貯まっていた笑いを爆発させた。ほっそりとした腕で腹を抑えながらカラカラと鈴がなるように笑う。そんな少女に釣られて周りにいたシーカーたちも笑いはじめた。辺りの妙に重かった空気は一変し、軽くなる。

だがそんな中で、魔王はどうしてこんなに笑われているのかわからなかった。なので彼は戸惑ったような顔をして、前で笑う少女に尋ねてみる。

「……どこがそんなにおかしいのだ？」

「あはは……いやさ、この迷宮は洗礼を受けないと入れないのにあんたが無理に入ろうとしたから……笑えちゃって」

「なんだと。ううむむむ……」

魔王は唸り出した。実にまずい事態であつた。洗礼など魔王のすることではないし、だいたい魔王に加護を授けてくれる神などないだろう。だが、この迷宮には是非入ってみたい。

腕を組み、厳めしい顔をして魔王は考え込む。ダメでも洗礼を受けてみるか、もうあきらめるか。魔王の心の中が大きく揺らいでいた。すると、何を勘違いしたのか少女が笑うのをやめて、心配そうな顔をして彼に話しかけてきた。

「もしかしてあんた……迷宮に入れないと行く当てがなかったりするの？」

「そう言われればそうだな」

魔王は心ここにあらずといった様子で応えた。嘘は言っていない。もつとも、魔王にかかれれば行く先などどうとでもなるが。

すると少女は魔王の格好を値踏みするような目でみた。そしてぶつぶつと何か考え込むようにつぶやく。その顔はさきほどまでとは違って真剣そのものであつた。

「それならうちに来ない？　今から洗礼は無理だし、宿屋も空きがないわよ」

しばらくして少女は、魔王にとって予想外の提案をしてきた。魔王は不意に訪れた驚きで目を丸くする。とりあえずこの落ち着きたいと思っていた彼には願ってもない提案だ。しかし、一応礼儀としてもう一度聞き返しておこうと彼は考える。

魔族というのは、上位になればなるほど規律や秩序を重んじる。その最高位である魔王は、基本的には思慮深く礼儀正しいのだ。

「本当に良いのか？ 迷惑になるかもしれぬぞ」

「良いの良いの。だってあんたほつといったら死にそうじゃない。世間知らなさそうだし」

少女は魔王のマントと杖を指差した。そして少し呆れたように笑う。世間を知らないことは事実なので、魔王は言い返せなかった。ちなみに魔王が手に入れたチンピラ男の知識は、世間一般では役に立たない物ばかりであった。

「よし決定。私はシェリカ。よろしくね」

「余は魔王だ。世話になる」

魔王とシェリカは互いに見交わして笑った。シェリカはそうしてひとしきり笑うと、魔王を手招きしながら彼女の家へと歩いて行く。

こうして魔王はシェリカに連れられて、彼女の家へと向かったのだった。

## 第五話 同居人

### 第五話 同居人

迷宮都市の北部一帯。俗に富豪街とよばれるそこは、成功した一部のシーカーや豪商たちが競って屋敷を構える高級住宅街である。南部とは違って、立派な屋敷の並ぶそこはアウトローの多い迷宮都市らしからぬ閑静な場所であった。

そのはずれをシェリカと魔王は歩いていた。住む人間が夜の外出などしない人間ばかりからか、広い通りには人氣がなく閑散としていた。そのただっ広い空間を、二人のカツカツという足音だけが響いていた。

「ここが私の家よ」

シェリカは立ち止まると、一軒の屋敷を指差した。人の背丈よりずっと高い塀と、大きな黒鉄の格子でできた門が見える。その門の格子の隙間からは広い芝生の庭と噴水が見えた。さらにその奥には赤い色調の二階建ての家がそびえている。赤い煉瓦の壁に三角の屋根、さらに正面には広いバルコニーも見えた。

しかし長年手入れをされていないのか、庭に雑草は生え放題で噴水の水は緑に変色している。さらに建物の方も煉瓦の赤がくすみ、バルコニーの手すりが錆び付いているさまはさながら幽霊屋敷のようであった。

「……古いが立派な家だな」

「ぼろいが、でしょ。別にお世辞言わなくても良いわよ。さ、中に入りましょ」

そういうとシェリカは屋敷の門に手をかけた。鉄をギシギシと軋ませて顔を赤くしながら門をこじ開ける。そして野原のようになっている庭を抜けて、屋敷の中に入っていった。魔王もそのあとに続いて屋敷へと向かいその扉をくぐり抜けた。

屋敷の中はその外観に相応しく、豪奢であった。紅い絨毯が敷き詰められ、天井からはきらびやかシャンデリアが下がっている。だが絨毯は色あせ、シャンデリアは埃まみれであった。それに夜であるというのに、明かり一つついていない。

「さつきから人の姿が見当たらないが……。もしかしてこの広い屋敷に一人暮らしなのか？」

屋敷の中に明かりがついておらず、人氣がまったくなかったので魔王は半ば呆れたようにシェリカに尋ねた。これだけ広い屋敷なのだから、使用人の一人や二人は居るべきだろうと思われた。

すると、シェリカはどこか寂しげに顔を俯けた。白い肌に光が当たらなくなり、よりいっそう白く見えた。そしてシェリカは小さく口を開いた。さらにそこから物悲しい声を絞り出す。

「ええ、そうよ。お父さんとお母さんが死んじゃってね。使用人も昔はいたんだけど、給料を払えないから暇を出したわ」

家の中が石化した。魔王はシェリカの弱々しい様子に口をつぐむ。しばし、微かに流れる風の音だけがした。二人は沈黙したままだ。

月が陰り、ヒュウと一際大きく風が唸った。ここでようやく魔王は重々しく口を開ける。

「そうか、すまない。変なことを聞いたな」

「謝らなくても良いわよ。二人ともシーカーだったから……。そんなことよりもあんた、もう晩ご飯食べた？」

シエリカは話題を変えると顔を上げた。そして、魔王に向かって笑いかける。その笑みにはどこか陰があったが、魔王は気にせず笑ってシエリカに答えた。

「いや、まだだ」

「それじゃあ一緒にご飯にしない？ 私もまだなのよ」

「そうだな、そうさせてもらおうでしょう」

「じゃあこっち来て。ご飯にしましょ」

シエリカは食料のある厨房に向かった。魔王も誘われるまま着いて行き、シエリカと食事をとった。保存食中心の簡素な食卓であったが、魔王はおいしく食べられた。魔界の食べ物は総じてまずいかったのだ。

こうして食事を食べた後、魔王はシエリカに家の東にある小さな部屋へと案内された。茶色を基調とした落ち着いた部屋で、調度は必要最低限しか置かれていない。だが、埃っぽい屋敷の中でその部屋は手入れが行き届いていた。

「ここは手入れがされているな。良く使うのか？」

「まあね、景色が良いから。……それじゃ、また明日」

「うむ、明日な」

シェリカは自分から部屋のドアを閉めて去って行った。すとなすとなと軽い足音がだんだんと遠ざかる。それが聞こえなくなったところで、魔王は部屋にあったベッドに身体を埋めた。そして横にある窓からふと、月を眺める。

「月か……。魔界のものとはやはり違うな」

アルゲニア大陸の月は、魔界の紅い月とは違ってどこか悲しい光を帯びていた。その光を見た魔王はわずかに感傷的な気分になる。残してきた国や家臣のことが魔王の頭を満たしていった。

だがそこは魔王というべきか。精神力も人間比ではなくすぐに物思いにふけるのをやめた。そしてしばらくすると気を取り直して月を見ることをやめる。

その後は特に何事もなく魔王は眠りについた。そして彼は魔族にとつては眩しすぎる朝の日差しで目を覚ましたのだった。

「ねえ、物は相談なんだけど……」

「なんだ？ 言ってみるが良い」

シェリカの家の食堂で朝食を食べていると、シェリカがぼそぼそと魔王に切り出した。何を照れているのか、手を顔の前で盛んに動かしている。魔王はその様子に首を捻った。何を言うつもりなのかと。

「あんたさ、家に住むつもりはない？ お金は取らないから」

「なんだ、そんなことか。住ませてくれるのならむしろありがたいぐらいだ」

魔王はなんでもないかのように答えた。すると、シェリカの表情がみるみる明るくなっていく。よほど魔王と一緒に住めることが嬉しいようだ。

「そう！ 良かったあゝ。実はね、一人で少し寂しかったのよ。だからあんたを泊めたんだけどね。でもあんたボンボンみたいだからさ、こんな家すぐに出ていくんじゃないかな、って心配してたのよ」

「それなら心配いらない。余はこの家を気に入ったからな」

嘘ではない。魔王はこの家のことが本当に気に入っていた。彼の故郷である魔界にこの家の暗く寂しい雰囲気似ているのだ。もっとも、シェリカにはそういう理由だとは言えないが。

「ありがと。そうと決まったらご飯も食べたし、神殿に行くわよ。また昨日みたいにされたら同居人の私が恥ずかしいからね！」

「あ、ああ……」

シェリカは皿を片付けると、魔王の手を引っ張って強引に出掛け

ようとした。魔王はそれにおおいに戸惑う。

実はまだ、洗礼を受けるかどうか決めかねていたのだ。しかし、シェリカはそんなことお構いなしに連れて行こうとする。彼女は突っ立っている魔王の手を強く引っ張った。

「ほら、行かないの？」

「うつむ……仕方ない、あの結界の突破は難しそうだからな」

しばらくして、散々悩んだあげく魔王はシェリカに着いて神殿へ向かうことにした。洗礼を受けなければ迷宮に入るのが難しかったことと、何よりシェリカの押しが彼にそう決断させた。

魔王とシェリカは家を出て、神殿へ歩いた。すると、シェリカはシーカー克蘭の方向へと向かっていく。そして彼女と魔王はシーカー克蘭の前に来てしまった。

「ここの神殿だったのか……」

「知らなかったの？」

「ああ、なにぶん余はこの世……街に不慣れなのでな」

シェリカは魔王の世間知らずに肩を竦めると、克蘭の扉を開けて中に入って行った。そして奥の神殿へと入っていく。

魔王もシェリカに続いて神殿の中に入ってみると、存外に広がった。白亜の大理石の通路が広がり、太い柱が立ち並ぶ。克蘭に繋がっているのは数ある出入口の一つに過ぎないようで、神殿はシー

カー以外にもたくさんの人で賑わっていた。魔王はしばらく神殿という苦手な空間と人の熱気に圧倒された。

「え〜っと、あつ、その神官さん!」

魔王が固まっていると、通路の奥にシェリカが暇そうにしている神官の姿を見つけた。彼女はそのまま神官の方に走っていくと、大きな声で魔王を呼んだ。

「お〜い、こつちよ〜!」

「ちょっと待ってくれ」

魔王はシェリカの後に続いて神官の後ろに立った。すると神官は魔王たちの方に振り向く。神官は年若い少女だった。短めの白く光る銀髪と透き通る蒼い瞳が可愛らしく、肌も透けるように白い。

だが、神官であるはずの彼女はどこか黒い気配を漂わせていて、さらに不機嫌な顔をしていた。

「私は暇を満喫するのに忙しいの。用なら他をあたって」

「それは忙しいとは言わないわよ!」

「そう……仕方ないわ、何の用?」

少女はいかにも面倒くさそうに言った。どうにも仕事をするのが嫌らしい。シェリカはその態度に閉口しながらも魔王の肩をポンと叩いた。

「こいつの洗礼をお願いしたいんだけど」

「わかったわ……。ついてきて」

そういうと神官の少女は通路の脇の扉を開け、魔王を手招きした。魔王はシェリカの方を向いて困ったような顔をする。だが、彼女は頑張つてと笑うだけだった。

洗礼には一人で行くしかないらしい。そう悟った魔王はどこか重い足取りで神官のいる扉に向かった。その顔はとても曇っていた。

その様子に、神官の少女は生暖かい目をして、口元を抑えた。そして、魔王をして魔族のようだと思わせる笑いをしながら言う。

「くすくす……。後ろめたいことがあるのね。でも大丈夫、あなたが悪の代名詞のような存在でも神は加護してくれるわ。ただし、そういう神だけだね……。ふふふっ」

「そ、そうか」

魔王はギクツとした。少女の指摘はまさに凶星であった。まさかこの神官……と思つて少女の方を見る。しかし、少女はニヤツと腹黒い笑みを浮かべ、その氷のような青い瞳で魔王を見つめるばかりであつた。

「うふふふ……。安心したならこっちに来て。早くしないと私の休憩時間があなたの洗礼で潰されてしまうわ」

少女はそういうと扉の向こうへと消えた。魔王も渋々ながら扉の向こうへと向かう。

こうして魔王は多大な不安を感じながらも洗礼に臨むのであった。

## 第六話 混沌神

### 第六話 混沌神

神殿の奥深くにある洗礼の間。円形の空間に太陽光が射し込み、正面のステンドグラスが色とりどりに輝いていた。その床には星をもした魔法陣が金色に揺らめき、その頂点に一つずつ水晶が置かれている。

少女が魔王をそこに連れて来た時、すでに先客が何人かいた。彼らは魔法陣の前に一列に並び、緊張した顔をしている。少女は魔王をその列の最後尾に並ばせると、こほんと咳ばらいをした。

「あそこの魔法陣で洗礼の儀を行うわ。もし位の高い神に加護をいただければ能力が上がるから精々よく祈っておくことね。あと、洗礼の儀はかなり痛いから気をつけること。……他に何か聞きたいことは？」

「特にないな」

「そう、じゃあ私は戻るわ」

用がすんだので神官の少女はさっさと魔王を残して帰って行くとした。だがそこで、魔法陣の近くの椅子に座っていた神官らしき男が彼女を呼び止める。

「シア、そろそろ君の順番だ。戻って来なさい」

「むう……」

少女ことシアは頬を膨らませながらもしぶしぶ男の方へと歩いていった。そして男と入れ代わりで椅子に座る。彼女は仏頂面になりながらも仕方なく、仕事をはじめた。

「……今からは私、シアが洗礼を担当するわ。……それでは次の方、前へ」

「はい」

先頭に立っていたシーカーが魔法陣の中へと移動した。緊張からか足を引きずるようにゆっくりとである。そうして時間をかけて彼は魔法陣の中心へと到着した。すると、水晶球が青白い光を放つ。光はもやのように辺りをつつみながらも、やがて朧げな人型の輪郭を描いた。

「むむっ……」

魔王は急激に膨れ上がった神の気配に、思わず杖を手に取り身構えた。神がここに顕著しようとしているのだ。だが、神と戦うわけではないのですぐに構えをとく。

魔王がそうしている間にも、神はその姿を現した。ぼんやりとした光の塊がその輝きを増していく。

「汝は力を望むか？」

光の塊は心に染み入るようなずしりと重い声を発した。その問い掛けに男はただ頷くだけだ。

「では汝に我が力の一部を与えん」

神がそう告げると同時に、水晶から光が飛び出て男にぶつかった。すると男は顔を形が変わりそうなほど歪め、膝を屈する。身体全体から脂汗が吹き出していて、その息はすでに絶え絶えだ。

「うがああ！　ぐおお！」

男は聞く人間の耳を引っ掻くような大きな悲鳴を上げた。ステンドグラスがじりじりと揺れ、シーカーたちはその苦悶に満ちた様子に顔を歪める。

男がもはや叫ぶ力すらなくなったところで、水晶の光が収まった。男はぐったりと血の気のない顔をして立ち上がる。すると、水晶から再び光が放たれ男を包み込んだ。男の顔色が赤く変わっていき、その手足に力が戻っていく。

「終わりよ。戻って」

男があらかた回復したところで、シアは男に声をかけた。男は魔法陣からゆっくりと出て行く。そして鎧の中からクランカードを取り出した。

「やったああ！　大地神アーシア様だあ！」

男はカードを見ると大声を上げた。その様子に周りのシーカーたちのががやがやとどよめき始め、場が騒然となる。

「マジかよ。羨ましいなあ、おい！」

「すげえ、どんだけ神殿に寄付したんだ？」

シーカーたちは口々にささやきあい、さきほどの男に羨望の眼差しを送った。その一方で、魔王には何が起きたのかよくわからなかった。

「なんだ？　おい、何が起きたというのだ？」

首を捻った魔王はとりあえず前にいたシーカーに聞いて見た。するとそのシーカーは魔王を田舎者でも見るような目でみる。

「大地神、しかも最高のアーシア様の加護だぜ。みんな驚いて当然さ」

「ふうむ、余にはいまいちその凄さがわからんな」

シーカーの男はハアとため息をついた。そして魔王の方に呆れたような視線を送る。魔王はその態度に不機嫌になるが、何も言わない。すると男は、何も言わない魔王に少し得意な顔をして説明を始めた。

「あのな、神にも格があるんだ。それで格の高い神が加護してくればそれだけ強くなれるというわけなんだよ。えーと、確か大地神のアーシア様は五番目くらいに格の高い神だ。みんな羨ましくもなるさ」

「ほう、そういうことか。それでは逆に普通はどれくらいの格の神が加護をするものなのだ？」

「そつだなあ……。人からの受け売りだが、三十位ぐらいが普通で十位の加護ともなるとなかなか受けられないだそうだ。それで、三

位以上となると歴史上に一人しかいないらしい。そいつの名前はジーク・アルハルト。あの有名な聖銀騎士団の創始者だな。まあもともと、大昔の人間だから誇張されてるんだと俺は思うがな」

男は一息にこれだけのことを言うと、魔王にどうだ、とでも言わんばかりの顔をした。魔王はそれに素直にほうほうと頷く。すると男は気分が良かったのか、笑いながら再び前を向いた。

それからしばらくの間、特に大したこともなく洗礼は進行していった。そして、前の男も洗礼をすませてしまい、とうとう魔王の順番がまわってくる。

「次の方、前へ」

シアの呼び出しに従い、魔王は魔法陣の中心に立った。すると、水晶が不気味に紫に染まる。その様子にシアやシーカーはいぶかしげな顔をした。

「うーん、こんな色になるなんて……珍しいわ。面白い……」

「おいおい、ありやばくねえか？」

「まがまがしい……」

シアやシーカーに混乱が広がった。水晶は青く輝く物で、紫に染まるなどありえないのだ。そのことを知っているシアや一部のシーカーたちが、何が起きるのかと騒ぎ出したのだ。

魔王自身もただならぬ気配に身を固めた。神経を張り詰め、不測の事態に備える。すると、水晶から障気のような霧が噴き出して、

魔王の周りを包み込んでいった。

「これは障気……いや、微かに光の力も感じる……」

障気のような霧は魔王にも未知の物であった。少なくとも魔界に満ちている障気とは違う。微かに光の力が感じられたからだ。障気に光の力が混じるなどありえない。

魔王が霧の正体を考えあぐねていると、霧はいよいよ密度を増してきた。ステンドグラスにヒビが入り、太陽光がにわかに遮られる。魔王の後ろにいたシーカーたちは恐怖にかられて後ずさる。

「ろくでもない存在が現れるようだな」

魔王の鋭い感覚が何者かの接近を感じた。ひたひたとゆっくりだが確実に近づいてきている。光とも闇ともつかぬその存在は途方もなく巨大で計り知れない。下手に知ろうとしたならば、発狂しかないほどの存在だった。

「へえ、あなたが客人か……。なかなか面白いわね」

洗礼の間にどこからか若い女の物とおぼしき声が響いた。ただしそれは、聞きようによつては男の声にも聞こえるし、はたまた老人の声にも聞こえる。ありとあらゆる声がそれぞれに不協和音を奏でたような声なのだ。

その声を聞いた途端、洗礼の間にいた魔王以外の人間たちは脳の情報処理に限界をきたしたのか気絶した。およそ人間に耐えられる声ではないのだ。しかし、人ならざる魔王は超然とした態度で虚空を睨みつける。

「何者だ？ 貴様は神なのか？」

「人間や他の連中はそう呼ぶわね」

「ならば姿を現せ」

「いいわよ」

霧が一点に集まり始めた。そしてだんだんと人の形になっていく。その存在感はさきほどの大地の神の比ではなかった。文字通りの意味で存在している次元が違うのだらう。そのあまりの力に魔王すら背中に冷や汗を垂らす。

霧の塊の輪郭がはつきりとしてきた。若い女のような姿だ。長い髪を流し、ローブのようなゆったりとした服を着ている。その顔は秀麗で、各パーツの調和を限界まで突き詰めたような感じであった。まさに人知を超越した美しさであろう。

「私の名はヘカテ・メンリ。天地開闢の前より生きる古き神よ。司るものは混沌ね」

姿を現した恐るべき超越存在は、魔王にそう名乗ったのであった……。

## 第六話 混沌神（後書き）

あらかじめ説明しておきますと、今回登場した聖銀騎士団というのは改訂前の銀の杯のことです。改訂にともない名前を変更したのでよろしく願います。

## 第七話 はじめの一步

### 第七話 はじめの一步

暗雲立ち込める洗礼の間。そこは気絶した人間が重なり合ってたわり、ステンドグラスはひび割れ、凄惨な状況に陥っていた。

その部屋の中央で魔王と混沌たる神、ヘカテ・メンリは睨み合っていた。あたりの空気は張り詰め、時折火花を散らしている。魔王の顔は険しく、額から汗が滴っていた。

「なにゆえにここに現れたのだ？」

魔王は重い口を開くと、至極穏やかな口調でそう言い放った。それを聞いたヘカテ・メンリは目を細めてけらけらと笑う。

「なにゆえかって？ あなたが面白そうだからねえ、加護してあげようと思って。ただそれだけ、他意はないわ」

「ほう……」

魔王は少し驚いたように言った。そしてヘカテ・メンリの顔を見る。その顔は背筋を凍らせるような笑みを浮かべるばかりだ。

「他意はないようだな」

「ええ、わかつたくれたようね。それじゃあ形式に乗っ取りまして……。汝は力を望むか？」

へカテ・メンリはからかうようにそう言った。すると、魔王も目元を歪めて、その称号に相応しく不敵に笑う。

「ああ、望もう」

「よろしい、では汝に我が力の一部を与えん」

へカテ・メンリは他の神に似せたのか、重々しく威厳のある声でそう告げると去っていった。その存在感が空気に溶けるように消え、魔王の背筋が緩む。

だが次の瞬間、魔王の身体に激痛が襲来した。熱い物が皮膚の下や筋肉の中をうごめくような強烈な痛みと、果てのない違和感が魔王を襲う。しかし、魔王は無表情で眉一つ動かさない。痛みで騒ぐようなことは、彼の魔王としての矜持が許さなかったのだ。

「……ふう。収まったようだな」

魔王にとって長い時間が過ぎたところで、ようやく身体感覚が正常に戻った。その時、魔王の顔がわずかだがやつれたように見えただのが、洗礼の儀式の凄まじさを物語っていた。

水晶が光った。白い光が魔王の周りだけでなく、洗礼の間に満ちていく。すると、時が逆行していくように洗礼の間がもとに戻っていった。ステンドグラスのひびが治り、気絶していた人間たちが目を覚ます。

「終わったようだな、どれ……」

魔王は手を握ったり開いたりして身体の具合を確かめた。さらに、

指先から小さな炎を出して魔力の具合も確かめる。すると、わずかではあるが力や魔力が増えていたのがわかった。どうやら、これが混沌神の加護の効果であるようだ。

「むう、儀式が終わったのなら早く魔法陣から出て。後が詰まっているわ」

シアが魔法陣の中から出てこないに魔王に言った。冷静でそのない物言いは、さきほどのことなど知らないようである。どうやらヘカテ・メンリが気を効かせて記憶を改竄したようだった。それは他の人間も同様のようで、魔王は騒ぎにならなくてほっと息をつく。

「早くと言っているわ……」

「すまない、考え事をしていたのでな」

魔王はシアの冷たい声に、足早に移動した。そして、前に通った道を通ってシェリカのいる場所まで戻っていった。

「あつ、お帰り。結果はどうだった？」

通路の扉を開けると、早速シェリカが声をかけてきた。心配で待っていたようだ。魔王はその様子に苦笑いを浮かべる。

「それなりと言ったとこだった」

「はあ、それなりってあんた……。まあいいわ、ちゃんと加護されたいだし。……じゃあこれから迷宮へ行くから、あんたのカードを見せてくれない？」

シェリカは頬を膨れさせると、魔王が手に取っていたカードに視線を向けた。魔王はその行動に、変な顔をしてカードを背中後ろに隠す。

「どうして見たいのだ？ そなたには関係あるまい」

「関係ない訳ないでしょ。これから一緒にパーティーを組もうと思ってるんだから」

シェリカは腰に手を当て、ビシツと言いつつ。魔王はそれにきよとんと固まった。シェリカがどうしてそんなことを言うのか彼にはわからなかった。

「パーティー？ どうして？」

「はあ……あんたもシーカーで私もシーカー。それで同居してる。さらにお互いにソロで仲間募集中！ これでパーティー組まないなんてなかなかありえないわよ」

「……そういうものか？」

「そういうものよ！」

魔王はふうむと考え始めた。顎に手を当て、思考をめぐらせる。知識のない魔王にとってシェリカの知識は魅力的だった。だが、シェリカは足枷となりかねない。

しばらくして魔王は顔を上げると、見定めるような目でシェリカを見た。そして、軽いため息をつく。

「素質はあるな。ついて来るぐらいなら出来るか」

魔王はシェリカには聞こえない小さな声でそういうと、カードを改めて出した。そして、険しい顔であらかじめシェリカに注意しておく。

「シェリカ、何を書いてあっても騒ぐなよ」

「そんな、別に騒がないわよ。はいこれ、私のカードよ。……ふふ、何を書いてあるのかな……」

シェリカは魔王に自分のカードを手渡すと、ワクワクした表情で魔王のカードを見た。そしてみるみるうちに固まっていく。そして次の瞬間……

「レベル五百に混沌神の加護！ あんた、冗談は服装と行動だけにしなさいよ！」

固まっていたシェリカが爆発した。顔を赤く染め、炎のような勢いで魔王に詰め寄る。しかし、魔王は詰め寄ってきたシェリカを冷静に宥めた。

「騒ぐなと言ったであろ。落ち着け」

「騒ぐなって言われててもねえ、限度って物があるでしょうが！」

「騒ぎ立てたところで事実が変わらんぞ。落ち着くのだ」

魔王とシェリカのやり取りはしばらく続いた。だがとうとう、シェリカは怒鳴ることに疲れたのか肩をすくめて黙った。そしてまた

しばらく経ってから口を開く。

「もういいわ。強いぶんには困ることはないし。では早速、今から家に戻って迷宮へ行く準備をしましょうか」

「そうだな」

こうして洗礼を終えた魔王とシェリカは、迷宮へ赴くべく一端家へと戻るのであった。

陽光が街をあまねく照らし、腹を空かせた人々で街の店がいつぱいになる昼。迷宮都市の中央には今日も巨大なモニュメントのような石がそびえ、大きな影を作っていた。その影の中にある迷宮の入口に、二人のシーカがやってきていた。魔王とシェリカだ。

「昨日も思っただけど、あんたその格好で迷宮に入るつもり？」

シェリカは魔王の昨日から変わらぬその格好を指摘した。深紅のマントに黒い杖をついた魔王の服装は、どう見ても迷宮には向いてなさそうだったからだ。

ちなみにシェリカ自身は動き易さを重視した軽い革の鎧を着ていて、腰には剣を下げている。駆け出しのシーカーに良くあるスタイルだった。

「このマントと杖は共に最高級の品だ。これを超える装備などそうはない」

魔王は自信たっぷりにそう断言すると、杖を地面に叩きつけた。地面に敷かれていた石が割れ、深い亀裂が生まれる。

一方、杖の方はまったくの無傷だった。先端に付けられた繊細な装飾にもまったく変化は見られない。それが最高級の装備であることは明白だった。

「へえ、たしかに言うだけのことはあるわね。それなら装備に問題はないし、行くわよ」

シェリカは納得したようにそう言うと、迷宮の入口へと入っていた。魔王もゆっくりとその後に続いていく。

魔王がわずかながら緊張した面持ちで、迷宮に一步を踏み出した。迷宮を守る結果は働くことはなかった。魔王はようやく、迷宮に入ることができたのだ……。

## 第八話 迷宮第十階層

### 第八話 迷宮第十階層

「ほう、これは見事だ」

迷宮の中に入った魔王は、その光景に感嘆したように声を上げた。黒く光る石が紙一枚入らないほどの精度で組み合わせられた壁に床。高い天井は神秘的に輝き、迷宮の中を暖かく照らし出す。さらに、一定の感覚で壁がへこんでいて、そこに人の背丈ほどの緑色の結晶が置かれていた。その様子はまさに超越的存在が造り出した迷宮にふさわしい。

シーカーたちは緑の結晶を中心に集まっていた。彼らは結晶に手を触れると次々とどこかに消えていく。魔王が目をこらして見てみると、一瞬ではあるが魔法陣が浮かんでいた。どうやら結晶には転移の魔法が込められているようだ。

「すごいでしょ。ここが迷宮第零階層、転移の広間よ。みんなこのクリスタルで迷宮の他の階層へ向かうの」

シエリカは別に自分の物でもないのに少し自慢げに言った。そして、魔王をさきほどの結晶の前に連れていく。これがクリスタルのようだ。

「迷宮での階層移動は全部これを使うわ。使い方はね、手を触れて行きたい階層を言えばいいだけ。ただし、パーティーの中の誰が行ったことのある階層か、今いる階層の一つ下にしか移動できないからね」

「ずいぶん簡単だな。転移魔法はそう易しい魔法ではないはずだが……」

シェリカの説明したにあまりにも簡単なクリスタルの使い方に、魔王は少し驚いた。そして、クリスタルを軽く叩いてみたり、撫でてみたりして調べる。

だがその結果、魔王にも未知の技術が使われていることだけがあった。

「ちょっとあんた何やってるの？ クリスタルなんて調べても何もわからないわよ。学者が何年かけてもわかんないんだから。そんなことより、早く行くわよ」

魔王の不可解な行動に、シェリカは少し苛立ったように言った。その手はすでにクリスタルに置かれている。出かける気満々のようだった。

「それもそうだ。我らはこれを見に来たのではないからな。ならばシェリカ、そなたはどこまで深く潜れるのだ？」

魔王はシェリカのもつともな意見に、クリスタルから目を離すと、ついでに質問をした。シェリカは不意の質問に戸惑ったがすぐに答える。

「一応十階まで行けるわ。けどどうして？ まさかあんた……そこから行くつもりなの！」

「ああそうだが」

「あんたね、弱い初心者が最初から……ってあんたは強かったわね」

シェリカは注意しようとしたところで魔王がレベル五百だったことを思い出した。初心者だが、レベル的にはレベル十のシェリカの五十倍は強いのだ。十階層ぐらいどうってことはないはずだった。

「わかった、十階に行きましょう。ただし、迷宮の中は危険がいっぱいなんだからね！ 気をつけなさいよ」

「もちろんだ」

「よし、じゃあ迷宮第十階層へ！」

シェリカが気合いを込めてクリスタルに告げた。すると景色が歪み、浮遊感が魔王とシェリカを襲う。魔王は初めての感覚になんとも言い難い不快感を覚えた。

「気持ちの悪いものだね。毎回こんな感覚なのか？」

十階層にはすぐについた。歪んだ景色が元に戻り、魔王の目に見慣れない景色が広がる。だが、魔王は額にしわを寄せて頭を抑えた。その様子はちょうど、二日酔いをしたようであった。

「酔ったのね。でも慣れれば感じなくなるわ。ほら、そんなことよりも周りを見てよ！」

シェリカは魔王を立たせると、周りの景色を指差した。魔王はその熱心な様子に顔を上げて辺りを見回す。

「これはなかなかの物だな」

辺りには美しい鍾乳洞が広がっていた。滑らかな乳白色の鍾乳石が天井から下がってきていて、そこに滴る水が光を虹色に反射している。水は滴り落ちるたびにポシヤリと音を立てて耳に快い。空気はひんやりと清涼で、そのわずかな流れが爽やかだ。

魔王はその様子に感心したようにつぶやいた。その顔色はすでに酔いから回復しているように見える。さすが魔王、こういう場合の回復力も尋常ではないようだ。

「感心するのも良いけど、そろそろ行くわよ」

シェリカは感心しきりの魔王を引っ張ると、探索に出発した。曲がりくねった鍾乳洞の中を、二人はその天井に灯るわずかな明かりを頼りに進んで行く。辺りには水の滴り落ちる音と、二人の足音だけが響いた。

二人が奥に向かって歩いていくと、岩の陰から黒いモンスターがたくさん飛び出して来た。モンスターは人間の上半身ほどの大きさで、闇色の翼と刃のように光る牙を持っている。

「キラバットよ！　噛み付かれたら最後、血を吸い付くされるわ！」

シェリカはそう叫ぶやいなや腰から剣を抜き放った。鉛色の剣が鈍く輝き、閃く。長い髪がはらりと広がり、シェリカはキラバットを袈裟に切り裂いた。モンスターの悍ましい断末魔とともに鮮やかな血の花が咲き、シェリカの鎧が紅に染まる。その一連の動きは舞っているかのように流麗だ。

シェリカはその後も舞を続けた。一回、二回と鉛色の刃が閃くたびにキラバットの命は露となる。彼女はその白く華奢な身体を紅に染めながら、美しい顔に凄惨な表情を浮かべていた。その凜々しく戦う姿は天上の戦乙女に匹敵するだろう。

しかし、キラバットは無数にいた。しかも、後から後から無尽蔵とも言えるほど出てきている。これがこのキラバットの恐ろしいところだ。一匹では弱いものの、数の力で敵を圧倒するのだ。その数の暴力とも言えるキラバットの群れに、さすがのシェリカもわずかつつではあるが息が上がっていく。それを見ていた魔王は、キラバットの群れに煙たいような顔をした。

「うつとうしいな。余がまとめて退治してやろう。シェリカ、少し下がっておれ」

「わかったわ、任せたわよ！」

魔王は、そう言つてシェリカを下がらせた。そして彼女が自身の後ろに下がったことを確認すると杖を振り上げ、不敵に笑う。そのまがましい様子にキラバットは何かを感じてキイキイと騒ぐものの、手遅れだった。

「カッター・ストーム」

魔王の唇が呪文を紡いだ。杖の宝玉が魔性に輝き不可視の力、魔力が渦巻く。周囲の空気が引き締まり、痺れるようになった。その変化にシェリカは思わず身を竦める。

暴風とともに、無数の見えない刃が放たれた。刃は唸りを上げな

がら、キラバットを切り刻む。キラバットは悲鳴すら上げずに肉の塊へと変えられていった。鮮血の雨が降り注ぎ鍾乳石を紅く染め上げていく。辺りはたちまち醜悪な肉の塊と血が流れるのみとなっていた。しかし、その血や肉の塊は淡い光を放って無に還っていた。そしてそのあとには無数の球体だけが残される。

こうしてキラバットをあらかじめ倒したところで魔王は満足そうに頷いた。彼の前には無数の球と、魔法に巻き込まれたのか鋭利な切り口を晒す岩だけが残っていた……。

## 第九話 換金所にて

### 第九話 換金所にて

薄暗い鍾乳洞のような迷宮第十階層に魔王とシェリカはいた。彼らの周りには無数の黒い球が散乱していて、シェリカはその様子に咄然している。その目は飛び出しそうなほど開かれていて、口も半開きだ。

「さすがレベル五百……あれだけの群れを一撃とはね……」

しばらくして精神的に復活したシェリカは呆れ果てたようにつぶやいた。魔王が魔法で倒したキラーバットはたしかに弱いモンスターだ。だが、数十単位で一掃しようとしたらかなりの大魔法が必要だろう。とても、今のシェリカには無理な芸当だ。

数値の上ではわかったつもりであったが、この出来事でシェリカは改めて魔王の力を認識した。そして微かな畏怖と大きな頼りがいを感じるのであった。

「これで邪魔はいなくなつたな。先へ進むぞ」

「ちよつと待つて！ 魔力球を回収しなきゃ」

魔王が先へ進もうとすると、それをシェリカが呼びとめた。そして彼女は腰に付けているポーチに落ちていた球をどんどんとほうり込んでいく。魔王はその様子を物珍しそうに見ていたが、やがて小さな疑問を抱いた。

「こんな球をそんなに集めてどうするのだ？ それに、どうしてそのポーチは膨らまない？」

魔王はシェリカのポーチを指差した。すでにその体積以上に球が詰め込まれているはずのポーチは何故か膨らんでいない。シェリカはこりやだめだため息をつく、魔王の質問に答えた。

「はあ、戦闘力は最強だけど知識はルーキー以下ね。仕方ない、教えて上げるわ。この球は魔力球と言ってクランで換金できるのよ。だから集めてるの。で、このポーチはシーカー愛用のデラックポーチ。魔法が掛けられていてどれだけ物を入れても膨らまないし、重くもならないのよ」

「なるほど、それならば余も手伝ってやろう」

魔王はそう言う、球を集めるのを手伝い始めた。二人でやればさすがに作業は速く、たくさん落ちていた球もあつという間に少なくなっていく。

「これで最後だ」

魔王が最後の一つをポーチに入れた。シェリカは辺りを見回して他に落ちていないことを確認すると、立ち上がって腰をぽんぽんと叩く。

「全部拾えたようね。それじゃ先に行きましょうか」

シェリカはそう言う、とまた歩き出した。魔王も後から続いていく。二人で歩いていくその様子は娘とそれを後ろから見守る父のようだった。

その後は特に何事もなく探索は続いた。シェリカや魔王は軽い足取りで迷宮の奥へと進んでいく。時々現れるモンスターたちも、シェリカの剣と魔王の魔法の前に、またたく間に魔力球と化していた。

そうして迷宮を探索している時の魔王は散歩しているかのようなだった。いや、散歩よりも緊張感がなかったかもしれない。なぜなら彼がいつも散歩していた魔王城周辺には、野生の高級モンスターたちがうろついていたのだから。

「もう帰らない？ もう足と集中力が限界よ」

迷宮第二十階層。そのクリスタルの前で、ついにシェリカがそう提案した。彼女はパンパンに張った足を抑え、辛そうにしている。魔王がいるからそれほど負担はなかったにしろ、一度に十階も潜ったのはやはりきつかったのだろう。

「仕方ないな。戻るか」

「ええ、すまないけどそうしましょ」

シェリカは申し訳なさそうにうなずいた。こうして魔王とシェリカは今日の探索を終え、地上に戻ったのだった。

シーカークランの中にある換金所。迷宮で手に入る魔力球をはじめとするさまざまなアイテムを換金できるそこは、今日もシーカーで賑わっていた。三つあるカウンターをシーカーたちが入れ替わり

立ち替わり利用している。そこへ、魔王とシェリカがやってきた。

「あら、この間の魔王さん！」

魔王たちが向かったカウンターに座っていたのは、いつかの受付嬢であった。彼女は魔王とシェリカの姿を確認すると、にっこりと微笑む。

「そなたはいつぞやの受付嬢か。換金もしているのだな」

「はい、そうですよ。クランも人手が足りなくて。あなたこそ、こちらの女の子はお仲間ですか？」

「まあそんなところだ」

魔王と受付嬢はそのまま談笑を始めそうな雰囲気になった。だが、その流れをシェリカが打ち切った。彼女は魔王の前に出ると、カウンターの上にポーチを置く。

「そんなことは良いわよ。それよりこれ、換金して」

「はい、少々お時間を……あらら、ずいぶん集めましたね」

受付嬢はポーチをひっくり返すと、その中に入っていた魔力球の数に目を丸くした。そして虫眼鏡を取り出してひとつひとつ確認していく。

「全部で百二十三個、十二万三千ルドになりますね。……ふう、しかしよくこれだけ集めましたね。って魔王さんなら出来ますか」

受付嬢は一瞬訝しげな顔をしたが、相手に魔王がいたことを思い出した。魔王だったら何が起きても不思議ではない。

受付嬢は気を取り直すと、カウンターのの中から袋を取り出した。そして金貨を十二枚と銀貨を三枚シェリカに手渡す。シェリカはその金額に顔をほころばせた。

「結構あつたわね。今日はこれでご馳走でも食べるわよ」

シェリカはホクホク顔で換金所から出て行こうとした。するとその時、換金所の中の雰囲気が一変に変わった。そして換金所の入口付近にいたシーカーたちがざわめき始める。

魔王やシェリカが何事かと入口の辺りを見てみると、そこには十人ほどの異様な雰囲気のあるシーカーたちの姿があった。いずれも歴戦の強者という雰囲気を感じていて、鎧や服に揃いの銀のブローチを嵌めている。魔王が目を凝らして見ると、ブローチは杯とそれに巻き付く蛇をあしらった物であった。

「また嫌な連中が……。魔王、行くわよ」

彼らの姿を見ると露骨に顔を歪めたシェリカ。彼女はささ々と魔王の手を引いて換金作業をしている彼らの後ろを通り抜けようとする。

だがその時、集団の先頭にいた女が後ろを歩くシェリカに気づいた。そして彼女はシェリカたちの前に立ち塞がる。ちょうどシェリカと同じくらいの年の女で、水晶のような水色の髪と翡翠色をした瞳、そして何より顔に張り付いた仮面のような笑みが特徴の女だった。

女はシェリカの前に立ち塞がると、少し目を見開いた。そしてシェリカの後ろにいる魔王を何回か見ると、耳にかかる甘ったるい声でシェリカに話しかける。

「おやおや、私たちを無視していかれるお積りでしたか？ まったくずいぶん私たちのことがお嫌いのようですね。……それより、こちらの方はもしかしてあなたのお仲間ですか？」

「そうよ、悪い？」

「いえいえ、逆ですよ。私はむしろ私たち聖銀騎士団の誘いを頑固に断り続けていたあなたに、果たして仲間なんてできるのか心配していたくらいなのですからね」

女は形の良い薄い眉を寄せた後、すぐに芝居がかった動作でおどけて見せた。シェリカはそれを見た途端、きつい目つきで女を睨む。だが、女は軽薄な笑いを浮かべるだけだった。

「心配ありがと。でもこの通り、ちゃんとできたわ。……もう忙しいから行くわね」

「そうですね。ではご機嫌よう」

シェリカは何か言いたそうな魔王を引っ張って換金所から出た。そして拳をにぎりしめ、顔を真っ赤にする。そのただならぬ様子に魔王はシェリカに質問をした。

「あの女は？」

「あいつはユリアス。一応最強と言われてるギルド聖銀騎士団のリーダーよ」

「ほう、ならどうしてそんなに仲が悪いのだ？」

「あいつは気味が悪いのよ。それで生理的に合わないというかなんというか……。それに私の親が有名なシーカーだったからか、やたら熱心に自分のギルドに勧誘してくるし。でね、それを断り続けてたら仲が悪くなったというわけよ」

「そういうことが。たしかにあの女は得体が知れないからな」

そういうと、魔王はユリアスの目を思い出した。人間のものであるはずのその目からは、何故か魔族にも似た邪悪な気配が感じられていた。加えてその身体からどこか形容しがたい違和感を魔王は感じている。シェリカは無意識にそれらを感じてユリアスを避けていたのだろう。

「もうあんな奴のことは気にしないで置きましょう。お腹も空いたし、早くご飯を食いたいわ」

少しして機嫌を直したシェリカが魔王にそう告げた。魔王もそれにたいして素直に頷く。彼も腹は空いているようだった。

こうして意見の一致した二人は夕食を食べるべく街へと出て行った。だがその二人の姿を後ろからユリアスが目を細めて睨んでいた。

「あの男……どうにも気になりますねえ。ちょっと試してみましようか……」

ユリアスの微かなさやきは虚空に消えていった。そして、そのつぶやきに魔王やシェリカが気づくことはなかった。

## 第十話 酒場での話

### 第十話 酒場での話

迷宮都市は夜になると昼とは異なる顔を見せる。昼には営業しない酒場やその手の店が営業を始めて妖しい雰囲気醸し出すのだ。

あちこちに灯る明かりに朱く照らされながら、魔王とシェリカはそんな迷宮都市の繁華街を歩いていた。通りにはすでに酔っ払ったシーカーが眠りこけていたり、もはや服とは呼べないぐらい大胆な服を着た商売女が愛想を振り撒いていたりする。通りの酒場やそういう店はおおにぎわいで、夜だというのに昼以上の喧騒にあふれていた。

魔王は歩きながら騒々しい街の様子を興味深そうに見ていた。すると、前を歩いていたシェリカがくるりと横を向き、細い路地に入っていく。魔王はスツと眉を寄せた。

「どこへ行くのだ？ 店はこっちにあるだろう」

「私の行きつけの店はこっちなの」

「ほう、そうか。なら良いのだが」

魔王が納得すると、シェリカはすたすたと歩き出した。表通りとは違って暗い裏通りを足早に歩いていく。周りの建物からわずかにこぼれる光だけが、彼女の足元を照らしていた。

そうして少し歩いたところで、シェリカの前方に明るい建物が現

れた。暗い海にぼつんと浮かぶ光の島のような。それはどうやら酒場のようで、『ヒヨドリ亭』とかすれた文字で書かれた看板を掲げていた。

「着いたわ、ここよ」

「ふむ、なかなか趣のある店だな」

魔王はヒヨドリ亭の外観をあらかた見てうなずいた。時代を感じさせる木の看板に、わずかに苔むした壁。その扉はこじんまりと小さく、瀟洒な取っ手がついている。それらは全体として品の良さを感じさせた。

シエリカは取っ手を握ると、少し力を込めて引いた。木の軋むギシリという音が響いて扉がゆっくりと開かれていく。そして、扉が開かれると中から微かな酒の香りが漂ってきた。さらにその香りとともに、老人のものとおぼしき声も二人の耳に届く。

「おや、シエリカちゃんか。よく来たのう。……ややっ！ その男はもしかして彼氏か？」

「違うわ、ただの仲間よ」

「なんじゃ、びっくりさせおってからに。わしの心の癒しが取られたかと思っただぞい」

「心の癒しって……まあいいわ。魔王、こっちに来て」

シエリカはカウンターの真ん中の席に陣取ると、その隣の椅子をばんばんと叩いた。魔王はその言葉に従い、促されるまま椅子に腰

掛ける。椅子に座った魔王がざっと見渡すとカウンターには他に客はおらず、店全体でも数人しかいなかった。

マスターは二人が席につくと、水の入ったグラスを差し出した。さらにそれと一緒に薄い紙も差し出す。その紙の一番上にはメニューと書かれていた。

「何にする？ 私はブーフの石焼きステーキセットにするけど」

「ならば余もそれにあわせようか」

魔王はメニューに目を通した後でそう言った。それを聞いたシェリ力は手を挙げて、すぐにマスターに注文する。するとマスターは目を細めて満面の笑みを浮かべた。

「ずいぶんと景気が良いのう！ 何か儲かったのか？」

「今日はこの魔王のおかげで迷宮にたくさん潜れてね。だから結構稼げたのよ」

「ほう……」

マスターがにわかに手を止めた。そして持っていた包丁を置いて真剣な目つきで魔王を見る。その表情は陰しく、値踏みをしているようであった。その小さな身体から刺すような殺気が放たれて、魔王はそれに背筋を冷やす。

「なるほど……確かに凄まじい達人のようじゃ。……レベルはどう見ても百は超えとるの」

「良くわかったな。その通りだ」

魔王は感心した様子で老人を見た。すると、老人は照れたのか頭を力リ力リと掻きはじめる。魔王はそんな老人を見てわずかに緊張を緩めた。

二人を見ていたシェリカはホツと大きなため息をついた。そして、店の中をズイツと見渡す。シェリカの目に青い顔をして食事に行かない客の姿が飛び込んできた。

「ちよつとあんたたち、殺気の出し過ぎよ！ みんな怖がってるじゃない！」

「いや、すまんかった。昔の癖でついな……」

「余もやりすぎたな。すまぬ」

魔王とマスターはそういうとおとなしくなった。そして、マスターは注文の料理を二人の席に運んできた。鉄板の上でジュージューと音を立てるステーキは、いかにも美味そうである。魔王もシェリカもそれを見て、頬を緩ませた。

「いただきま〜す！ はぐはぐ……う〜ん、おいしい！」

「肉の味といい柔らかさといい、素晴らしい出来だ」

魔王もシェリカも次々と勢いよく料理を食べて、皿を空にしていた。マスターはそれを見てウンウンと頷いている。そうしてあつという間に二人は食事を平らげた。シェリカは満足そうに腹をさすって恍惚とした顔をしている。だがその時、ふと魔王があることを

口にした。

「……そういえばさきほど、昔の癖が出たといっていたがそなたはもともと何をしていたのだ？」

「うぬ？ ああ、わしも昔はシーカーをしておったんじゃ。これでも若い頃は闘神祭に優勝したこともあるのじゃぞ」

「闘神祭？」

魔王はあごに手を当てて首を捻った。そして困ったようにシェリカの方を向く。シェリカは魔王の言わんとしていることを察すると呆れたような顔をした。

「闘神祭といえば、毎年この迷宮都市で開かれる地上最強を決める武道大会じゃない。世界的に有名だけどあんた、知らなかったの？」

「閉鎖的な土地で暮らしていたのでな」

「閉鎖的ねえ……」

シェリカは疑わしげな顔になった。彼女は魔王の顔を細い目でじっと見つめる。魔王はその視線から罰が悪そうに目をそらした。それによって二人の間に何とも言い難い悪い空気が流れる。だがここで、マスターが気を効かせたのか二人に話しかけた。

「まあまあ、仲間なんじゃから仲良くしなさい。それより二人とも、肝心の探索はどこまで進んでおるのかの？ 五十階層を超えれば闘神祭に出られるぞい」

「二十階層までよ。でも五十階層かあ……まだ遠いわね。マスター、闘神祭まであとどれくらい？」

「えーと、確かあと一月ほどじゃったな」

「何とかいけるかな？ 魔王、どう思う？」

シェリカは身体を魔王の方に向けた。その目は上目遣いで何かを魔王に訴えかけているようだ。魔王はその目を見てしばし考え込む。

「一月か……。この迷宮に特別に強い門番のようなモンスターはいないか？ いないのであれば十二分に可能だろう」

「門番ねえ……。確か五十階層に巨大な龍がいるって聞いたことがあるけど、数百年もずっと眠ってるそうだから大丈夫よ」

「そうか、ならばよかったな」

魔王がそういうとシェリカは白い歯を見せてニツと笑った。そして、彼女は力強く宣言する。

「よし決めた！ 私たちの当面の目標は、五十階層まで到達して闘神祭に出ることよ！」

魔王はシェリカの宣言に笑ってこたえた。マスターもその様子を微笑ましく見守っている。こうして魔王とシェリカは、当面の目標として五十階層を突破し、闘神祭に出ることを決めたのだった。

## 第十話 酒場での話（後書き）

話の展開上、新キャラが登場しました。ですが今後の展開は改訂前から大幅に変えるつもりはありません。

## 第十一話 巨大龍、復活！

### 第十一話 巨大龍、復活！

魔王の迷宮初探索から一週間が経った。あれから二人は順調に探索を続け、今日も朝から迷宮に潜っていた。

「エイ！ ヤアア！」

薄暗い鍾乳洞のような迷宮第二十七階層。岩だらけで狭く水の滴るそこで、シェリカと魔王は襲い掛かかってきたモンスターと戦っていた。暗闇にあるわずかな光で剣先が煌めき、魔王の杖が風を切つて唸る。剣が光り、杖が唸るたびに二人を襲う小さな黒い影は、血と命を散らしていった。

二人に襲い掛かっているのはダークゴブリンというモンスター。黒い小さな子供のような姿をしていて、岩陰から飛び出して攻撃してくるモンスターだ。だが小さな身体に反してその腕力は強く、手に持つこん棒での打撃が厄介なモンスターである。

それをシェリカと魔王はさきほどからずっと相手にしていた。迫るこん棒を巧にかわし、すれ違い様に剣や杖での一撃を放つ。そうして一体一体、倒しているのだがなかなか数が減らない。相当大的きな群れに当たってしまったようだ。

「魔王、私はもうちょっと限界よ！ 一人でなんとかできる？」

「任せておけ」

腕が動かなくなってきたシェリカは魔王に後を任せた。後を任せられた魔王はシェリカの前に立つと、杖を構えて呪文を紡ぎ出す。

「カッター・ストーム」

暴風と風の刃が放たれた。刃は硬質な音を奏でて、死神の鎌よりしくダークゴブリンに襲い掛かる。またたく間にゴブリンの外皮は裂かれて血や醜悪な肉が飛び散り、迷宮の岩が紅に染め上げられる。何だったのかわからぬほど原形を留めなくなったゴブリンたちは、すぐに魔力球へと姿を変えていった。だが、キラーバットとは違ってゴブリンには多少の知恵があった。いくらかのゴブリンがすばやく岩陰に隠れて、吹き荒れる破壊と殺戮の嵐をやり過ごしたのだ。

「逃げるか。ならば……」

魔王の口が今度は違う呪文を紡いだ。辺りの空気がゾワリとして、ダークゴブリンたちはギャアギャアと奇声を上げる。そして手にしたこん棒を次々と魔王に投げつける。だがそんなもの通用するはずもなかった。

「ファイア・フロッド」

魔王の杖から炎が巻き起こった。炎は迷宮の中を赤々と照らし、熱の大洪水を起こしていく。ゴブリンたちはまたもや岩に隠れてやり過ごそうとしたが、圧倒的な熱波の前に岩の盾は役に立たなかった。竜巻のように渦巻く業火は岩ごとゴブリンたちを飲み込んでいく。その炎の前にゴブリンの身体はたちまち焼け焦げた。炭と化した外皮は崩れ落ちて、沸騰した血が身体中から吹き出す。吹き出した血は蒸発して、辺りに鼻が効かなくなりそうなほどの鉄の匂いが

充滿した。その地獄の中で、ゴブリンたちは魂を凍えさせるような断末魔を上げて、魔力球になっていった。

「終わったな」

魔王は血と肉の焦げた臭いに顔をしかめながら、そうつぶやいた。その言葉に後ろにいたシェリカもホッと一息つく。そのとき彼女の顔は青く、さきほど繰り広げられた光景に衝撃を受けているようだった。

「……ずいぶんたくさん居たわね。普通は出ても四匹がいいところよ」

「他のモンスターにも良く遭遇したからな。何かあるのやも知れん」

しばらくたつた後で魔力球を拾いながら、シェリカと魔王は眉を歪めた。いつもと比べてその数が多過ぎるのだ。モンスターというのは変化に敏感だ、こういう場合は何かある。嫌な予感を二人は覚えた。二人の背筋がひんやりとする。

その後二人は、大量に現れるモンスターたちに辟易しながらも、三十階層まで潜った。そして、シェリカが集中力と体力が限界を迎えたので二人は今日の探索を打ち切ったのだった。

二人が迷宮から帰ろうとしていた頃、迷宮第五十階層を一つのパーティーが探索していた。男一人に女三人という編成の彼らは、こなれた様子で迷宮を奥へと進んでいる。

迷宮第五十階層というのは三つの空間が連なるような形をしてい

た。最初のクリスタルが安置されている空間に、下へと下がるためのクリスタルがある空間、そしてその二つの空間の間にある巨大な空間だ。

その四人のパーティーは、今ちょうど始めのクリスタルがある空間を抜けて、中央の空間へと差し掛かるところであった。空間と空間の間にある人に倍する大きさを誇る鉄の扉をこじ開け、彼らは中に入っていく。

「り、龍ですう〜！」

彼らの目に小山のような龍の姿が飛び込んできた。わずかな光にもぎらつく刃のような牙に、燦し銀のような鱗。その身体は小山のように大きく背中の上に人が数十単位で乗れそうなほどだ。さらに生物として圧倒的なまでに高位のその存在は、極地の風のように凍てつくプレッシャーを放っていた。

その姿を見た神官服を着た少女は顔を強張らせて叫んだ。だがそれを見ていた戦士とおぼしき男は、キザな笑いを浮かべると少女の頭をくしゃくしゃと撫でる。そして、余裕ぶつた態度で少女に言った。

「あの龍はもう何百年もあおして寝ているんだそうだ。動くことはないよ」

「はふう……そうなのですか。なら安心ですう」

少女は頬を朱く染めて安心したような顔をした。男はそれを確認すると悠々とした態度で歩き始める。その後を、神官服の少女を含めた三人の少女たちはどこかふわふわとした足取りでついていった。

その時、彼らの足元がわずかに揺れた。四人の間に緊張が走り抜け、彼らは歩くのを止める。まさかと思って彼らは恐る恐る龍の方を見た。

すると、眠れる龍の下に魔法陣が浮かび上がっていた。紫に揺らめく光を放つそれは、巨大な龍を煌々と照らしだしている。そこからあふれる膨大な魔力は洪水のように辺りを満たしていった。

「やばくないですか、フレイトさま！」

「だ、大丈夫だ！ それにもし襲ってきたとしても俺が守ってやるからな！」

パーティーの少女たちがすがるような目で見つめると、フレイトことさきほどの戦士はどこか寒い笑いを披露した。そして、腰の剣を抜くと龍に向かって構える。だがその腰は引けていて、とても勝つ自信はないように見えた。

その間にも自体はどんどん悪化していた。魔法陣からあふれ出す魔力の量は増え、地面の揺れは大きくなる。数百年の歳月をかけて龍の身体に積もっていた埃や砂はあらかた舞い落ちて、その中から銀に輝く身体が現れ始めた。

そしてとうとう、龍の瞼が動き出した。数百年もの間、閉じられ続けていたそれがゆっくりと開いていく。その中からは白い光と殺気がほとばしり四人の身体を石のごとく固めた。殺気と魔力が交錯して辺り空中にバチバチと青い火花が咲く。

やがて、完全に目を開いた龍はギシギシと金属が擦れあうような

音を出しながら起き上がった。その身体は数百年の停滞から解放されて生命力がみなぎっていた。

「グアオオオ!!」

天へ届きそうな咆哮が迷宮内に轟き、空気が激震した。地面はわずかに裂けて天井から石が降り注ぐ。その雄叫びをまともに聞いた四人はその場にへたり込んだ。こうして龍が、実に数百年もの眠りから目覚めたのであった。

## 第十二話 仲間の必要性？

### 第十二話 仲間の必要性？

五十階層の龍の復活は、逃げ延びた四人のシーカーたちによって即座にクランに伝えられた。その噂はたちまち迷宮都市中に広まり、シーカーたちに騒ぎが広がる。その騒ぎの範囲には、シェリカや魔王も含まれていた。

「なんでも五十階層にいた龍が復活したそうよ……」

朝日に照らされたシェリカの家の食卓。そこでシェリカが困ったように切り出した。その顔はしょんぼりとしていて、元気がない。昨日、クランに張られた貼り紙を彼女は見たのだ。

だが、そんなシェリカの顔を見ても魔王はまったく動揺しなかった。そして彼はスープを一口啜るとシェリカの方にゆっくりと振り向く。

「大丈夫だろう。昨日の貼り紙にはすぐに対策をすると書かれていたではないか」

「確かにそうだけど……」

魔王の言う通り、貼り紙には確かに対策をすると書かれていた。だが、シェリカにはどうにも嫌な予感がしたのだ。それに、貼り紙にしても対策しませんなどと書くはずないのだから、あてにはならなかった。

シェリカが内心で不安になっている一方で、魔王はいつもと変わらぬ様子であった。温かいパンとベーコンエッグを行儀良く食べて、時折スープを啜る。しばらくして、それが無くなると、彼は探索の準備をするために部屋へと戻っていった。

そのまったくいつもと変わることはない超然とした態度に、シェリカは呆れたような感心したような不思議な気分になった。だが、そうして感慨に耽っているわけにもいかなかったので彼女も出掛ける準備をする。

こうして出掛ける準備をした二人は朝からクランへと出掛けていったのだった。

シーカークランにあるクエスト専用のカウンター。朝からたくさんシーカーたちが出入りしているそこで、クランの職員とシーカーたちが揉めていた。おなじみの受付嬢とユリアス率いる聖銀騎士団である。

「これは……一体……」

「書いてある通りですよ。なにぶん我々も忙しいものでしてね」

「しかし、これは……!!」

受付嬢はさきほどユリアスから手渡された紙を手に憤慨した。そこには大きく『依頼辞退届』と書かれている。ユリアスたち聖銀騎士団は、クランの出した龍討伐の依頼を受けないつもりなのだ。

普通、このようなクランからの依頼は義務でこそないが引き受け

るのが通例だ。それを突っぱねられたのだから受付嬢が怒るのも無理はなかった。

だがユリアスも彼女が怒ることくらい計算済みだった。彼女は口元を歪ませてにやりと笑うと、そのまま畳み掛けるように受付嬢へ話を始める。

「闘神祭まであとだいたい三週間。我々はその間、少しだって危険を冒すわけにはいきません。なにせ四連覇がかかっているのですからね。それくらいあなただってとくにご存知のはずですよ」

「それはそうかもしれませんが……」

ユリアスの主張は筋が通っていた。そのため受付嬢は言葉に詰まってしまう。しかし、彼女はここで認めるわけにもいかなかった。ユリアスたちが辞退すれば、他のギルドも辞退するのが目に見えていたからだ。

なので彼女は険しい顔をしたまま引き下がらなかった。すると、ユリアスの顔がだんだんと険しくなっていく。そしてその迫力に受付嬢が押され始めた時だった。

「まったく……。とにかく無理な物は無理なのです。ちゃんと言っておきましたからね。それではみなさん、帰りますよ」

ユリアスは苛立たしげにそれだけ言い残すと、ギルドのメンバーたちを引き連れてクランから出ていった。そのあとには呆然とした表情の受付嬢だけが残される。するとその時、魔王とシェリカがクランの中に入ってきた。

「あら、どうしたの？　ぽかーんとした顔して」

「あつ、シェリカさん！　実はですね……」

受付嬢は話かけてきたシェリカたちに事情をすべて説明した。するとシェリカの顔がどんどん赤くなっていく。ユリアスたちの行動に怒っているようだった。

「あいつ何を言ってるのよ！　私がガツンと言ってきてやるわ！」

義憤に燃えたシェリカは、足を踏み鳴らしながらユリアスの元へと歩いて行こうとした。その顔は赤く額に何本ものしわが寄っている。どうやら相当腹に据えかねているようだった。しかし、そんなシェリカの肩を魔王の手が掴んだ。

「ちょっと何をするのよ！」

「そなたが怒ったところでユリアスは態度を変えないだろう」

「だからって放っておくのはダメよ！　龍は誰が倒すの？」

「うっむ……」

魔王は少しばかり困ったように頭を捻った。彼は顎に手を当ててしばらく考え込む。そして、魔王が考えたあげく自分で倒そうと思った時、シェリカが妙案を思いついた。

「そうだ魔王。私たちで新しくギルドをつくってさ、それでこの依頼を受ければ良いのよ！　どのみち五十階層はいかなきゃならないんだし。魔王もいるし、強いメンバーを集めればきつとなんとかな

るわ」

シェリカはそういう魔王と受付嬢を交互に見回した。受付嬢の方は顔が明るくなり、すぐに頷く。そして、遅ればせながらも魔王も頷いた。

「そうだな。今ここを仲間を作っておくと後々に役立つかも知れぬ」

「よし、決定。じゃあ早速メンバーを三人集めるわよ。ギルドは五人以上じゃなきゃ登録できないんだから」

シェリカは魔王それだけ言つと、さらに準備することがあるからといって家に帰っていった。魔王も受付嬢に別れの挨拶をするとシェリカのあとを追いかける。

こうして二人はギルドを結成するべく仲間を集めることとなったのだった。

## 第十三話 真っ黒神官シア

### 第十三話 真っ黒神官シア

昼過ぎになり、けだるい太陽が迷宮都市を満たしている。その光をうつとうしく思いながら、魔王は自室の椅子で物思いに耽っていた。するとバタバタと足音が近づいてきて、部屋のドアがトントんとノックされた。

「魔王、入っていいかしら」

「構わぬぞ」

「そう、お邪魔します」

シェリカは部屋に入ると、わきに挟んでいた何か薄い紙を広げた。そしてそれを魔王に見せる。魔王はそれを見ると怪訝な顔をした。

「それは？」

「チラシよ、さっき作ったの。見てみて」

シェリカはそのチラシを魔王に差し出した。魔王はそれを受け取るとすぐにサツと目を走らせる。

「なるほど、良くできているな。だがこれには具体的なことが書いてないが良いのか？」

魔王はシェリカに不安そうな目を向けた。シェリカが渡したチラ

シには色鮮やかな文字で『パーティーメンバー募集中！ 詳しいことは一番通り八番地のシェリカ宅まで』としか書かれていなかったのだ。

「詳しいことを書くこうにも、紙に書くような実績がないじゃない」

シェリカはそう言ってふうつとため息をついた。魔王はたしかにそうだと言葉に詰まる。その魔王の様子にシェリカはニヤっと笑った。

「ま、そんなこと気にしないでいいわよ。チラシに頼れない分は私達が直接勧誘すれば良いんだから」

「たしかにそうだ」

魔王は目を細め、微笑んだ。それにシェリカも頷く。そうして二人は話し合いを終えると、朝食を片付け、出かけていったのだった。

シーカーたちで今日も混み合うシーカークラン。その片隅にある掲示板に、シェリカと魔王はチラシを貼っていた。魔王がチラシを抑え、シェリカがその四隅をピンで固定していく。

「これでよし！ さあ、勧誘しに行くわよ！」

「そうだな。だがどこへ勧誘しに行くのだ？」

「そうねえ、まず最初は神殿かしら」

「神殿？ どうしてそんなところへ行かねばならぬのだ？」

魔王は露骨に眉をひそめた。神殿が嫌いな魔王にとっては死活問題だった。しかし、シェリカはそんな魔王を軽くいなした。

「まず必要なのは回復役よ。それには神殿の神官が最適なの。だからよ」

「それはそうかも知れぬが……。神官という人種は苦手だ」

「苦手って……。神官はたいいてい良い人よ？　すぐに仲良くなれるわ」

シェリカはそれだけ言うのと渋る魔王を引っ張って行った。その途中からは魔王も諦めたのだろう。ゆっくりとではあるが自分から歩き出す。

そうして神殿へと向かって歩く二人。だがその姿を、クランに集まるシーカーたちの陰から見守る者がいた。

「いいわね……。ユリアス様の計画通りだわ……。ふふふっ」

闇色の傘を手にした妖艶な女は、その白く怪しい美しさを持つ顔を歪めて笑った。そのこぼれ落ちそうな豊満な胸元には銀のブローチが冷たく輝いていた。

昼過ぎという時間のせいか、人影も疎らな神殿。その中にシェリカと魔王が入ってきた。二人はそうそうに通路の端に移動すると、

話し合いを始める。

「いい、優秀そうな神官を狙うのよ。ただし、あんまり偉そうに見える人はやめてね」

「ふむ、わかった」

「よし、じゃあ勧誘するときは……」

シェリカは口に手を当ててじょうごのような形を作った。そしてそれを魔王の耳へと近づける。魔王の方も彼女の方へと頭を移動させた。だがその時、二人の後ろから不意に声がした。

「何をやっているの？」

二人が振り向くと、後ろにはいつかの腹黒そうな神官がいた。彼女はどことなくだるそうに二人の顔を覗き込んでいる。シェリカが辺りを見回すと、神殿にいた人の大半がシェリカの方を見ていた。その恥ずかしさのあまり、シェリカは思わず顔を紅潮させる。

「たっ、大したことはないわよ！」

「ふふ、そう。ならかまわないわ」

神官はにっこり笑って満足そうにそう告げると、神殿の奥へと去っていった。神官がいなくなるとシェリカと魔王は一息ついて、気を取り直す。

「恥ずかしかった……。さてと魔王、神官を勧誘するわよ。私があつちに行くからあんたはあつちで頼むわ」

シェリカは魔王と反対側を指差していった。魔王はそれに深く頷いて了解する。二人は二手に別れて歩き出し、神官の勧誘を始めた。

「はあ……なかなか難しいわね……あんたの方は？」

数時間後、シェリカがくたびれたような顔をして戻ってきた。力の抜けたような様子からして、勧誘は上手くはいかなかったようだ。それにたいする魔王もろくな結果ではなく、肩をすくめて首を横に振る。

「はあ……」

二人の口から同時にため息が漏れた。あきらめにも似た停滞感が二人を覆う。不安だけが今の二人の友達だった。

「あなたたちまだいたのね」

さっきの神官が二人に声を掛けてきた。声には少しの呆れと、何をしているのかという興味が多分に含まれていた。

「さっきの神官さん？ 実は私達……」

シェリカが神官の質問に自分達の事情の説明を始めた。龍が目覚めたこと、自分達がそれと戦うべく仲間を集めていること……シェリカはそういった事柄がある程度神官に話してしまった。

すると神官は口元を抑え、くすくすと笑いだした。とても神に仕える者とは思えない底知れない笑いだった。

「くすくす……面白そうだね。……そうね、シーカーって儲かるの？」

シェリカが説明を全て終えたところで、神官はニタニタとしながらそう言った。シェリカはその質問に妙な顔をしたが、すぐに答えた。

「たぶん儲かると思うわよ」

「具体的にいくら？」

「週に三、四回探索して一回あたり七万から八万ルドかしら」

「……！」

神官は蒼い目を極限まで見開いた。そして、懷からそろばんを取り出すと神業的な速さで弾く。やがてその計算が終わると、彼女は花が咲いたような満面の笑みで二人に告げた。

「私が仲間の話を引き受けるわ。私はシア、よろしくね！」

その時、シアの目には大きくルドのマークが浮かんでいるように二人には見えた。

## 第十四話 貧乏侍サクラ

### 第十四話 貧乏侍サクラ

太陽がやや沈んできた黄昏れ時。夕日に照らされた白亜の神殿の中で、魔王とシェリカは固まっていた。二人は石になったように動かない。それをシアは奇異な眼差しで見っていた。

「どうしたの？ この私が仲間になってあげても良いって言っているのよ」

シアはからかうように、なおかつやたらと偉そうな態度で言った。それにたいしてシェリカは苦笑いをして応える。

「……こいつと相談するから少し待っててね」

シェリカは魔王を引つ張り通路の端に移動した。そして魔王と額を寄せると、ひそひそと話し合いを始める。もちろん、シアに聞き取られないように細心の注意を払いながらだ。

「あの子、仲間にして大丈夫かしら？ どこからどうみても金の亡者よ」

「余にもそのように見えるが……他にいないのだから仕方ないだろう」

「うう、そこを言われると……妥協せざるおえないわね」

話し合いはものの十秒で終わった。そもそも残念なことだが、話

し合う余地などなかったのだ。シェリカは蒼い瞳を燃え尽きたようにしてシアに向き合う。

「ありがたく仲間に迎えさせてもらうことにしたわ。私はシェリカ、こつちが魔王。これからよろしくね！」

シェリカは満面の営業スマイルを浮かべて、空元気いっぱい挨拶した。それに続いて魔王も会釈をする。すると、シアもまたお世辞いっぱいの笑顔で答えた。ただし、ニコツではなくニタツといった笑顔だったのだが。

「ではあらためて、よろしくね。……ふふふ」

二人はどことなくぎこちない握手をした。続いてシアは魔王とも握手をする。その後、三人は顔をほころばせて柔らかに笑いあった。

こうして三人は曲がりなりにも仲間になったのだった。

宵闇に沈む迷宮都市。その南の地区に魔王とシェリカは来ていた。さらにシアも神殿にさっさと届け出を出して二人について来ていた。シーカーの支援も仕事としている神殿は、神官がシーカーになることを修行の一貫として認めている。だがそれでも、手続きに丸一日はかかるはずなのだが……。不良神官シアは仕事をサボったらしい。

三人が来ていた南地区はいわゆるスラムである。そのため街はボロボロで通りの石畳みは剥がれ、地面が露出していた。さらに周囲の建物は煉瓦が欠け放題、壁に落書きはされ放題。いかにも浮浪者らしきボロを纏った人間や、髪の毛を尖らせた男たちが闊歩してい

て治安は最悪だ。

「ねえ……。あんたの知り合いのシーカーってこんなところに住んでるの？」

シェリカが疑わしげな顔をしてシアに尋ねた。三人がこんなところに来ていたのは、シアの情報があつたからだ。いわく、仲間になつてくれそうな知り合いのシーカーがここにいます。

「大丈夫。私の記憶力はパーフェクト」

「そうなの？　ならいいけど……」

眉を歪めて自信たつぷりな様子のシアに、シェリカも魔王も胡散臭いと思いつつも納得した。二人は眉を寄せながらもシアについて歩くのを続ける。

三人がそうしてしばらく通りを歩いていると、一軒の酒場が見えてきた。壁に落書きがされていて、看板は傾いている。その中からはきつい酒の匂いと、がやがや馬鹿騒ぎをする男たちの声が漏れてきていた。

「確かここにいるはず」

蹴られたのだろうか、外れかかった酒場の扉をシアが指差して言った。シェリカと魔王は騒然としている酒場の様子に顔をしかめる。まるでどこかの闘技場のような雰囲気のところだった。

「本当にここなの？　だんだんあんたの紹介しようとしてるシーカの素性が心配になってきたわ」

「余も少しばかり……うつむ」

「ふふ、それについては心配いらないわ。ばか正直で凄いい美人の侍よ」

「侍？　へえ……珍しいわね」

シエリカは興味津々な目をしてシアを見た。侍といえばここから遙か遠い東方の剣士のことである。迷宮都市には世界から人が集まるといつても、珍しい存在には違いなかった。

侍ということには魔王も聞き覚えがあるようであった。彼はどこか遠い目をして虚空を見据える。昔のことを思い出しているようである。

「ふむ侍か……。だが侍といえば堅物な者が多かった覚えがあるな。それがどうしてこのような街におるのだ？」

「なんでも宿で寝ている間に路銀と刀を盗まれたんだそうよ。私が彼女と知り合ったのも、私が困ってた彼女にお金を貸してあげたのがきっかけ」

「そうなんだ。運の悪い人もいるのね……。ってあんた神官なのに人に金貸したの？」

「ええ。悪い？」

「悪くはないけど……。ちなみに利率はどれくらい？」

「トイチよ」

「ダメだこの子。シェリカはとっさにそう思った。そのため彼女は黙り、しばらく沈黙が訪れる。」

するとその時、酒場の中から激しく言い争うような声が聞こえてきた。

「おいこらてめえ、なに人の服に水をかけてくれてんだおらあ！」

「それはそっちの言い掛かりだ。私は知らん」

「ああん？ なめとんのかわれえ！ 外に出やがれ！」

怒号とともに、女が外に突き飛ばされてきた。継ぎ接ぎだらけの紅の着物と藍の袴を着た女だ。彼女は艶やかな長い黒髪を肩に流すと、吊り目がちな目で宿の中を睨む。その様子は一幅の掛け軸のようで様になっていた。

女が吹き飛んできたすぐ後に、中から大男が出てきた。男は着物の女よりも頭二つ分ほど背が高く、がっしりと筋肉のついた身体をしている。

男は下品な笑いを浮かべ、剣を手でぶらぶらとさせていた。それを女は貫くような眼差しで睨んでいる。まさに一触即発。いつ戦いが始まってもおかしくない。

「た、大変！ 魔王、助けるわよ！」

「待て、あの女はできる。わざわざ我々が手を出すまでもない」

魔王はそういうと唇を少し上げて微笑んだ。シアも着物の女の実力について何か知っているのか、ニタニタと笑っているだけだ。シエリカは二人の様子に、助けに行くことをやめて見守ることにした。

「サクラ、お前の腰にあるのが刀じゃなくてただの竹の棒だって俺は知ってたんだぜ？ 痛い目みたくなかったらさっさと金払いやがれ。……まあ、金がないようだったらその身体でも良いけどな！」

男が女ことサクラの波打つ胸を見て、よだれを垂らしそうなほど鼻の下を伸ばした。そしてその大きな果物ほどありそうな膨らみに勢い良く手を伸ばす。しかし、サクラはその手をぴしゃりと払い退けた。

「誰がお前など相手にするか」

「いいやがったな！ 後悔してももう遅いぜ！」

男は大きく剣を振りかぶった。サクラも腰に手をかけ、刀を少しだけ引きだす。だが、鞘から見たのは銀色の輝きではなく茶色の物体だった。

「マジでそれでやり合うつもりか？ まあいいぜ、お前が怪我するだけだからな！」

男は気合いと共に剣を振り下ろした。人の背丈ほどもあるつかという巨大な鋼の塊が空を切り、唸る。その重量に見合う破壊力を持つであろう剣がサクラに向かって突き進んでいった。だが、サクラはそれを見据えても逃げることはなかった。

シェリカはその脳裏を過ぎったサクラの末路に耐え兼ね、目を閉じた。キシンと鉄がぶつかったような音が彼女の耳をつく。その後、地面に何かが落ちたような音もした。

「そんな馬鹿な……嘘だろ……」

しばらくして男のつぶやくような弱々しい声が聞こえてきた。シェリカはその声に、何事かと固く閉じていた目を開ける。すると……

「なんで剣が真つ二つになってんのよ……」

中心を、くつつけたらまた一つに戻りそうなほど美しく分かれた剣。それを見て地面にへたれこみ、口をぱくぱくさせている男。そしてそれを見下ろしているサクラ。シェリカの目にありえない光景が飛び込んで来たのであった。

## 第十五話 集まる仲間

### 第十五話 集まる仲間

闇に沈んだ夜のスラム街。ヒヤリと風が吹き抜けるその真っ只中に、魔王たち三人はいた。三人とも、前方にいるサクラと大男の様に視線が釘付けになっている。特に具体的には、竹光によって斬られたとおぼしき剣に視線を注いでいた。

「魔王、何が起きたのよ！」

「気をつかったのだな」

「気？ でも気を使っても竹じゃ鉄を斬るのは無理よ」

「ふふふ、それがサクラにはできるのよ」

シアが突然、魔王とシェリカの会話に割り込んできた。そしてさらに気味の悪い笑みをこぼす。そのシアの表情にシェリカは容赦のない目を向けた。

「どういうことなの？」

「サクラはああ見えて千年続く対鬼剣術の流派、北神星明流の継承者。愛用の『秋雨』でなら金剛石だって斬れると豪語してるほどの達人なの。だから気を纏わせた武器で剣を斬るぐらい、簡単はず」

「へえ……。凄いのね……」

シェリカは感心したように頷くと、サクラに憧憬にも似た眼差しを送った。その目は純粹で曇りはまったくくない。

一方、見られている方であるサクラの側には少し変化があった。呆然としていた大男が突然、サクラに詫びを入れてきたのだ。

「ゆっ、許してくれよ……なっ頼む！」

大男は地面に血がでそうな勢いで頭を擦りつけていた。その大きな身体が卑屈に小さくなっているのは、いかにも哀愁が漂っている。その背中は冷や汗なのか尋常でなく濡れていた。

大男の情けない姿と言葉にサクラは何も言わずに竹光をしまう。その目は男に呆れたようだった。それに助かったと思った大男はサクラにハイコラ頭を下げて走り去っていく。

「まったく。困った奴だ」

サクラは肩をすくめてため息をつく、酒場の中へと戻っていくとした。そこでシアがサクラの肩を叩き、声をかける。

「サクラ」

「おおっ！？ これはシア殿。……すまぬが金の都合はまだ……。酒場でのバイトの話が上手くいかなくてな……」

サクラはシアに気がつく、と申し訳なさそうに頭を下げた。さらに両手で拝むようにして、上目遣いでシアを見る。達人といえども、金を借りている以上シアにサクラは頭が上がらないらしい。

「今日は別にお金の催促に来たんじゃないわ。ほら、二人ともこっちに来て」

シアはサクラに顔を上げさせると、魔王たちを呼んだ。サクラは近づいてきた魔王たちをきよとした表情で迎える。

「この方たちは？」

「私のシーカー仲間よ。今一緒にギルドを立ち上げようとしているの。こっちがシェリカで、こっちが魔王。仲良くして」

シアは二人の紹介を簡単にした。それにサクラは納得すると、乱れていた着物を整えて自身も自己紹介をする。

「そうか。私はサクラ、東方から来た侍だ。修行の旅であちこちを巡っていて今はこの街でシーカーをしている……と言いたところだが、荷物を全部盗まれてしまったな。見ての通り、迷宮にも潜れずその日暮らしだ」

サクラはそういうと顔を俯けてしまった。嫌なことを思い出してしまったようだ。場が何となく気まずい雰囲気となり、四人は沈黙した。しばらくして、沈黙に耐え兼ねたシェリカが場の空気を変え、るべく話を切り出す。

「……えーと、サクラさんだけ。今、シアも言ったと思うけど私たち仲間を探しているの。あなた強そうだし、仲間になってくれなにかしら」

「うーん、困るなあ……。今の私にはまともな得物すらない。こんな状況で仲間になつては迷惑をかけてしまう」

「迷惑なんかじゃないわよ！ 高いのは無理だけど安い刀ぐらいなら用意してあげるわ」

「しかしそこまで世話になるのは……」

サクラは押し黙った。首を前に傾けてウンウンと唸っている。提案を受けるべきかどうか考えているようだ。だがそこで、魔王が囁きかけるようにつぶやいた。

「借りた物は返せば良い。だが、時は還らぬぞ。決断は早くすることだ」

魔王の言葉が重々しい響きをもってサクラの心に染み入った。すると、サクラの目が変わった。そしてゆっくりと顔を上げる。

「……わかった。このサクラ、武士道に誓ってそなたらの仲間となる」

サクラはそう仰々しく宣言したあと、はにかんだような笑顔を見せた。三人もそれに微笑みで応える。

こうして、また新たな仲間が増えたのであった。

迷宮都市の北地区。俗に富豪街と呼ばれるこの地区の端に、シェリカの家は今日も変わらず佇んでいる。シアもサクラも今日からの屋敷に泊まることになった。しかし……

「ひどい……詐欺なの。富豪街の家なんて言うから期待してたのに……。とっても弱い私にこんな劣悪な環境で暮らせというのね」

「す、すばらしい家だな！ えっと……とにかくすばらしい家だ！」

ボロボロの屋敷の様子に、嘔泣きをしてごねるシアに強張った顔で必死に褒めるところを探すサクラ。その様子に、シェリカは額に指を当てて呆れた。

「はあ、騒いでも家は立派にはならないわよ。ほら、さっさと入るわよ。いい加減あきらめなさい」

「むう……儲かったら手入れさせてもらうわ」

きつぱりとした態度で言い切ったシェリカに、シアも膨れながらもあきらめた。サクラも若干の家の雰囲気を引き気味になりながらも、家の門をくぐり抜ける。

その後、シェリカの案内した部屋にシアが恨み言を言ったり騒いだりしたが、サクラは慣れているのかこれといって文句を言うことはなかった。そのため、シア以外の三人はそれなりに平穏な朝を迎えたのであった……。

## 第十六話 魔王と買い物

### 第十六話 魔王と買い物

朝日にサンサンと照らされたシェリカの家。朝特有の爽やかな空気が家の中を隅々まで満たしている。その清浄な雰囲気漂う食堂で、シェリカはたちは何故か疲れた顔をしていた。

「さつさと認めたら？ その方が楽になるわよ」

シェリカが呆然としているシアとサクラに諭すように語りかけた。二人はどこか気の抜けたような表情でコクリと頷く。その手には魔王と書かれたカードがあった。魔王のステータスを二人は見たのだ。

「……無駄のない身体つきに漂う強者の気配。嘘ではないようだ……」

サクラは魔王をひとしきり観察した結果、フウとため息をついた。レベル五百というのは本当のようだとサクラは本能的に悟ったのである。気配や身体つきが常人とはわずかではあるが違うのだ。

「二人ともわかったようね。なら今から買い物に行くわよ」

シェリカは二人が落ち着いたことを確認すると、高らかにそう宣言した。それにたいして魔王が怪訝な顔をする。

「仲間探しはどうするのだ？ あと一人足りぬのであろう？」

「あんたねえ、サクラにあんな格好で仲間探しをさせるつもり？」

みつともないわよ」

シェリカはサクラをちらつと見たあとで魔王にたしなめるように言った。その言われように顔を赤くして怒鳴ろうとするサクラ。しかし、彼女がそれをすることはなかった。

「悔しいが文句は言えんな……」

継ぎ接ぎだらけでくたびれた着物に袴。それらはもう何日も洗われていないのか、汗で黄ばんでいる。さらに、ろくに舗装もなされていない場所で生活していたためか砂などがこびりついていた。

サクラの身体自体は清潔なようだが、正直近づくのはご遠慮願いたいような格好を彼女はしていた。ちなみに、シェリカやシアがそれを見兼ねてサクラに服を借したのだが、彼女は着ることができなかった。胸がつかえて入らなかったのである。

一応、シェリカとシアの名誉のために言っておくと二人のそれは小さいどころか非常に豊かである。

「じゃあ行きましょう。買い物のお金は私がサクラに貸すわ。十日で一割で勘弁してあげる」

サクラが黙っていると、シアが懐からひよこの形をした財布を取り出した。財布はパンパンに膨れていて、ひよこのはずがニワトリのような大きさだ。

シアが財布のがま口を開けると、中には金色の硬貨が溢れ出しそうなほど詰まっていた。驚いたことに、財布の中身は全部金貨らしい。

「あんだどうやってそれだけの金を稼いだのよ……」

「皆様からのお志を私が少しずつ預かって貯めた。でも大丈夫、運用して増やして戻すもの」

シアはシェリカの質問にさらりと答えた。悪いとはまったく思っていないらしい。シェリカは神官の恐ろしさを垣間見たような気がした。

「サクラ、お金は私が払ってあげるわ。シアからは借りちゃだめよ」

シェリカはしばらくしてそうつぶやくように言った。それにサクラは黙って頷いたのだった。

迷宮都市を中心に横切る大通り。そこはいつでも混沌とした賑わいを見せていた。石畳の広い通りにテントの露店商からしつかりした店構えの少し高級店、さらには怪しげな店まで様々な店が軒を連ねている。その通りをに行き交う人も同様にシーカーから近所のおばさん、小金持ちのオッサンまで実に種類が豊富であった。

「なかなか賑やかなところだな」

「ええ、この迷宮都市の中心だからね」

初めてここに来た魔王は感心したように辺りに見回していた。魔界にはこれだけの活気がある場所などなかったのだ。なので、彼は興味の赴くまま視線をあちこちに飛ばしている。

シアやサクラも普段はあまりこないのか、魔王と似たような感じでキョロキョロとしていた。

「おっ、あの店など良さそうではないか？」

そうやって通りを歩いていると、サクラが一軒の店を指差した。その軒先にはたくさんの服がかけられていて、中にはサクラの着ているのと似たような着物があつた。サクラはそれをたまたま見つけたようだった。

「サクラが良いって言うならあそこにしましょ。魔王もシアもそれで良い？」

「私は別にどこでも構わないわ」

「余も特にこだわりなどはないな。好きにするが良い」

「そう、じゃ決定ね」

シエリカは二人の返事を聞くと、雑踏を越えて早速店へと足を踏み込んだ。魔王たちもまたぞろぞろとその後が続いていく。

店内はところせましと服やら鎧やらアクセサリーやらが積まれていて、移動にも苦労するほどであった。およそ着ることに関する物を全て集めたかのように、統一感が感じられない。

「すみませ〜ん、誰かいませんか？」

店主の姿が見当たらなかったのも、シエリカが声を張り上げた。すると、どたばたと足音を踏み鳴らしながら店主が現れた。店主は

天井が低く見えるほどの大男で、異様な風体をしていた。

彼は女物と思われるピッタリサイズのワンピースを着て、頭は紫色に染めていた。髭の剃り後の残る顔には派手な化粧をしていて、全身から甘ったるい香水の匂いを漂わせている。

その張り裂けそうなほどの筋肉とド派手な化粧の組み合わせは、四人の視覚へ殴りかかった。その衝撃に、四人は言葉も出ない。

「ようこそ、服飾の店マリーへ！ 歓迎するわ〜」

「ど、どうも。この子の着物を探しに来たんですけど……」

シエリカは片言で用件を伝え、サクラの肩をポンと叩いた。すると、店主はサクラの身体を入念に見つめ始めた。その眼光は鋭く、サクラの身体を貫きそうなほどだ。サクラはその鬼神のごとき目つきと迫力に身体を強張らせる。

「着物じゃちよつと身体のラインがわからないわね。触ってもいいかしらん？」

「あつ、ああ！ 構わないぞ」

サクラが質問にひっくり返ったような声で答えると、店主はサクラの身体を触り出した。指輪をじゃらじゃらと嵌めたゴツい手で揉むようにサクラの身体を触っていく。

「あなたやつぱりすごい身体してるわねえ。触ってよかったわ〜ん。目測でサイズを決めてたらおっぱいの部分がはちきれてたわよん。まったく羨ましい限りだわ〜」

「はあ……そうなのか」

一通りサイズを確認した店主は自身の屈強な胸板をさすりながら笑った。しかし、サクラはすでに上の空。店主にツツコミを入れるゆとりすらなかった。

「サイズも測ったし、さつさと服を決めましょうね。ああでもこんなサイズは倉庫にしかないわね。しょうがない、みんなついて来て」

店主はサクラを強制連行しながら奥に引っ込んでいくと、残った三人を呼んだ。シェリカたちはしかたなく覚悟を決めて歩き出す。しかし、一人だけ歩き出さない者がいた。

「魔王、ついて来ないつもりなの？」

シェリカが魔王にたいして恨みがましく言った。すると魔王はにべもない返事を返す。

「余は男だからな。女の服を選ぶのについて行くのは不自然である」

魔王の意見はごくごく普通であった。なのでシェリカとシアは殺気の籠った目つきで睨むものの、反論はできなかった。

「では、余は街を散策してくるからな。しばらくしたらまた戻ってくる」

魔王はシェリカたちにそう告げるとマリーの店からそそくさと立

ち去った。そして店から少し離れたところでようやく一息つく。

「あれはあれで……勇者などよりもよほど危険だったな」

魔王はかつての勇者たちを思い出しながら、しみじみとそうつぶやいた。そして、暇をつぶすべく通りへと繰り出したのであった。

## 第十七話 予言

### 第十七話 予言

陽射しに照らされた迷宮都市の大通りを、魔王はあてもなくぶらついていた。雑踏の中を速くなったり遅くなったりしながら、気のむくままに歩いている。周囲の人々は特徴的な格好をしている魔王に、時折足を止めたりしていた。しかし、魔王はそんなことは気にせず、商店を冷やかして見たり、いちいち店員に質問してみたりと街を満喫していた。

「うぬ？」

そうしてしばらく時間をつぶしていると、不意に魔王は妙な魔力を感じた。彼は足を止めるとくると辺りを見回してみる。すると、通りの脇にある小さな店の中に妙な気配を感じた。賑わう通りにあつてそこだけ人気のない、何とも古びた店だった。その店が気になった魔王は導かれるように中へとはいっていく。店の入口の古びた扉が軋み、微かに埃が舞った。

店の中には濃密な魔力が漂っていた。足元さえおぼつかないほど暗い店の中を、魔力特有のぬめるような気配が満ちている。その密度たるや、魔界の中心にも匹敵するほどだ。

魔王はどこからこの膨大な魔力が発生しているのかと、注意深く店の中を観察した。端に置かれた揺らめく紅い蠟燭に、店の中心に鎮座している透き通るような水晶球。いちいち怪しいこれらを魔王は一つ一つ見てまわった。

「おや、いらつしゃい。変わった気配の方が来たもんだねえ」

魔王が店の中を見ていると、奥の扉から老婆が出てきた。その腰は曲がり、手足は枯れ木のように。顔には渓谷のごときしわが刻み込まれていて、百年は生きていそうであつた。

「そなたがこの店の店主か？」

「ほほ、そうですよ。わしが店主のアガリアじゃ」

老婆はしがわれかすれた声で名乗ると、水晶球の前の椅子に座り込んだ。そして、魔王に向かってにんまりと微笑む。

「何か占つて欲しいことがあるだろう？ そうだね、その顔だと人を探しているね？」

老婆はからかうような調子でそういった。その言葉に魔王は愉快そうに唇を歪める。老婆の言葉は見事的中していた。

「確かに人を探している。だがすまないな、今は手持ちがないゆえ占ってもらふことはできぬ」

魔王は少し残念そうに言うと、店から出て行こうとした。だが、それを老婆が止める。その口調は穏やかだったが強かった。

「待っておくれ、お代ならいらないよ。あんたは面白そうだからね、特別にタダだよ」

「それはありがたい。頼むとしよう」

魔王は申し出を受け入れ、老婆の向かい側の椅子に座った。すると、老婆が水晶を貫かんばかりに睨みつける。

「この水晶をじつと見ておくれ。それだけで良いからの」

「こっつか？」

魔王は水晶を正面に見据えた。すると、吸い込まれるような感覚が魔王を襲う。それはちょうど眠りに落ちるような感じで、不思議と不快ではない。

「ふむ、見えてきたぞい。どうやらあんたは仲間を探しておるようじゃな。あつておるか？」

「ああ、そうだ」

「では続けよう。あんたの仲間となる者はどうやら女の子のようじやの。なかなかの別嬪さんが見えるぞ。それで肝心の今ある場所は……なんじゃ、すぐ近くではないか。この通りを西に数分歩いたところにおるようだ」

老婆はそれだけのことを魔王に告げると、目を水晶から放して占いを終えようとした。魔王も不思議な感覚から解放され、立ち上がろうとする。すると……

「キヤアア！」

老婆が不意に金切り声を上げた。そして、気が狂ってしまったように手を何度も振り上げてテーブルを打ち鳴らす。魔王は驚いて老婆を押さえ付けようとした。すると、老婆は糸が切れたようにテー

ブルに臥してしまふ。

「大丈夫か？　しっかりするのだ」

「槍と杯……秩序と混沌。相克する力……」

突き刺す刃物のような声であつた。老婆の口から発せられる声は鋭い氷のつぶてとなつて魔王を襲う。さきほどまでとはまったく異なる雰囲気に、魔王は身体を固くして老婆の話に耳を傾けた。

「始源の神の子になるは一人。汝、混沌の後継者にして槍の担い手は、秩序の後継者にして杯の担い手より杯を奪うべし。槍と杯、二つをあわせこの世の深淵にありし台座に備えよ。されば汝、始源の神の力を得ん」

「混沌はわかるが槍とはなんだ？　余はそのような物は知らぬ。教えてはくれぬか？」

「すべては明らかになる。時を待たれよ」

老婆の身体から何か朧げな物が抜けた。魔王は倒れた老婆の肩を揺すり起こしてみる。すると老婆は起き上がり、身体を伸ばした。そして目を擦りながら魔王をみると、何故か顔を歪める。

「あんたまだいたのかい？　ほら、未来のお仲間が西で待ってるよ。早く行つておあげ」

「覚えておらぬのか？」

「何のことだい？」

「知らぬほうがおそらくそなたの身のためだろう」

魔王はそれだけ告げると、老婆の店から出て行った。そして西へと歩く道すがら、老婆の予言に思いをめぐらす。

「混沌はおそらく混沌神の加護。槍というのはわからぬが、杯は聖銀騎士団と関係がありそうだな。すると秩序の神の後継者というのがユリアスか。だが……」

魔王は大きなため息をついた。秩序の後継者というのは秩序の神の加護を受けた者だとみて良いだろう。しかし魔王が神殿で聞いた話では、それに当てはまりそうなのは大昔にいたジーク・アルハルトなる者のみ。人間であるユリアスが数百年も生きていることなどありえないので、話が矛盾していた。

神殿での話を話してくれた男の知識不足だとするのは簡単だったが、それはないように魔王には思われた。人というのは過去のことより現在のことを重視する物だ。数百年前の人間のことを知っていて、現在生きているユリアスのことを知らないなどまずありえないだろう。

「……不毛だな」

散々考えたあげく、魔王はそうつぶやいた。そして頭の中を切り替える。いずれわかることだと老婆も告げていたので、魔王はそれで問題なしとしたのだ。

こうして思考の海からあがった魔王は通りを西へ歩いて行った。

まだ見ぬ五人目の仲間を探して……。

## 第十八話 マップメーカー

### 第十八話 マップメーカー

けだるい昼下がり。うつとしいほどに太陽が輝いている。だがここ迷宮都市の商店街では、そんな元氣過ぎるお天道様にも負けないう活気が満ちていた。しかし、その片隅の店で一人の少女がどんよりとした鬱陶気を醸し出していた。

「あかん、今日も売上が全然ないで……」

テーブルの上に置かれた数枚の銅貨と大量の地図。少女は栗色の髪を髪をかきあげ、がつくりと肩を落とした。

少女の名前はエルマ。この店で地図を売るマップメーカーである。マップメーカーというのは迷宮に潜って地図を作り、それを売る者のことだ。だがそんな彼女は今、生活の危機に直面していた。

要はお金がないのである。

「ふう、あんなわけわからんモンスターさえでなければなあ……」

エルマは遠い目をして忌ま忌ましげにつぶやいた。五十階層に現れた岩龍というモンスター。このモンスターのせいで彼女はうまくいっていないかった。

彼女が入っていたパーティーは岩龍を恐れ、五十階層を目前に事実上解散。仕方なく彼女自身も新しいパーティーまたはギルドに所

属しようとしたが、中途半端なレベルのせいで仲間ができなかった。しかも彼女はサポート担当だったので一人では潜ることもままならない。

なので今まで作りためた地図を売っているのだが、低い階層の地図のため売れ行きは低調そのもの。これではため息の一つや二つ出ようというものである。

「じゃあない、もういつペンクランで仲間を探してみるか……」

思い立つたらずぐ実行。エルマはテーブルをバンと叩くと、店を畳む準備を始めた。地図を丁寧にしまい、準備中と書かれた札を手取る。

するとここで重苦しい空気で満ちていた店内に、爽やかな風が吹き込んできた。エルマは頬を撫でた風に入口の方に振り向く。

男が立っていた。鮮やかな紅のマントを着て、つやつやと輝く漆黒の杖を持っている。その色白で涼やかな顔は間違いなく魔王のものであった。

「いらっしやい！　うちの商品は全品良心価格や！　たくさん買っていてな！」

エルマは丸められた地図をすばやく広げると、満面の笑みを浮かべた。すると魔王は少々申し訳なさそうな顔をする。

「悪いが余は客ではない。人を探していてな、立ち寄っただけだ。……すまぬがこの辺りでかわいい娘を知らぬか？」

「なんや……」

エルマはくたびれたように座り込んだ。そして、指でまっすぐ前を指差す。その指はちょうど、向かいの店を指していた。

「向かいのランド商店、そのマゼンダお嬢様がここらで一番美人や」

「そうか、世話になった。そのうちに何か買いに来ることを約束しよう」

魔王はエルマにくるりと背を向けて歩き出した。エルマは疲れたように椅子に身体を埋める。

しかしここで、エルマの頭でパチッと何かがひらめいた。彼女は慌てて店から出て行こうとする魔王を呼び止める。

「ごめん、ちょっと待ってくれへん。今思ったんやけどな、かわいい女の子なんかをどうして探してるんや？ まさか……ナンパでもするん？」

「いや、そういうことではない。ギルドのメンバーを探していてな。占ってもらったところこの辺りのかわいい娘が仲間になると言われたのだ」

エルマの目の色がにわかに熱を帯びた。彼女は魔王に近づき、上目遣いに彼の瞳を見つめる。

「ははん、なるほどそういう訳かいな。それなら前言撤回っ！ここらで一番美人なのはうちや。うちを仲間におくんなはれ！」

「……凄い熱意だが……ふうむ」

魔王はエルマの容姿を良く確認した。栗色の流れるような髪と猫のように愛らしい輪郭をしている顔。その大きな琥珀色の瞳は澄み渡り、一点の曇りもない。さらにプロポーシヨンも、胸元の布地が押し上げられていることなどからかなり良いようだった。

この辺りで一番の美人というのもあながち嘘ではないようだ。

「確かに美人だ。だが、そなたがさっき言っていたマゼンダという娘も気になる」

魔王はエルマが仲間かも知れないと思った。だが一応、マゼンダという娘も見えておこうと思い、店から出て行こうとする。しかし、彼が店を出ることはなかった。エルマに腕を掴まれたのだ。

「待った待った！ あんたが探してるのはギルドの仲間やる？」

「ああ、そうだ。それがどうかしたのか？」

「マゼンダは確かに美人やけどシーカーではないんや。そやからその占いに出てきたのはうちや、間違いない！」

「確かにそれならそうかもしれんな……」

魔王は顔を伏せて、少し考え込むような顔をした。それを見たエルマは、ここぞとばかりに勢い良くしゃべりかける。

「うちはな、こう見えても魔銃っていう珍しくて強力な武器を使っ

てるんよ。だから仲間にして損はないで！」

エルマは腰に着けたホルスターから黒光りする物を抜き放った。それはし字型の棒でレンコンを貫いたような形をした武器だった。その見慣れない形に魔王は興味を引かれてそれをまじまじと眺める。

「なかなか見ない武器だな」

「ふふっ、そうやる。これはうちの父ちゃんがまだ若い頃に……」

そこからエルマの長い話が始まった。彼女の口はぺらぺらと動き続けて、止まることが全くない。魔王はその濁流のような逆らいがたい勢いに徐々に飲み込まれていった。

「……でな、この武器は……ってしゃべり過ぎてもうたわ。こらあかん」

エルマはふと時計を見て、いつのまにか自分の武器の自慢になっていた話を終えた。その時にはすでに、エルマが話を始めてから一時間が経とうとしていた。

「……魔銃が凄いのはよくわかった。良からう、そなたを仲間にするようではないか」

魔王はポカンとしたような顔でエルマに言った。途中で疲れて半分寝ているようである。だがその魔王の言葉にエルマは拳を上げて、快哉の叫びを上げる。

「ありがと！　うちはエルマ、マップメーカーや。ほなこれからよろしくな」

「余の名は魔王、よろしく頼む」

二人は顔を見合わせると互いに笑いあった。そして手を出し合い、がっちりと固い握手を交わす。

こうして、魔王としては騙されたような気がしなくてもなかったが、エルマがギルドの仲間になったのだった。

## 第十九話 結成、新ギルド

### 第十九話 結成、新ギルド

陽射しに照らされ、魔王はエルマとともに通りを東に歩いていた。二人は人波を掻き分け、どんと歩いて行く。遅くなったことから、石畳を歩く足音はわずかに忙しかった。

魔王とエルマの目に、軒先にたくさんの服を吊り下げた店が飛び込んできた。さらに、その前に立っている三人の女の子も見える。その三人組は魔王たちに気づくと、すぐに歩み寄って来た。

「遅い！ 何やってたのよ。私たちもう買い物ゼーんぶ終わらせて、ここで待ってたのよ！」

シェリカが勢い良く魔王に口を尖らせた。そしてサクラの肩をバシッと掴む。魔王がサクラを見てみると、紅い着物が真新しい桜色の着物になっていた。さらに腰には新しい漆塗りの鞘が見える。

「すまなかったな。いろいろとやっていたら遅くなってしまった」

「もう、今度からは気をつけなさいよ。それより、その女の子は誰？」

シェリカは魔王にひとしきり怒った後で、エルマに目を向けた。その容赦ない視線に、エルマはたじろぎ後ろに一步下がる。そこで魔王がエルマの前に出てエルマの紹介をした。

「この者はエルマという者だ。余が仲間候補として連れてきた」

「あら、そうなの。どっかで引っかけてきたのかと思ったじゃない」

シェリカはエルマの前に移動した。それに他の二人も続く。そして、三人はエルマに次々と質問を投げかけていった。

「あなたの得意な武器は？」

「銃やな。使うだけなら結構使い込んでるから腕には自信あるで」

「そうなんだ。遠距離タイプはなかなかいないから役に立ってくれそうね。……じゃあ次の質問は……」

エルマはその後も三人の質問にそつなく答えていった。三人は徐々に値踏みするような目から、納得したような目になる。

「いいんじゃないか、なかなか優秀そうだ」

サクラが真新しい桜色の着物を揺らして、関心したように息をついた。シェリカもその意見に頷く。だが、三人の中でシアだけはは少し懐疑的な表情をした。

「シア、なんでそんな顔するのよ。何か気にいらないの？」

「別にそういう訳じゃないわ。ただ……この娘からはサクラと同じ貧乏神の気配がする」

シアはひよこの財布を取り出してギュッと抱きしめた。その様子に、サクラとエルマは目を丸くする。

「むむっ、今のはさすがに我慢ならんぞ！」

「サクラはん、協力するで！ 二人であの悪徳神官を倒すんや！」

サクラとエルマは顔を真っ赤にしてアイコンタクトをした。危険を察知したシアはすばやくその場から逃げ出していく。

「あっ、逃げた！ 待て！」

「待てと言われて待つ馬鹿はいないの！」

シアとサクラたちの追いかけっこが始まった。追いかけるサクラとエルマに逃げるシア。三人は混み合う人々の間をすり抜け、通りを縦横無尽に駆けていく。石畳を軽快に鳴らして、三人はずっと追いかけて続いていた。

「……いつまでやってるのよ。魔王、三人を止めるから手伝って」

「ああ。そろそろ迷惑だからな」

やがて周囲の迷惑を省みない三人を止めるため、シェリカと魔王もそれに加わった。それにより逆に追いかけてこは一層激化して、日が傾くまで続いたのだった。

こうしているうちに、いつのまにかエルマはすっかり四人に溶け込んでいた。そして、彼女は何の問題もなく四人の仲間に加わったのだった。

そろそろ風が冷えてくる黄昏れ時。五人はシェリカの家の食堂に集まって会議をしていた。新たに結成するギルドのことについて話し合ったためだ。ちなみに、恒例のカード交換イベントは終わっている。

「新しいギルドの名前について決めたいんだけど、何か意見のある人！」

シェリカがペンを片手にみんなに意見を聞いた。その手元には、『ギルド結成申請書』と書かれた紙が置かれている。

サクラが唇を歪めて押し殺したように不適に笑った。皆の視線がサクラに集まる。サクラはその視線の中、勿体振るように咳ばらいをした。そして、無駄に自信たっぷり自身のアイディアを披露する。

「ふふ、こんなこともあるうかとすでに名前を考えておいたぞ。その名もファイナルギャラクティカナイトだああ！」

時が止まった。食堂にいるサクラ以外の全員の身体がにわかに固まり、動きを止める。絶対零度の沈黙が食堂の中を覆いつくした。サクラはその凍える時の中を、一人戸惑ったような顔をしてさまようだけだった。

「……馬鹿は放置。私はシア様親衛隊が良いと思う」

しばらくしてようやく解凍されたシアがサクラの提案を一蹴した。そして、自分の意見を述べる。その自己中心的過ぎる名前にシェリカをはじめとしてみんなはまた頭を抱えた。

「……この二人はダメだね。あんたたちは何か意見ないの？」

シェリカは希望を込めた眼差しで魔王とエルマを見た。すると、魔王もエルマもそれぞれ考え込み始める。

「うちはそうやなあ……あかん、ネーミングセンスないから無理や」

考えあぐねたエルマは、そう言ってシェリカの方を見た。シェリカは両手を上げて、お手上げというポーズを取る。彼女もまたネーミングには自信がないようだった。

「深層旅団、などどうだろう」

魔王がぼそつとつぶやいた。みんなは話すのを止めて、食堂は水を打ったようになった。今までで唯一、まともな名前だった。

「大げさだけど良いかも。みんなはどう？」

シェリカはみんなに確認を取った。シアとサクラがどこことなく不満そうではあったが、反対意見はでなかった。

「よし、名前は『深層旅団』に決定！」

シェリカは書類にサッツと名前を記入して、次の空欄を見た。そこには『代表者名』と書かれていた。

「次はリーダーを決めなきゃいけないみたいね。みんな、誰が良いと思う？」

シェリカはみんなの顔を見渡して言った。するとみんなは一斉にシェリカの顔を見る。シェリカはその反応に戸惑ってしまった。実

はこのメンバーの中では彼女が一番レベルが低いのだ。

「わっ、私！ それは無理よ！ そりゃさ、こうやってみんなをまとめるかも知れないけど……レベルが低くてあてにならないんだから。それよりも魔王とかどうなの？」

困惑したシェリカは魔王の方に目を向けた。他の三人もそれにつられて魔王を見る。魔王は少し唸ったが、何も言わなかった。

「レベルが高い方がリーダーに向いているのは事実。魔王はそういった点では問題ないわ」

しばらくしてシアはそうつぶやいた。その一言に、他の二人は唸られる。二人とも魔王の実力についてはリーダーに相應しいと思っていたのだ。シェリカが乗り気でない以上、魔王が最適かもしれない。そんな考えがにわかに広まった。

「皆が推すのであれば、引き受けよう」

魔王は周囲の雰囲気を感じて、リーダーを引き受けることにした。その言葉にみんなは笑顔になり、シェリカは魔王に書類とペンを手渡す。魔王は渡された書類につらつらと長い長い本名を記入していった。

魔王は名前を書き終わると書類の全体を見渡した。すると右端に割合大きな空欄があった。魔王がそこに書いてある文字を読むと、そこには『捺印欄』と書かれていた。さらに横に注意書きとして血判が望ましいと書かれている。

「最後にそれぞれの血判を押さねばならぬようだな。誰かナイフを

持っておるか？」

「ナイフなら私が持つてるわ、はい」

シエリカはすかさずナイフを魔王に手渡した。すると魔王は親指を切り、紙に押し当てる。紅の指紋がはっきりと紙に残った。

それを確認したところで、魔王は隣のエルマにナイフと紙を手渡した。エルマは渡されたナイフをどこかびくびくとした様子で見る。

「チクッとするの苦手なんやけど……。しゃあないな」

エルマは痛みにも顔をしかめつつも、ナイフで指を切った。そしてゆっくりと血判を押す。さきほどの魔王より明るい紅の血判が紙に残った。

その後、残りのメンバーは肅々と血判を押していった。そしてついに、最後であるシエリカに順番が回ってきた。

「いよいよ最後ね。みんな、本当に後悔とかない？ 今ならまだやめれるわよ」

シエリカは最後の確認をした。みんなは黙っている。それは明らかにシエリカが血判を押すことを肯定していた。

「つつつ……これでよし！」

シエリカは血を指からにじませ、力いっぱい紙に押し付けた。そして、ゆっくりと指を紙から離していく。紙には五つの血判が赤々と残されていた。

今ここに、新たなギルドが結成されたのであった。

## 第二十話 初陣

### 第二十話 初陣

ギルド『深層旅団』結成から二日が経過したある日。迷宮第四十五階層を、五人のシーカーが探索していた。集団の前を歩く赤髪の剣士に桜色の着物を纏った侍、その後方を歩く大きな帽子を頭に載せた神官に地図とペンを手にしたマップメーカー。そして、そのさらに後ろを貴族風の男が続いていた。間違いなく魔王たちであった。

彼らは今日、五人で初めての探索に臨んでいた。うまく戦えるのか、連携できるのか。龍との戦いに備えた訓練のつもりとはいえ、少なからぬ不安が彼らを付き纏う。その不安が行動にも現れたのか、彼らは水の滴る洞窟のような通路にゆっくりとしたリズムで足音を刻んでいた。

「いきなり四十五階層なんて大丈夫かしら……」

最前列を歩くシェリカが不安げな顔をした。五人で初めての探索、しかも四十五階層は彼女にとっては未知の階層である。彼女は他の誰よりも不安でいっぱいであった。

すると、サクラがそんなシェリカの独り言を聞き付けた。彼女はシェリカの方に向き直ると任せておけと言わんばかりに胸を張る。

「大丈夫だ、私やみんながいるじゃないか」

「それもそうね。心配することなかったわ」

シェリカは小さく息をこぼすと顔を上げた。その顔は晴れやかで、わずかながら不安が軽減されたようだった。するとその時、最後尾の魔王が足を止めた。そして辺りをゆっくりと見回す。

「ふむ、何か来たようだ」

魔王がつぶやくと、それ続くかのように足元がじりじりと揺れた。ほかの四人も足を止めてそれぞれの武器を構える。張り詰めた空気が辺りを支配した。

しばらくして天井につかえそうなほどの身体を持ったオークが、前の曲がり角から現れた。丸々と肥え太ったオークは脂肪で膨れた鼻を下品に鳴らし、腐ったような息を吐き出す。さらにその身に纏った粗末な腰布には八エがたかつていて、異様な臭気があたりに立ち込める。

「ちつ、ずいぶん大きなオークだな！ 鼻がもげそうだ！」

「そうね、さつさとやらないと臭いが染み付きそうだわ！」

シェリカとサクラは互いに目配せすると、一斉に武器を抜いた。刀と剣が閃き、鋭い切っ先がオークに向けられる。そして次の瞬間、二人は一気に踏み込んでオークへと跳んだ。

「せやあっ！」

サクラの刀がにわかに光り、一条の光を描いた。気を纏った刃が滑らかにオークの腹を裂き、血がほとばしる。オークのたるんだ腹と腰布はたちまち血に濡れて、オークは絶叫を上げた。

「ブヒイイ！」

オークは耳を焼くような雄叫びを上げながら大暴れを始めた。手に持つこん棒をやたらめったら振り回して、周りの岩や地面を吹き飛ばしていく。その巻き込まれれば人間などひとまりもない様子に、サクラもシェリカもたまらず後ろに下がってしまった。

「これじゃろくに近づけないわ！ エルマ、出番よ！」

「よっしゃ、任せとき！」

エルマは腰からサツと魔銃を引き抜いた。彼女はそれをくると回して構えると、安全装置を解除する。そして彼女はオークのたるんだ身体に狙いを定めると幾度となく引き金を引いた。軽快な音が迷宮に響き、銃口が青く光る。

魔銃から放たれた光はすべて過たずオークの腹に殺到して、その柔らかい肉を揺らした。たるんだ腹は激しく波打ち、今にもちぎれてしまいそうなほどだ。だがしかし……

「グオオ！ ブヒイイ！」

「ちっ、あかん！ こいつデブやから銃があんま効かへんみたいや！」

エルマは腹を揺らしはしても一向に貫けない光を見て舌打ちした。威力も高く使い勝手もよい魔銃。だが、実は柔らかい敵には滅法弱いという弱点があるのだ。

結局エルマの攻撃はオークを怒らせただけであつた。前にも増し

て暴れ出したオークに、エルマは茫然自失としてしまった。しかし彼女はすぐ気を取り直すと後ろの魔王をすぐるように見る。だが、魔王はエルマの期待に反して首を横に振った。

「ダメだ。余が手を出しては訓練にならぬ」

魔王は毅然とした態度で断言した。今回の探索は、ギルドでの連携を高めるためである。それに強すぎる魔王が手を加えたら成果が上がらないのだ。

「そうかいな……。それなら自信ないけどやれるだけやってみるで！」

エルマは魔銃を一丁しまい、もう片方を両手で構えた。そして神経を研ぎ澄まし、オークの顔のあたりに狙いをつける。エルマの手の造形がにわかに蜃気楼のごとく揺れて、魔銃に膨大な魔力が流し込まれていった。

「バーストショットオ！」

気迫の籠った叫びが響き、エルマの銃からこれまでになくまばゆい閃光が放たれた。閃光は迷宮の闇を切り裂いて一直線にオークに迫り、その右目に直撃。見事なまでにそれをえぐり取る。

「ウギヤアアア！」

鼓膜を破壊するような堪え難い絶叫が轟いた。オークはこん棒を放りなげ、頭を抑えてのたうちまわる。その腕は始めて獲物ではなく自身の血で紅く染まっていた。

だがここで、オークは致命的な過ちを犯していた。痛みに苦しむあまり、こん棒を放り投げてさらにほっばらかしにしまったのだ。

「そらあ！」

「えやああ！」

サクラとシェリカがオークの懷に飛び込み、その身体を血に染めていった。オークは慌ててこん棒を手にとろうとしたが時すでに遅し。肉を裂かれ、ずぶ濡れになるほど血を流した身体にはこん棒を振り回すような力は残っていなかった。

「グウ……」

オークは弱々しい断末魔のみを残し、息絶えた。その死体はあつという間に光の粒となり闇に溶けていく。後にはメロンほどの大きさの魔力珠だけが残された。

「ふふ…… 大きいわ。 お金になりそう」

怪我人がでなかったので暇をしていたシアが、すぐに魔力珠を抱えた。そして愛おしいかのようにほお擦りをする。その頭の中はお金のことでいっぱいだった。

「こらっ、あんたなに勝手に持つてるのよ！ それはみんなで山分けよー！」

「あっ……」

シェリカはシアに近づくと、その手から魔力珠を取り上げた。そして、腰のポーチに押し込む。シアは赤くなって頬を膨らませたが、シェリカはまったく相手にしなかった。

「まったく油断もすきもないんだから。……それよりサクラ、オークってみんなあんなに強いのか？ あたしあれが続いたら結構きついんだけど」

「えっ？ ……そうだな、少なくとも私が知る限りではあれだけ強いのは始めてだ。普通なら最初の一撃で真つ二つになっている」

サクラはしばらく考えた後、シェリカの質問に答えた。サクラとしても、オークの強さは予想外であった。

「なら良いけど……」

シェリカはサクラの答えにそう心配そうに言うと、また迷宮の中を歩き始めた。他の四人もすぐに後に続いて探索を再開する。

その後五人はオークに何度か襲われたものの、シェリカの心配したようなことにはならなかった。そして五人は四十九階層まで潜り、いよいよ次回の探索で五十階層に潜む龍と戦うことになったのである。

## 第二十一話 開戦、巨大龍！

### 第二十一話 開戦、巨大龍！

深層旅団の初陣の翌々日。今日も変わらず厳かな雰囲気のためう神殿は、朝にも関わらず人で混雑していた。そしてその混み合う建物中央にある祈祷の間に、魔王たちの姿があった。

ステンドグラスから差し込む朝日で大理石が白く輝き、中央にそびえる女神像が彼らを見下ろしている。八角形をした祈りの間は女神に見守られて、白い輝きに満ちていた。

その神聖で引き締まった雰囲気、魔王は仏頂面をしていた。そして、隣のシェリカを恨めしそうに見ている。

「もう帰っても良いか？」

「まだお祈りしてないじゃない。大きな戦いの前に加護神様にお祈りするのはシーカーの常識よ」

「うっむ……」

シェリカは唸る魔王を放置して、女神像にお祈りを始めた。他の三人もそれに続いて祈り捧げる。この女神像というのは特定の神を表したのではなく、様々な神を象徴的に表すものである。そのため、四人が一緒にお祈りできるのだ。

他のメンバーが全員お祈りを始めたので、仕方なく魔王も混沌神に祈りだした。固く目を閉じ、胸の前で手を組む。そしてしばらく

の間、だまって心を無にした。

「終わり。これで良いわ」

シアはそういうと身体を伸ばした。そして入口に向かって歩いて行く。魔王たちもシアに従って祈祷の間から出ていこうとした。すると、入口で良く見慣れたシーカーの集団とすれ違った。胸元に銀のブローチを輝かせるその姿は、紛れもなく聖銀騎士団だ。

「おやおや、シェリカさんじゃないですか。聞きましたよ、最近ギルドを設立したそうですね。まったくめでたいことですよ」

ユリアスは口元を手で抑えて高笑いをした。その目は嫌みったくしく歪んでいて、底知れぬ不気味さを醸し出している。シェリカはそのユリアスの態度に露骨に顔をしかめた。

「そう、祝ってくれてありがと。……それは良いとしてユリアスは何でここにいるの？ あなたたちが神殿に来るなんて珍しいけど」

「いえいえ、今日は闘神祭の必勝祈願に来たのですよ。大会の一週間前から毎朝祈るのが私たちの流儀ですからね。むしろ、あなた方こそどうして神殿にいらっしゃってるのですか？」

「五十階層の龍と戦うから祈りに来たのよ」

シェリカは重々しい声でそう言った。それと同時に彼女はユリアスに向かって剣のような鋭い殺気を送る。だがユリアスは大袈裟に驚いたような顔をしただけであった。

「ほう、五十階層の龍ですか。そういえば最近話題ですものねえ。

あなた方が倒してくれるならありがたいことですよ」

「ほんと白々しいわね……。まあいいわ、忙しいからさようなら」

「そうですか、ならばご機嫌よう。勝てることを祈っておきますよ」

シェリカは隣にいた魔王の腕を掴んだ。そして腕をぐいぐいと引っ張り、どたばたと床を踏み鳴らしながら神殿を出て行く。辺りにはユリアスたちだけが残された。

残されたユリアスは脇に控えていた若い女の方を向いた。いつぞやの、魔王たちを陰から覗いていた女だ。今日も長い傘を手にしていた彼女に、ユリアスは笑いながらゆっくりと話し始める。

「計画は順調のようですね。後はあのシェリカが死なない程度に龍にやられれば計画完了。……アイリスさん、調整や準備に抜かりはありませんね？」

「万全です、まったく問題はありません」

「ほほほ、それはよかった。吉報を楽しみにしてますよ」

ユリアスは目を細めると凍えるような笑みを浮かべた。そして祈りの間に向かってゆらりと歩き始める。そのあとをアイリスと呼ばれた女を筆頭にギルドのメンバーたちがぞろぞろと続いて行ったのだった。

ギルドや神殿のある場所から迷宮へと続く道の上。その石畳の迷

宮へと向かうシーカーたちが激しく往来している。シェリカたちもそんなシーカーたちのグループの一つだった。

シェリカは路上を無言でただひたすらに歩いていた。その口はへの字に曲げられていて、目は引き攣りそうなほどである。どうやらシェリカの機嫌はかなり悪いようだった。

「もうっ、なんだか腹が立つわね！ あいつはどうしてああも気味が悪いのよ！」

「落ち着け、良くあることだ」

「良くあることって……。そんなにはないわよ！」

「それは言葉の綾だ」

「むっ……」

シェリカと魔王のくだらない言い争いはなかなか終わらなかった。もっともそれは傍から見ていると微笑ましいレベルのもので、誰も止めようとしなかったのが原因であるが。

だが、それも終わる時が来た。いよいよ五人が迷宮の前へと到着したのである。

「二人とも、迷宮に着いたわ。だから気持ちを切り替える」

「そうやで、ほらあれ」

エルマが見慣れたモニュメントのような迷宮の入口を指差した。

それはもうすでに目前に迫っている。しかしシェリカはどこか気恥ずかしそうに二人を見て言った。

「今、良いところなのよ。もうちょっとだけ」

「ダメ」

「ダメやで」

シアとエルマはきっぱりと何のためらいもなく断言した。妥協するつもりは一切ないようだった。だが、その二人の様子を目にしてもシェリカはどこか残念そうな顔をしていた。相当に議論が白熱していたようである。なのでだろうか、シェリカと同じく魔王もまた微妙な顔をしていた。

「二人ともテンション低いで……。しゃあない、こうなったらうちのとっておきの方法で気分を盛り上げたるで！」

エルマの目ににわかに炎が燃えた。彼女はそのまま手早くみんなに円陣を組ませる。そして、自分もその輪に加わって高らかに宣言した。

「龍を倒すぞー！」

冷たい沈黙が訪れた。ここは人々の集まる広場の真ん中。エルマ以外の四人は恥ずかしくて口をもぐもぐとさせるのが精一杯だった。

だが、ノリと笑いにうるさいエルマがそんな四人を許すはずがなかった。

「みんなノリ悪いなあ。ほらおーとかなんか言ってみ！」

「お、おー!!」

エルマの勢いに押された四人は、まごつきながらも掛け声をかけた。威勢の良い声が広場に響き、高い空に吸い込まれていく。

こうして五人は龍と戦う前に、わずかながら団結感を感じたのであった。

迷宮第五十階層。そこには異様な緊迫感が充満していた。岩や地面からむせかえるような猛烈な魔力が放たれていて、空気が澱んでいる。クリスタルで転移した途端に襲ってきたその魔力の波に、五人の緊張が張り詰めた。

五人が忍び足で探索を始めると、すぐ目の前に圧倒的な存在感を放つ門があった。高さは人の背丈の五倍ほど、横幅はその高さの三分の二ほどの鋼鉄製の門だ。赤錆の浮いているその門の向こうからは、圧倒的な存在感が伝わってきていた。

「この門の向こうに間違いなく龍がいるわね。みんな、準備はいい？」

「もちろん！」

四人の声が寸分変わらず重なった。シェリカは頷くと、ゆっくり門を押す。すると門はシェリカたちの訪れを待っていたかのように何の抵抗もなく開いた。そしてついに龍が姿を現す。

太古より続く大地を思わせるごつごつとした外殻に、氷よりなお冷たく光る牙。その目は研ぎ澄まされた刃のように冷徹で、哀れな獲物を逃さない。その山のような身体から吐息がこぼれるたび、迷宮の地面がわずかに揺れた。

龍は目の前に現れた五人を一瞥した。そしてぱらぱらと砂や埃を落しながらのっそりとその巨体を起こす。すると……。

「グギヤアアア！！」

小癩な侵入者にたいして、龍の悍ましい雄叫びが大気を切り裂き、洞窟を壊さんばかりに轟き渡った。まるで哀れな獲物への死刑宣告だと言わんばかりである。だが五人はこれを聞くやいなや、龍へと向かって走り出した。

こうして魔王たちと龍の戦いが始まったのである……。

## 第二十二話 脅威の外殻

### 第二十二話 脅威の外殻

迷宮第五十階層に広がる大空間。そこで今まさに、激戦の火蓋が切って落とされた。空気が痺れるように張り詰め、視線と視線が交錯する。

「シャアアア！」

先に仕掛けたのは龍であった。長い前足を唸らせ、薙ぎ払う。膨大な質量に周囲の岩は吹き飛ばされ、粉塵が舞い上がった。巨大な柱のとききは、風を切り裂き五人に迫る。

五人は後ろに跳んだ。迷宮の天井へと向かって、高く高く。数秒の空中散歩。それが終わると五人は地面へと軽く舞い降りた。地面につくたび彼女たちは武器を構え、互いを見交わす。

「行くぞ！」

「ええ！」

粉塵で視界が無くなった龍に出来た僅かな隙。それをサクラとシエリカが逃すことなく見つけた。二人は足音もなく走り、地面を蹴って飛び上がる。

迷宮の風の中を翔ける二人を、後ろから魔銃の光が追い抜いていた。光は龍の顔にぶつかり、花火のように散る。二人はその花が散ると同時に、龍に襲いかかった。それぞれ髪や服をばさばさと鳴

らしながら龍の身体近くに降り立ち、刃を一閃させる。

舞い散る火花、炸裂する金属音。鍛冶屋が力一杯に鋼を打ったような音が迷宮に轟き、紅く焼けた光の華が咲いた。

「ちいつ！」

「硬っ！」

二人の手に伝わった龍の皮膚の感触。それは鋼どころの騒ぎではなかった。硬く、されど頑丈で脆くなく。それはちょうど、ダイヤモンドの硬度と鋼の耐久性を合わせたような未知の感触であった。だが、二人は攻撃の手を緩めることはしない。

二人は攻撃の反動を活かして後ろに飛びのいた。すると、龍の前足が二人のいた場所を通り抜けていく。風が二人の髪を巻き上げ、頬を撫でた。

二人は前足をやり過ぐすとまた龍に向かって行くべく地面を蹴った。硬い石の地面と、二人のブーツや下駄が擦れて小さな閃光を放つ。

シェリカたちと龍との戦いはそれからずっと続いた。龍の咆哮が轟き、その後を追うように金属音が響く。さらにその間隙を塗って魔銃の光が炸裂した。

だが、その戦いの音は徐々に静かになってきていた。シェリカたちが疲れてきていたのだ。

「なんて硬いんだ……。攻撃がまともに通じないぞ！」

「これじゃ勝てないじゃない……！」

二人は肩で息をしながら龍を見上げた。鉛色をした外殻は二人の猛攻にも関わらず傷一つついていない。二人の頭をわずかに絶望が包んだ。

一方、岩の陰から魔銃でもって援護をしていたエルマも二人と同様に絶望感を覚えていた。そして彼女は思わずぽつりと漏らす。

「どんだけ硬いんや……。あの龍、伝説のオリハルチウムできてるんやないか？」

「オリハルチウム？　なんだそれは？」

「私も聞き覚えがないわ」

エルマの漏らした言葉に、魔王とシアの質問が殺到した。その二人の質問に、エルマは少し考え込むような仕草をする。そして、言い淀みながらもゆっくり答えた。

「オリハルチウムっていうのは神々の金属って呼ばれている金属や。すごく硬くてその上強靱！　ただ、今はどこにも残ってないはずなんやけど……。でもそれぐらいしかあの硬さは説明できへんで」

エルマはそういうと心配そうに二人の方を見つめた。二人は岩龍の前足や長い尾を巧にかわしながら盛んに攻撃を続けている。だが、その刃はことごとく弾かれていた。

エルマはその様子に唇を噛み締めた。何とか加勢したかったが、

もう彼女の魔力はほとんど残っていない。魔銃は魔力を消費する武器であるため、残念ながら無理な相談だった。

「このままでは危険。なんとかならないの？」

シアが魔王をすぎるような目で見た。しかし、魔王は険しい顔をしてつぶやいただけであった。

「まだ手を出す時ではない」

「そんな……」

シアとエルマが絶望したかのような顔をした。魔王はそんな二人の顔を見ても何も言わなかった。

その時であった。龍が奇妙な動作を始めた。二人に対する一切の攻撃を止め、頭を高くかかげる。その口に光が満ち始めた。

「いかん！ 逃げるぞ！」

異変に気づいたサクラが絶叫した。そして全速力で駆け出す。それに僅かに遅れてシェリカも駆け出していく。

「グウオオオ！」

咆哮とともに光が弾けた。蒼く輝く光が一直線に放たれ、津波のように二人に迫る。熱で岩は溶け、光で視界があやふやになった。光は熱をとまって岩を沸騰させながら疾走する。もしまともに当たりでもしたら、二人は影すら残らないだろう。

「こつちや！ 速くう！」

「急いで！」

いち早く巨大な岩の陰へ避難したエルマやシアが、喉が裂けそうなほど叫んだ。二人はそれに応えてぐんぐん速度を上げ、光を振り切ろうとした。岩でできた地面を二人の足がかたかたとリズムカルに鳴らし、二人は風となる。

次の瞬間、サクラが光から逃げ切った。彼女は仲間たちに受け止められ、一息つく。それに続いてシェリカも仲間たちの隠れる岩陰へと飛び込もうとした。だが……

「ぐっ……はあ……」

シェリカの身体を光が掠めた。鎧は焦げ、沸騰した血が爆発する。シェリカの滑らかな肌は吹っ飛び中の肉や骨を晒した。

四人の感覚が引き延ばされた。素早く飛び込んで来るはずのシェリカの身体が、ふわふわ宙に浮いているように感じられる。その延びた時間の中で醜悪な傷口は強調され、血と骨からなる紅と白の破壊的な色彩を主張した。

「いやああ！」

一瞬遅れてシェリカの悲惨な状態に、エルマの悲鳴が響いた。目の前で人間の身体が一部とはいえ吹き飛んだのだ。血になれたシーカーといえど無理もなかっただろう。

取り乱したエルマは何事かを口にしながら滅多やたらに泣き始め

る。だがその身体を、かろうじて冷静さを保っていたシアが抑えつけた。

「落ち着いて！ 大丈夫、あれくらい治せる」

シアが叫び続けるエルマの肩を無理矢理に抑え、口に手を当てた。そして、エルマが黙った後でシェリカの治療に取り掛かる。まずは彼女を横に寝かせ、傷口に手の平を押し当てた。

「イス・リウ・ハムナ・カタア……」

シアの口から呪文が紡がれ始めた。手の平の周りが淡く輝き、患部が癒えていく。その後あつという間に傷はふさがり、シェリカの身体は元通りに戻った。しかし、今度はシアがその場にへたり込んでしまう。

「ふう、はあ……治療完了よ……」

「シア、大丈夫！？」

いつも白いシアの顔が、紫に染まっていた。慌てて治療されたばかりのシェリカがシアを抱き起こす。シアの目は少し虚ろであった。

「魔力を消耗したのだな。仕方あるまい、余が行くでしょう」

魔王が岩陰から出て行こうとした。マントが擦れ、微かな音を立てる。その足取りはゆっくり重々しかった。しかし、そのマントの端をサクラの手が掴んだ。

「待ってくれないか」

魔王の足が止まった。彼は振り向き、真つすぐな瞳でサクラを見る。サクラの黒く濡れたような瞳は澄み渡っていた。

「私たちをもう少し戦わせてくれないか？」

「構わないが、何故なのだ？」

「ここで魔王に頼ったら、これから頼りっぱなしになってしまう。仲間というのは支え合うもので依存するものではない」

サクラの口調にはどこか切迫感があった。強い魔王と弱い自分達。彼女なりに何か思うところがあるのだろう。

沈黙があった。辺りにはすでに獲物を焼き殺したと思っっている岩龍の鼻息だけが聞こえていた。

「サクラの言う通りだね。頼りっぱなしじゃ格好つかないもの」

シェリカの言葉が重く響いた。その声は小さかったが、心の琴線を震わせるものであった。

エルマとシアは、シェリカの言葉にただ黙って深く頷いた。二人にも、思い当たる節はあった。

「良かるう。こういうことは嫌いではない。だが勝算はあるのか？」

魔王は感心したような表情でそう言った。すると、サクラがゆっくりと首を縦に振る。

「一応は大丈夫だ。成功する可能性は低いが私に策がある」

サクラは冷静な口調で魔王に告げた。開き直ったという雰囲気でもなく、恐怖を感じているという雰囲気でもなく、ただ冷静に。だがその目はいつになく輝いていたのだった。

## 第二十三話 緊迫の一分間

### 第二十三話 緊迫の一分間

迷宮の闇の奥深くにある第五十階層。そこで、サクラたち四人は額をつきあわせて話し合いをしていた。それを魔王は穏やかな表情をして見守っている。だがその瞳は絶えず、眠っている龍の姿を視界の端に捉えていた。

「一分、それだけ持たせれば良いんやな？」

エルマが声をひそめ、念を押すようにサクラに言った。それにサクラは深く頷いて応える。

「そうだ。攻撃してくる龍を二人で何とか一分、持たせてくれ」

サクラの言葉は重く、抑揚がなかった。シエリカとエルマは眉間にしわを寄せ、緊張を隠せない。龍の猛攻に一分間耐えることは、無茶と難しいのちょうど間ぐらいの難易度であった。

だがここでシアが少々不思議そうな顔をした。そして感じていた疑問をサクラに投げかける。

「一分の間、隠れているのはダメなの？」

現在、龍はサクラたちを倒したと思って眠りにについている。一分たっても起きるとは思えない。だがしかしサクラは首を横に振った。

「ダメだ。私は一分の間に技を放つ準備をするのだが、その時に膨

大な気が発生する。それに龍が気づかないとは思えない」

「なるほど。そういうことなのね」

納得したシアは口を閉じた。そしてシェリカとエルマに視線を送り、そのあと祈るように手を合わせる。手を合わせた彼女は、顔を上げてそのまま天を仰いだ。

「神よ、三人にご加護を」

お金が大好きでいつも冷ややかな笑いを浮かべているシア。そんな彼女のらしくない行動に三人は固まった。だが、その心づかいが伝わったのか三人はすぐさま気を取り直すとシアに笑い返す。そして、龍を倒すべく行動を開始した。

「では……始めるぞ」

サクラは岩陰から出ていくと、目を固く閉じて精神を集中しはじめた。サクラの身体の輪郭が蜃気楼のように揺らぎ出し、気が満ちていく。地面に落ちていた小石が浮かび上がり、サクラの髪の毛が波打ち始めた。

「グウ?……ギヤアアア!」

ただならぬ気配を感じ取った龍が目を覚ました。龍は寝ぼけ眼でサクラの姿を確認するや否や咆哮を上げ、地面を踏み鳴らしながら彼女に向かっていく。だが一方、サクラは向かい来る龍に対して微動だにしなかった。いや、この場合はできなかったのかも知れない。

そのサクラの様子を確認したシェリカとエルマは互いに視線を交

わした。そして二人は声を掛け合う。

「行くわよ！ 援護よろしく！」

「もちろん、ど〜んと任せてや！」

シェリカとエルマは岩陰から飛び出した。エルマはサクラと反対方向に走りながら残り少ない魔力を振り絞って魔銃を乱射。光が線を引いて龍の顔を次々と穿つ。その光はさきほどまでより込められている魔力が弱く、ほとんど見かけ倒しである。しかしそれでも、龍の注意を引き付けるのには十分だった。

「龍はん、こつちやで〜！」

「グギヤアオオ！」

龍は迷宮を揺るがす叫びとともに、エルマに向かって突っ込んでいった。その大木のような前足が振り上げられ、爪が冷たく光る。空気が揺れて嫌な風が起きた。

だがその時、いつのまにか龍の顔に上っていたシェリカがその巨大な眼に剣を突き立てた。眼に切っ先がめり込み、赤く充血していく。そのあまりの痛みに岩龍はエルマどころではなくなつた。

「グゴアアア！！」

龍は身体を丸め、洞窟の中をのたうちまわる。切り裂くような絶叫が轟き渡り、地面が揺れ動く。天井の岩が降り落ちてきて次々と地面に穴を開けていった。その大地震のような揺れの中では、いかにシーカーであるシェリカたちでも立っていることすら難しい。

「うわっ、わわわ！」

間一髪、龍の身体から飛び降りたシェリカはエルマの元へと駆け寄っていった。揺れと降り注ぐ岩のせいでまともに歩けないなかを、何とか彼女に近づいていく。

「シェリカはん、大丈夫やったんやね！」

「もちろん、それよりサクラは？」

「見ての通り、大丈夫や」

エルマは顔をサクラの方向に向けた。シェリカもそれに続く。すると、さきほどと変わらず集中しているサクラの姿がそこにはあった。この大揺れの中、地面に突き刺さっているかのように直立不動だ。しかもその身体は気に満ちて、今にもあふれ出しそうなほどである。

「ギシャアアア！」

痛みから回復した龍が地を裂くような雄叫びを上げた。その眼は怒りに染まり、裂けんばかりに見開かれている。その憎悪の眼差しの先にはシェリカとエルマがいた。二人はその焼き尽くす炎のような圧倒的殺気に思わず身構える。

「これはやばいで！サクラはん、まだなんか？」

エルマがどこかすぐるような調子で尋ねた。するとサクラは目を閉じたまま、かすれた声でつぶやく。

「まだまだ……あと少し……」

「仕方ないわ、あと少し頑張るわよ！」

シエリカがそういうと、龍が攻撃を仕掛けてきた。前足が唸り、風を切る。シエリカとエルマはすばやく後ろに飛びのいた。前足が二人のいた地面にあたり、轟音とともに砕けた岩が飛び散っていく。後には巨大な爪痕だけが残されていた。

「シャアアア！」

龍はその後もし信じ難い速さで攻撃を繰り返した。前足、尻尾、顎の牙などあらゆるものが二人を引き裂かんと迫っていく。それらを二人がかわすたびに地面が揺れ動き、砂や岩が舞い上がった。

「は、速くなってるぅー！」

シエリカが思わず叫んだ。なんと龍の攻撃速度は落ちないばかりが上がっていたのだ。龍の身体が風を切る音が、だんだんと洗練され硬質的になっていく。二人の背中を恐怖感が走り抜けた。

すばやさには自信のある二人であつたが、だんだんと攻撃をかわすのが厳しくなってきた。余裕でかわせていた前足が、二人の長い髪を掠めていく。

「あかん、そろそろ……」

エルマの身体がいよいよ動かなくなってきた。だが、龍の体力に限界はないのか攻撃はなおも続いていく。そしてついに……

「くっ、痛あ……」

エルマの足がつった。普段は援護役で精密な動きはしても激しい動きはしない彼女。速い動きに筋肉が限界を超えた故であった。

エルマは痛みに負けず、足を引きずって何とか動こうとはした。しかしこの状況でそんなことは無意味。岩龍の爪が迫り、その柔らかい肉を裂こうとする。

「エルマあ！」

シエリカが感情を爆発させて声の限りに叫んだ。甲高い絶叫が迷宮の中を幾度となくこだまする。この時であった。瞬間的にはあるが、激情に燃え立つシエリカの身体がにわかに強烈なオーラを放った。遠くでもはっきりと認識できたそのの大きさに、魔王は眉をひそめて首を捻る。

するとどうしたことだろう、エルマに迫っていた前足の軌道がなにかをぶつけられたようにずれた。それによって龍がほんの一瞬、動きを止める。まさにその時であった。

「グア？」

龍の背後で何かの気配が爆発した。かたかたと地面が震えて、大気が火花を散らす。その巨大な気配に龍は何事かと攻撃を中断して後ろを振り向いた。

するとそこには鬼気迫る表情をしたサクラが立っていた。眼光は鋭く、気が溢れて空気を揺らめかせている。そしてその手には黄金

色の炎に輝く刀が握られていた。

「準備完了だ……さあ行くぞ！ 裁きの星をその身に刻め、北神・星刻斬！」

気迫の籠った叫びとともに、黄金の輝きがいつそう明るさを増した。それはまさに太陽のごとく、闇に沈む迷宮の洞窟を鮮明に照らし出す。そしてその直後、サクラの身体が空に舞い上がったのだった。

## 第二十四話 恐怖は二度あり！

第二十四話 恐怖は二度あり！

「やあああ！」

サクラは魂からの叫びとともに流星のごとき光となった。その身体は迷宮の洞窟を一直線に飛び、光の道を形作る。黄金色に輝く刃は龍の巨大な身体に煌々と光る線を描き出した。

一本、二本と光の線は増えて交わっていく。そしてサクラが地面に降り立った時、線は黄金の輝きに満ちた五芒星となっていた。星は龍の身体に消えることなき刻印の如く刻み込まれ、その身体を焦がしていく。

「キギヤアアアー！」

龍はこれが最後とばかりに咆哮し、迷宮の洞窟を揺らした。だが、その身体に刻まれた星の輝きは増していくばかり。無駄な抵抗であった。

「……滅びよ」

刀が鞘にしまわれた。刹那、星の頂点が輝き、白い光がほとばしる。閃光は結び付いて金色であった星を白に染め上げた。

純白の爆発、鳴り響く轟音。龍の身体が光に飲み込まれて、迷宮その物を吹き飛ばすような爆音が鼓膜を裂く。暗闇に白く燃えた星の光が、迷宮の中のすべてを飲み込んでいった。

その焼き尽くすかのような光の洪水に、すでに岩陰へと待避していた仲間たちも思わず目を閉じた。そして龍の方を向いて割れんばかりに叫びを上げる。

「サクラはんやり過ぎやで！」

「まぶしっ！」

「ほう……これはなかなか大したものだ」

四人の麻痺した感覚がようやく戻る頃、爆発は収まった。そこには威風堂々たる龍の姿はすでに無く、代わりにその身体の無惨な破片だけが飛び散っていた。

「ふう……にゃんとか倒せたぞ」

龍の死骸を背にして、サクラが仲間たちの元へと帰ってきた。その足はふらふらで、舌すら満足に使えていない。仲間たちはそんな彼女を優しく抱き留めて、ねぎらいの言葉をかける。

「サクラはん、助かったで！ みーんなあんたのおかげや」

「私もあなたには頭が上がらないわね」

「私も同感」

サクラは仲間たちの優しい言葉に目を潤ませた。感極まって今にも泣き出しそうだ。その時、魔王が追い打ちをかけるように小さくつぶやいた。

「言っただけのことはやった。ゆつくりと休むがよい」

サクラの涙腺に限界が来た。彼女は頬を濡らしながら、仲間たちに感謝の言葉を述べる。その顔はとても晴れやかであった。

「あつ、ありがとうみんなにや……私はうれしいぞ」

サクラのネコのような言葉を聞き、みんなは盛大に笑った。普段、堅物な印象が強いサクラだけにネコ語なのはとても笑えたのだ。

そんな風にみんな揃って談笑していると、シアがそわそわとし始めた。彼女はみんなを見回すと、こっそり岩の陰から出ていく。背中を丸めて抜き足差し足、忍び足というような感じで。その手にはひよこの財布が抱えられていた。

「魔力球を回収……」

シアはスウツと龍の残骸の散らばる位置まで来ると、目を皿のようにして魔力球を探し始めた。その目にはお金のマークが浮かんでいて、魔力球をネコババする気満々だ。ところがそこに見慣れた魔力球は無く、代わりに血のように紅い奇妙な文字が刻まれた骨しかなかった。

「これが龍の魔力球？ 骨にしか見えないわ……」

シアはその妙な骨を手にとると顔をしかめた。魔力球というのはその名前の通り球体だ。こんな骨のような形をしたものなどシアには見たことも聞いたこともない。

だが魔力球らしきものはこれの他にはない。なのでシアはしばらくその場でこの骨を持って帰るかどうかが考え込む。

「さっ、もう今日は帰ってパーティーでもしましょ！ あれ……シアは？」

シアが考え込んでいると、シェリカがシアのいないことに気づいた。彼女に続いて他の三人もシアを探し始める。すると、魔王がすぐにシアの姿を見つけた。

「何をやっておるのだ。帰るぞ」

「ちょっと待って」

シアはとりあえず骨を財布に押し込んだ。太ったひよこがさらにはち切れそうになる。魔王はそのひよこの財布を見て眉をひそめた。

「シア、今それに何か入れなかったか？」

「……別に何も入れてないわ……」

「いや、何かを入れたはずだ。妙な魔力を感じる」

シアは沈黙した。罰の悪そうな顔をしてただじっとしているだけだ。すると、ひよこの財布がもごもごとうごめき始めた。そしてそれは限界以上に膨らむと、突然弾け飛んでしまう。飛び散った金貨の姿に、シアの顔が青ざめた。

「ひっ、ひい！」

「いかん！」

魔王はシアの元へと駆け寄り、その身体を抱き抱えた。そして急いでその場から逃げていく。財布を弾き飛ばした骨が宙に浮かび上がった。骨に刻まれている紅い文字が生きているかのようにのたうち、揺らめく。その様子はちょうど、脈打つ血管のようであった。

「あれは一体なんや！」

「何なのよあれ！」

洞窟の奥に移動していたシェリカとエルマ、そしてその手に抱えられたサクラが戻ってきた。三人はそれぞれ宙に浮く骨に視線を向けている。その時、彼女たちの大きな目は限界近くまで開かれていた。

「あれはおそらく呪術に使う核だ。あの様子からすると死霊術だろうな」

魔王の一言に、四人は凍りついた。死霊術というのは、死体を蘇生させて操る呪術のことである。これが使われているということは、龍はすでに死んでおりその死体を何者かに操られていたということだ。しかも厄介なことに、死霊術というのは核を破壊しない限り解除されない。つまり、核を破壊しなければ死体はいくらでも再生するのだ。

「死霊術ですってえ！ 誰がそんなことを！」

「わからぬが恐るべき術士であろうな。あれだけ完璧に龍を蘇生するとはそもそも人間にできるかどうかすら怪しい。……まあ今はそ

んなことは良い。あれを何とかせねば」

魔王はそういつと鋭い視線で骨の方向を見た。骨を中心としてすでに無数の血管が網の目のように伸びている。それらは一定の感覚で脈打ち、その周りにはわずかながらも筋肉が再生し始めていた。

「くう……どうするのよ！ サクラはもう戦えないし、私たちだけじゃ火力不足よ」

絶望に染まったシエリカの声が洞窟に響いた。その叫びに他の仲間たちも顔を俯けて何も言えない。魔王もまた、複雑な顔をして黙っていた。

そうしているうちに龍はどんどん再生していった。骨格や筋肉が次々と再生され、辺りは血に濡れていく。骨と筋肉ばかりで構成されたその紅い姿は悍ましく、そして醜かった。だが、その表面をめがけて飛び散ったオリハルチウムのかけらが張り付いていき、龍は元の勇姿を取り戻していく。

「グオオオ！」

八割がた再生した龍が空気を貫くような雄叫びを上げた。咆哮が天井を轟かせ、地面が震える。復活したことにより、龍の叫びは以前よりさらに凄みを増したようであった。それを聞いたシエリカたちはたまらず恐怖におののく。その顔は青くなっていてまったく生気がない。

だが、魔王だけはその雄叫びを聞いて覚悟を決めたような引き締まった顔になった。そして、凜とした口調で四人に告げる。

「サクラには悪いが……。どうやら余が戦うべき時が来たようだ」

## 第二十五話 魔王の本気

### 第二十五話 魔王の本気

魔王はゆつくりと龍に向かって歩き出した。その大きな背中からは巨大な気配が放たれていた。シェリカたちはその悠然とした魔王の姿に息を呑む。

「ギジャアアア！！」

魔王の殺気に触発されたのか、龍が悍ましい声で叫んだ。迷宮を揺らすその叫びはまさに絶対零度のごとく、聞く者の心胆を凍えさせるものであった。

しかしそのような物は魔王には関係ない。彼は響き渡るけたたましい咆哮を、木のざわめき程度に無視した。そして何も聞こえてないかのように悠然と龍の前に立ち塞がる。

「行くぞ！ お前たちは下がっている！」

「わかったわ！ ほら、みんな下がるわよ！」

三人は岩陰から素早く飛び出して、さらに後ろの大岩に隠れた。魔王はそれを後ろ目で確認すると、杖を身体の前に構える。龍と魔王の間に緊迫した空気がにわかに張り詰め、刹那の沈黙が訪れる。

瞬間、魔王の気配が膨れ上がった。増大した気配はたちまちのうちに迷宮中に伝わり、地面がピシッと鳴った。

「ふぬっ！」

魔王の姿が突風とともに消えた。臃げな陽炎のように消えた魔王。彼のいた場所には窪んだ地面だけが残されていた。だが、龍が消えた魔王に気を取られた次の瞬間、その巨大な顔の前に魔王は現れた。

「ダークアロー！」

魔王の杖から周囲の闇よりなおも暗い闇の矢が飛び出した。無数の矢は龍の強靱な外殻をいともたやすく穿っていく。顔に空いた穴から鮮血ほとばしって、龍は自らの血に染まっていた。

「ウギヤアアア！」

肺が張り裂けんばかりに息を吸い、龍は壊れそうなほどの悲鳴を上げた。火薬の炸裂音よろしく空気が押し揺るがされて、岩陰のシエリカたちは恐怖に身を寄せ合う。

だが魔王自体は龍の悲鳴になど頓着しなかった。彼は魔法の反動で洞窟の中を高く高く舞い上がっていく。そして、洞窟の天井近くに差し掛かると、天井を強烈に蹴った。天井が大きく窪み、魔王が砲弾のような速度で飛び出す。その速さたるや、音にも迫るうかというほどだ。

「グウオ……」

魔王の蹴りが龍の首元に炸裂した。龍の巨体が揺らぎ、崩れ落ちる。ぐらぐらと洞窟が揺れ、天井から岩がいくつも崩れ落ちてきた。地面が裂けて、その見えない亀裂が走り抜けていく。

魔王はそこから龍に次々と技を繰り出し、再び立ち上がる隙を与えなかった。だが、その攻撃のせいでいよいよ洞窟内は危ない状況になってきた。天井から細かい石が降り注ぎ、ときどき大人より大きな石が落下する。

魔王はそれでも別に良かった。岩が当たるくらい大したことではない。だが、この洞窟には魔王と龍以外にもあと四人いた。シェリカたちだ。

「うわああ！　こりゃあかん、避難するで！」

「避難するってどこへよ！」

「えつと……」

「あそこの門を越えたところならたぶん安全」

シアが洞窟の入口の門を指差した。確かに、門の向こうでは岩は降っていない。エルマとシェリカはともに頷き、サクラに肩を貸して避難を開始しようとした。だが……。

「待ってくれ、私は避難などしない」

サクラが突然、きつい口調で言った。その声はさきほどまでのふやけた物ではなく、いつもの引き締まった凛々しい声に戻っている。シェリカたち三人は思わずその言葉に耳を疑った。

「何を言ってるのよ！　このままだと生き埋めよ！」

「そうやで！　危険過ぎる！」

「……死んでしまっわよ？」

「確かに死ぬかもしれない……。だが！ だからといって、魔王に全部押し付けて自分たちだけ安全な所に逃げるのは良いのか！？」

「それは……」

「うう……」

「……言い返すのは無理だわ……」

三人は揃って言葉に詰まった。彼女たちは困ったような顔をして立ち尽くすことしかできない。そうしてシェリカたちが呆然としている間に、サクラは地面にどつかと腰を降ろした。さらにあぐらを組み、刀の鞘を突き立てて、決して動かない構えを取る。

サクラのその態度を見たシェリカたちは、その意志の固さを悟った。三人は顔を見交わして苦笑すると、優しい顔になる。そしてシェリカがサクラの肩に手を掛けながら告げた。

「……わかった、私も残るわよ」

シェリカは腰の剣を地面に置いた。そしてサクラと同じように地面にしゃがみ込む。その目には固い意志が燃えていた。

「……仕方がないわね、私も付き合っわ。ただし、私が死んだら困るから防御用の魔法陣を張るわよ。私だけじゃ魔力が足りないからシェリカ、エルマ、二人とも魔力をかけて」

シアはいつもの無表情のままシェリカとエルマに手を差し出した。シェリカはその手をなんのためらいもなく握りしめて、魔力を注ぐ。だが、エルマの方は何故か顔が強張った。

「えっ、シェリカだけやのうてうちも？」

「そうよ……。まさかあなた、この雰囲気の中で逃げるつもりだったの？ もしそうだったら私はあなたを『ヘタマ』って呼ぶわ」

「そ、そんな訳ないやろ！ だからヘタマは勘弁して！」

エルマは泣きそうな顔をして手を差し出した。シアはそこからエルマの魔力を存分に受け取る。そして、先に受け取っていたシェリカの魔力と合わせて魔法陣の構築を始めた。

一方、魔王は攻撃を一時中断して、四人の様子を見守っていた。幸いにも龍は魔王の連続攻撃に気を失いかけていたのだ。

しばらくして、サクラやシェリカたちを淡い光が覆った。シアの防御魔法が完成したのだ。魔王はそれを確認すると、龍に不適に笑いかけた。そのとき龍は、半気絶状態から脱しつつあった。

「戦闘再開だ」

「グアオオオオ！！」

戦う者の心は通じ合うのだろうか。魔王の言葉に龍は咆哮を持って応えた。そして、さきほどの鬱憤を晴らすべく怒涛の攻撃を開始する。

爪が風を切り、地面を深々と裂く。尻尾が唸りを上げて、巨大な岩を粉微塵に打ち崩す。さきほどまでよりもさらに速くなったそれらの攻撃を、魔王はなんなくかわしていった。一切の無駄がなくそれでいて優美に。銀の髪を揺らして戦う魔王の姿はさながら舞踏会の貴公子のようであった。

「ギャオオオ!!」

龍にとって魔王の舞は、いらいらさせるものでしかなかったようだ。魔王に対する苛立ちが極限まで募った龍は、その口に膨大な魔力を蓄え始める。小癪な獲物を丸焼きにしようという腹だ。

「プレスか……しかもかなり魔力を込めているようだ。……かわせぬな、守護陣一式!」

シェリカたちに向かって放たれたものより、さらに数段強力な魔力を帯びたプレス。さすがに素で耐えるには分が悪いと思った魔王は、杖で手早く地面に魔法陣を描いた。そして、己の持つ莫大な魔力を惜し気もなく込める。オレンジ色の光の壁が魔王を包み込み龍に立ちはだかった。

ちょうどその時、岩龍の方も魔力を蓄え終えた。口から青い魔力の炎が放たれる。空気を焦がし、岩を溶かし、炎は魔王へと迫っていく。しかし、魔王の方に一切の動揺はなかった。眉一つ動かさぬまま魔法陣ごと炎に包まれていく。

魔王がいた辺りの地面が灼熱の溶岩になったところでプレスは収まった。龍はいなくなっただであろっ生意気な獲物を想像して満足したのか目を細める。だがここで、彼にとって想定外のこと起きた。何かが溶岩の中から跳んだのだ。その出来事に龍は開けていた口を

閉じることできない。

「油断したな……。ハイプロージョン！」

無防備な龍の口から閃光がほとばしった。洞窟の中が一瞬、白くなるほどの光だ。しかもそこはオリハルチウムの外殻に守られていない岩龍の最大の弱点であった。

もはや龍になすすべはなかった。龍の頭は内側から粉々に吹き飛ばされて、巨大な身体が轟音と埃を連れて崩れる。

「よし、後は……」

龍が倒れたところで、魔王は呪術核を探し始めた。目を閉じて微弱な魔力の流れを探っていく。魔王の精神は瞬く間に無に達して、極限まで感覚が研ぎ澄まされた。その結果、魔王はすぐにそれらしき魔力の波動を感じとった。

「これが……うむ、間違いない」

それは肉に埋もれて血で濡れていたが、白い骨に紅く刻まれた幾何的な文字、間違いなく呪術核であった。魔王はそれを今だ血の流れる肉の塊から引っ張り出すと、手で握り潰した。乾いた音がして、骨は粉と化し消えていった。

「ほう、これは……」

龍の身体が光となっていった。巨大な骸が淡い燐光となり、空中へと消えていく。光の花が咲き乱れたようになって、あたりは一面彩色の海に飲まれていった。こうして、魔王たちはようやく龍を倒

したのだった。

## 第二十六話 神と職業

### 第二十六話 神と職業

龍との戦いを終えた魔王。彼はくると龍のいた場所に背を向けると、仲間のもとへと歩き始めた。だがその時、魔王の頭の中に声が響いた。それは様々な音の混ざりあった、不協和音の権化とも言うべき声であった。

「龍討伐おめでとー」

「混沌神か。何のようだ？」

「まあまあ、そんな怖い声しないで。龍を倒したあなたとその仲間たち、ちょっとしたプレゼントがあるだけよ」

「プレゼント？」

魔王は少し驚いたような顔をした。彼は頭を上げて、どこかに潜んでいるであろう混沌神に向かって疑わしげな視線を送る。すると、けらけらと薄気味悪い笑いが聞こえた後、混沌神の言葉が返ってきた。

「そうよ。迷宮ができた遥かにしえの昔よりの決まりでね、試練の龍を倒した者にはその者にふさわしい力を神から授けるの。今回は龍を倒したあなたたちのパーティー全員に、神を代表して私が力を授けるわ」

「どのような力なの？ ろくでもないものならいらぬが」

魔王は口元をにやりと歪めて問い掛けた。混沌神はその問い掛けにわずかばかり心外そうに答える。

「人間たちが職業とかクラスとか呼んでいるものよ。肉体を改造してより戦いやすい身体にするの。例えば戦士という職業につけば力が強くなったり身体が頑強になったりするわ。まあ、身につけておいて損はない力よ」

「ほう、かつての勇者どものようだな」

魔王はかつて自らを襲ってきた勇者を捕らえた時、似たようなものの話を聞いたことがあった。昔のこととは言え、自らを倒そうとした者たちと似たようなことをするとは――魔王は自らに起きようとしている事態を皮肉に思って苦笑した。

魔王がそうしている間に、混沌神はその姿を現した。紫にたなびく靄のような一カ所に集まって人の形をなす。神殿の時とは違い明瞭な姿をとった混沌神は、まさに精緻を極めた人外の美貌を誇っていた。白く揺れる衣にたつぷりと蠱惑的な曲線を描く身体。顔は彫りが深く、高く抜けた鼻と大きな瞳がえもいわれぬ魅力を放っている。

姿を現した混沌神は、手頃な大きさの岩に腰掛けた。そしてけだるい様子で長い足を組むと、魔王に向かって言う。

「儀式を早く始めたいからさ、あそこにいる女の子たちを呼んできてくれない？」

「わかった、呼んできてやろう」

魔王は今度こそシェリカたちの方へと歩き出した。そしてほどなくして彼は防御魔法による光の壁の前に到着する。すると魔王が来たことに気づいたシアが魔法を解除した。魔法陣が消えて、壁もすぐに無くなってしまう。

壁が無くなった瞬間、シェリカが魔王に抱き着いた。彼女はそのまま少し赤く充血した目で魔王の顔を見上げる。魔王は訳がわからず混乱をきたした。

「どうしたのだ？ 目も赤くなっているが」

「べつ、別に何でもないわよ！ ……それより、あの人が何かを待ってるんじゃないの？」

シェリカはずいぶんと慌てた様子であった。言葉は囁んばかりで様子がおかしい。だが、混沌神を待たせる訳にもいかないので魔王はすぐに用件を告げた。

「ああそうだ、忘れかけておったな。……四人とも、あそこにいる混沌神が呼んでいるぞ」

「こっ、混沌神さま！」

四人の顔つきが変わった。みんな揃って目を見開き、驚いた様子で混沌神の方に振り向く。混沌神は四人の視線に、含みのある笑いでもって応えた。

「あれが混沌神さまか……。こっつい美人やなあ。せやけどあんま神様らしくないな……」

「うーん、確かにあの笑いはな。シアみたいだ」

エルマとサクラは共に複雑そうな顔をした。だがその時、シアの鉄拳が二人の頭に炸裂した。景気の良い音がして、二人の頭がぐんぐんと揺れ動く。

「……不謹慎。くだらないことを言っていないで移動しましょう」

シアはすたすたと、魔王たちよりもさらに一足先に混沌神のもとへと歩いていった。それを見た魔王やシェリカたちは急いで後を追いかけていく。数十秒も経たないうちに魔王たちは全員、混沌神の前に揃った。

「全員揃ったようね。それじゃあらためてはじめまして、私が混沌神よ。今日は五人に職を授けに来たわ」

シェリカたち四人の顔が固まった。彼女たちはきょとんとして混沌神に無垢な目を向ける。彼女たちが何も言葉を発しようとしないので、辺りに重い沈黙が現れた。だが、その沈黙はすぐにシェリカによって破られることとなった。

「……職業を授けるつもりかしてクラスアップのことですか？でもあれは五百年前に絶えたと聞いたことがありますけど……」

「クラスアップのことよ。絶えていたのは別にできなくなったという訳ではなくて、誰もクラスアップの条件である龍討伐をしなかったから。一応、龍討伐をしたパーティーの一員であるあなたたちは大丈夫だわ」

「やつ、やったあ！」

シェリカたちは歓喜に包まれた。五百年絶えていた伝説の儀式を執り行ってもらうのである、喜びもひとしおだろう。四人は互いに笑いあつてしばしお互いの幸福を喜びあつた。

「はいはい、喜ぶのは良いけどそこまでにしなさい。私は忙しいんだから。それでは早速……」

どこか呆れたような顔をした混沌神は、地面に指で大きな円を描いた。すると円が青く輝き、円周から複雑にして幾何学的な文様が中心に向かって広がっていく。光輝く文様は瞬く間に円の中を埋め尽くしてしまった。

「よし、オッケー。さてと、まずはその紅い髪の子。こっちに来なさい」

「はい！」

シェリカはかくかくと硬い動きで歩いた。そして混沌神に誘導されるがままに魔法陣の上に乗る。魔法陣は混沌神の特徴を反映したのか絶えず靄のようなものを出していたが、シェリカは問題なくその上に乗れた。

「それじゃ、クラスアップの儀式を始めるわ」

混沌神の口から儀式の開始が宣言された。すると、シェリカの身体を緊張が走り抜けて背筋が硬直したのだった……。

## 第二十七話 新たな力

### 第二十七話 新たな力

静けさ漂う迷宮第五十階層。暗く、闇に閉ざされたその奥で今まさにクラスアップの儀式が始まろうとしていた。

「さてと……この娘はどんな職業が向いてるかな？ ……ふぬ？」

混沌神はシェリカの目を見つめて眉をひそめ、首を捻った。そして何度も、訝しげな顔をしてシェリカを見る。その表情と行動に、シェリカは緊張して息を呑んだ。だがしばらくして、混沌神は落着きを取り戻すとシェリカの職業を決めた。

「……何か妙な気配を感じたけど気のせいかしら？ ……それよりもそうねえ、あなたの職業は魔法戦士が良いかしら」

「それでお願いします！」

「よし、なら早速クラスアップしましょう……」

混沌神はシェリカの肩に手を乗せると、目を閉じて呪文を唱え始めた。魔法陣が輝き、中から光の粒が吹き出してくる。その七色の光はたちまちシェリカを中心に渦巻き、その身体に吸い込まれていった。その時のシェリカは心地いいのか、恍惚とした顔をしていた。

光はものの数分で収まり、残さずシェリカの身体に吸い込まれた。

混沌神はそれを確認するとシェリカの肩から手を離して空中でぽんと叩く。

「これでおしまいっと。これであなただは魔法戦士よ。新たに魔法剣という技が使えるようになってるから、使ってみなさい」

「ありがとうございます！」

シェリカはぺこつと頭を下げると、後ろに戻っていった。それを混沌神は微笑みながら見送る。そしてまた次の者を呼んだ。

「次はその着物の娘。こっちに来なさい」

「次は私が。はい、いま参ります」

サクラが前に出て行くと、シェリカの時と同じように儀式が行われた。その結果、彼女は『侍』という職業に就いた。これは刀を使つて戦うと能力が上がるという職業であつた。

その後も特に何事もなく儀式は進行していった。シアもエルマも無事にそれぞれ『僧侶』と『銃士』という職業についた。シアがクラスアップする時に混沌神が『僧侶』にしては……黒過ぎるかな？』とか言っていたが、それはたいした問題ではないだろう。

こうして四人の儀式が終わつた。そしていよいよ最後、魔王の順番がまわってくる。彼はシェリカたちの暖かい視線に見送られながら混沌神のもとへと歩み寄る。すると混沌神は待つてましたと言わんばかりの顔をした。

「魔王、あなたの職はすでに決まっているわ」

「ほう……。いったい何なのだ？」

「混沌魔法士よ」

「混沌魔法士？ 聞いたことがないな」

魔王はわずかに眉を寄せた。長く生きてきた彼にもそんな職業、聞いたことがなかったのだ。すると混沌神の両手が淡い光を帯びた。さらにそこから色とりどりの光の球がつぎつぎと現れる。混沌神はそれを手で弄びながら、魔王に言った。

「混沌魔法士というのは、複数の属性の魔法を重ねて使える魔法使いのことよ。実演するからちょっと見てて」

混沌神はそういうと手の平を前に突き出した。するとさきほど出した魔力球が集まり重なっていく。光の球は一つ重なる度に稲妻を辺りにほとばしらせて輝きを増した。そこからは濃密な魔力があふれて景色が揺らぎ始める。

やがて七つあった魔力の球が一つになった。その魔力の球は夜空にきらめく億の星のごとく光り、大海の水のように莫大な魔力にたぎる。

「この世を支えし七つのエレメントよ、我が手に集まり力を示せ！  
アブソリュート・ブレイク――！」

光の球が勢いよく放たれた。光は七色の虹を迷宮の闇に描き出し

ていく。一呼吸もたないうちに、球は迷宮の大空間を突っ切った。そして弾丸よろしく岩壁に突き刺さり、そこから光の大洪水を巻き起こす。瞬間的に迫ってきた濁流に、シェリカや魔王たちはなすすべもなく飲みこまれていった。

「すつ、すごい……」

「この頑丈な迷宮に穴が……」

「強烈すぎやで」

光が過ぎ去った後、五人の目の前にあったのは一直線に続く長い長いトンネルであった。一体どこまで続いているのか、その果てを見ることすらできない。しかもその壁は岩とは思えないほどなめらかで、つやつやとしていた。シェリカたちはそれを覗き込んで、にわかに顔を青くする。

その一方、混沌神は得意な顔をしていた。俗な言い方をすればどや顔というやつであろうか。さらに魔王もにやりと口もとを緩める。彼の表情はどこか楽しそうですらあった。

「面白い技だ」

「でしょう？　じゃあ早速クラスアップするわね」

混沌神はさきほどと同じように魔王の肩に手を置き、呪文を唱えた。するとどこからか紫の靄が沸き起こり魔王を包む。魔王は一瞬身構えたが、それはどこか暖かで心地好いものであった。それゆえに魔王は構えを解き、なされるがままにしておく。

一分だったか、はたまた一時間だったか。魔王にとって短かったような、長かったような、なんともあやふやな感覚の時間が過ぎた。儀式を終えた混沌神は、魔王の肩からゆっくりと手を離す。

「クラスアップはこれで終了よ。あとは……」

混沌神は急に真剣な顔をした。彼女は手に魔力を帯びさせると空中に円を描く。するとどこかに通じる歪みのような穴が開き、中から古ぼけた銀の槍が現れた。槍はところどころ赤錆が浮いていて、お世辞にも綺麗なものではない。だがそれを見た瞬間、魔王の目の色が変わった。

「……これが槍か。なるほど、恐ろしい存在だな」

「へえ、少しはこの危険性がわかるのね」

「ああ、臃げだがな」

混沌神は魔王の返答に満足そうに頷いた。そして手にした槍をゆっくりと撫でながら魔王に説明を始める。

「そう、なら話は早いわ。これはあなたも思った通りただの槍ではない。破壊と混沌を司る最強の槍よ。ひとたび真の力を発揮すれば、攻撃対象となった存在を全時間軸、全平行宇宙から因果率レベルで抹消するわ。それが存在していたという痕跡すらもね。もっとも、今は力を封印されているからただのぼろい槍だけど」

「想像以上にろくでもない物だな。だが、それを余にどうして欲しいのだ？ 出したからには何かあるのであろう？」

「勘が良いわね、ならば単刀直入に言うわ。魔王、これを預かって欲しいの」

「何？」

魔王は鋭い目を混沌神に向けた。混沌神はいつもの飄々とした態度とは異なり、刺すような険しい顔をしている。その目は澄み切っていて曇るところがなかった。

魔王はその真剣そのものな態度に何かを感じ取った。そして、目を閉じてしばらく考え込む。その後、魔王はゆっくりと重い口を開いた。

「良からう、預かってやる。だが、一つ質問に答えてくれ。そなたが槍を預けたことは龍が操られていたことと何か関わりがあるのか？ 仮にも神の管理する迷宮で試練の龍と呼ばれるものが操られ続けていた上に、今の槍の話だ。何かあるのであろう？」

「結論から言うと関係あるわ。だけど詳しくは言えない。私も言いたいのはやまやまのだけどこれまた規則でね。すまないわ」

混沌神はなんと魔王に頭を下げた。さすがの魔王もこれには面食らった顔になる。プライドの高い神、しかも最高位に近い存在が魔族に頭を下げるなどありえないことであった。

「頭を上げてくれ。神に頭を下げられるなど気味が悪い。事情はわからぬがそなたが真剣なのはわかった。槍は預かってやろう」

魔王は無愛想な様子で混沌神に手を差し出した。混沌神はその手に向かって微笑むと、丁寧に槍を握らせる。

「……預けたわよ。良い、今は封印されていて力を発揮できないけどそれは世界で一番危険なものだわ。だから丁寧に保管して」

混沌神は魔王に向かって最後に念を押した。魔王はその言葉に深く頷く。それを見た混沌神は安心した顔をした。その姿はだんだんと薄らいでいき、やがて神聖な気配だけを残して消える。魔王はそれを、割合真剣な顔で見送った。

「さて、帰るか。だがその前に……」

魔王は槍を手品のようにマントの中へしまうと、シェリカたちを見回した。すると、何故か呆れたような視線が魔王に帰ってきた。

「さっきから何を突っ立ってるの？」

「……混沌神め、また記憶をいじったのか」

魔王はシェリカの言葉にしばらく前の神殿での出来事を思い出して苦笑した。そして、どこか知りたがりな顔をして近づいてくる彼女たちをうまくごまかして煙りに巻く。

こうしてそのあとは特に何事もなく、魔王たちは迷宮から帰還したのであった。

## 第二十八話 闘神祭へ向けて（前書き）

今回は主に敵サイドの話です。

## 第二十八話 闘神祭へ向けて

### 第二十八話 闘神祭へ向けて

龍との戦いの翌日。一晩かけて戦いの疲れを癒した魔王たちは、シーカークランへと来ていた。いつもの受付嬢に、龍を倒したことを報告するためだ。

五人は混み合うクランのカウンターにつくと、早速報告をするべく受付嬢を呼ぶ。するとたまたま仕事がなかったのか、彼女はすぐに現れた。

「ああ、魔王さんたち！ おはようございます。今日は何の用ですか？」

「この間の龍のことだな」

「あれのことですか……。やっぱり無茶でしたよね。いいですよ、気にしてませんから」

「いや、きちんと倒して来たぞ。ほれ」

魔王はマントの中から大きなメロンほどもある魔力球を取り出した。受付嬢は驚きのあまり、その魔力球に顔をぶつけそうほどの勢いで近づける。そのとき彼女は目をぱくりさせていて、口も半開きになっていた。

「この色といい大きさといい……。これ間違いなくボスのものじゃないですか！ ほっ、本当に龍を倒してきたんですね！」

「ああ。間違いなくな」

魔王は少し誇らしげに微笑んだ。その後ろでシェリカたちもいたずらっぽく笑う。すると受付嬢は五人の様子を見て、みるみるうちに顔をほころばせていった。

「良かったです！　まさか皆さんがああの厄介な龍を倒してくれるなんて！　でも私にはわかってましたよ、皆さんならやってくれそうな気がしたんです！　だから……」

受付嬢は耳に響くような大きな声で、次から次へと言葉を発した。洪水のごとく溢れ出したその言葉は、たちまち周りのシーカーたちの耳に留まった。噂好きなシーカーたちはすぐにひそひそとざわめき始めて、魔王たちの方ににわかに視線が集まってくる。

「すげえなあいつら、聖銀が断った依頼を達成したのかよ」

「そうらしいな。まったくたいした奴らだぜ」

「しかも話を聞いてれば無名の新設ギルドじゃねえか」

クランにいたシーカーたちの話題は、たちまち魔王たちのことで独占された。無名の新設ギルドが、最強と謳われた聖銀騎士団が受けなかった依頼を成し遂げたのだ。シーカーたちが驚愕して騒ぎ始めたのも当然だった。

そうしてクランの中は騒然とした雰囲気包まれた。だが、そんなクランの端の方で苦い顔をしている集団がいた。彼らは全員胸に銀のブローチを輝かせている。そう、聖銀騎士団だ。

「魔力の反応からもしやと思っていましたが……。彼らは五体満足な状態で完全に龍を倒したようです。これでは計画は失敗ですよ」

ユリアスはその刃のような翡翠の瞳で騎士団の面々を射抜いた。その眼光の鋭さには屈強な騎士団のメンバーたちもたじろぎ何も言えない。気まずい沈黙がユリアスを中心として沸き起こった。

しかしその時、一人の女がユリアスに向かって一歩前へと進み出した。色白で長い金髪をした妖艶な女だ。彼女は手にした傘をかつかつと鳴らしながら前に出ると、ユリアスにうやうやしく頭を下げる。そして、甘い溶けるような声でユリアスに告げた。

「ユリアス様、確かに今回の計画は上手くいきませんでした。現に半死状態になっているはずのシェリカたちがぴんぴんとしております。しかし……」

「しかし、なんですか？」

「一定程度は今回の計画も成功したのではないのでしょうか」

「ふふっ、これは面白いことを言いますね、アイリスさん……」

ユリアスは口元を押さえて笑うとアイリスの目を見た。ユリアスの絶対零度のごとく冷たい視線が容赦なくアイリスに襲い掛かる。だが、その常人なら一瞬で気絶しそうなプレッシャーにアイリスは軽い調子で応えた。

「今回の計画は龍に再起不能までシェリカたちを痛めつけさせた上で死霊術を解除、ぼろぼろになったシェリカたちに槍を継承させる

「というものでした」

「ええ、そうでしたよ。混沌の継承者が試練の龍と戦いその最中に龍が死ねば、龍の死因がどういう理由であれ、継承者の状態がどういう状態であれ、混沌神は盟約により槍を渡さなければなりませんからね。今回はそれを逆手に取った計画でした。ですが……」

ユリアスは忌まじまじげに魔王たちの方に視線を向けた。そこには受付嬢の話にうんざりしながらも、至って元気そうな魔王たちの姿があった。決してユリアスたちが想定していたような、再起不能な様子ではない。ユリアスはそれを改めて確認すると、唇を血が出るほど噛み締めた。

「きいい……！ 連中はああして元気そうにしていますよ！ 本来なら再起不能なほどぼろぼろになっているはずだったのにね……。これのどこが成功のですかアイリスさん？」

「ユリアス様は連中をずいぶんと過大評価しているように私は思います。特にあの魔王とかいう男には異様なほどに。ですが私が思うに連中はたいした脅威ではありません。連中が健康であれ、瀕死であれ槍は奪えるでしょう。ですから、計画は成功したも同然かと」

「ほう……ではアイリスさん。あなたはあいつらに勝てるのですね？」

「間違いなく勝てます」

アイリスはきっぱりと断言した。その言葉は余裕に満ちあふれていて、その目は確かな確信に輝いている。その瀟洒でゆとりのある彼女の態度は、彼女の自信のほどをユリアスにも感じさせた。

「わかりました、自信があまりのようですね。良いでしょう、あなたに良い機会を与えます。今度の闘神祭にあなたが聖銀騎士団の代表として出なさい。もしそれであなだが、きつと出場するであろうあの魔王とかいう男に勝てたら、あなたに団長職をおゆずりしましょう」

「本当ですかユリアス様!？」

「もちろんですよ。あと、ついでに『杯』も貸して差し上げましょう。その力をいくら使っても構いませんから、必ず勝つのですよ」

「必ずや……」

アイリスは片膝をつき、緊張した顔をしてユリアスに頭を垂れた。ユリアスはそれに深い頷きでもって応える。

こうしてユリアスたちの話が終わった時、ちょうど魔王たちの方も受付嬢の長すぎる話が終わった。魔王たちは微妙にやつれたような表情をしてクランから出ていく。ユリアスはそれを見ると、アイリスたちに後をついて行かせた。そして自分は近しいわずかな団員だけを残して一息つく。

「ふう……。アイリスさんもあれでなかなか単純でしたね。まさかあれほど期待通りに動いてくれるとは。これで危険なことをやらなくて済みますよ」

「どういふことですか、ユリアス様？」

ユリアスのつぶやきに、近くにいた団員が驚いた顔をして聞き返

した。するとユリアスは目を細めて、いつものように薄気味悪い笑みを浮かべる。

「単純なことです。私はあの魔王とかいう男に杯の力を使わないで勝つ自信がなかった。だからアイリスさんを上手く利用して、闘神祭に私の代わり出てもらったのですよ。杯は大きな力を使って不安定で使うわけにはいきらないですし、かといって負けるわけにもいきませんからね」

「なるほど……。しかしそれならアイリス様ならなおさら勝てないのでは」

「素の状態ならば勝てないでしょうね。しかし、杯の力を使えば勝てるでしょう。そのために杯を貸し出したのですから」

「えっ……。さきほど杯は不安定で使えないと言いませんでしたか？」

団員の顔に困惑の色が浮かんだ。彼は目を白黒させてああでもない、こうでもないと考え始める。するとそんな団員の姿にユリアスはけけらとからかうように笑った。

「杯は使えないわけではありませんよ。危険性さえ考えなければ」

「ユリアス様、もしかアイリス様を捨て駒にするお積りなのですか……？」

「捨て駒とは失礼ですよ。彼女は我々の未来のための尊い犠牲となるのですから。……さて、闘神祭が楽しみですねぇ……ほほほほほ！」

ユリアスは高笑いを始めた。彼女の翡翠の瞳は狂気に燃えていておよそまともではない。さらにその全身からは真冬の冷気の固まりのようなオーラがあふれていて、とてもまともには見えなかった。彼女の近くにいた団員たちもその破滅的な気配を恐れてユリアスからわずかに距離を取る。

このようにして、魔王たちの意図しないところで事態は着々と次の戦いへと向かっていたのであった。

## 第二十八話 闘神祭へ向けて（後書き）

一応、今回までで改訂も終わり一区切りです。次回からは第二章、闘神祭編となります。

## 第二十九話 サクラのついてない朝

### 第二十九話 サクラのついてない朝

魔王たちがクランに龍討伐を報告した日から時間は流れ、いよいよ闘神祭当日の朝がやって来た。魔王たちは未だ風の冷たさの残る朝に、会場となっている闘技場へと出かける。

街はすでに、祭の前特有のそわそわとしたような熱気にあふれていた。各地から集まった商人たちが自慢の商品を広げたり、大道芸人たちが群衆を集めていたりする。道を行く人々の服装もどこか華やかで、街全体が着飾っているようだ。

「みんな盛り上がってるわね。こういう雰囲気、私は大好きよ。魔王も好き？」

「まあ嫌いではないな……」

魔王はどこか上の空であった。心ここにあらずといった面持ちで、視線もふわふわとしている。どうやら、大会を前にして考え事をしているらしい。

「別に緊張することないなんてないわよ。あんたに勝てる奴なんてまずいないから」

「うちもそう思うで。自信持ったらどうや？」

「試合に勝つ自信はある。だが、どうにも嫌な感覚を覚えてな……」

魔王はシェリカたちの励ましにも煮え切らない態度で答えた。そして、どこか空の遠くの方を見る。今日の空は快晴で透き通るようであったが、魔王は何か嫌な胸騒ぎを感じずにはいられなかった。

魔王がそうしてすっきりしない様子でいると、その後ろからシアが近づいてきた。シアは魔王の横に並ぶと、彼に何か薄い紙を見せつける。

「魔王、これを見て！」

「うぬ……。魔王も愛用していた特製ブレスレッドだ？」

シアが魔王に見せた紙には『あの魔王も愛用！ シア神官の特製開運ブレスレッド！』と書かれていた。魔王はそれを見てさすがに驚いたような顔になる。するとシアは事もなげに言った。

「このチラシに書かれているブレスレットを限定千個で販売するの。売れ行きはあなたの活躍しだいだわ、だから頑張つて。優勝することを期待してるわ！」

「そうか……。なら頑張るとしよう……」

魔王は目をお金のように輝かせるシアに、呆れたように言った。シアはそれを聞くと、ほくほく顔をしてまた後ろに下がっていく。だがその時、サクラの手がシアのチラシへと伸びた。

「こらっ、人に無断で商売を始めるんじゃない」

「あっ、それを返して！」

「ダメだ。こんなインチキ臭い商売を私は認めんぞ」

「むう……」

サクラにチラシを取り上げられたシアは膨れっ面でサクラを睨みつけた。だがサクラはそれを見ても馬耳東風、まったく気にしない。しかし、その後のシアのつぶやきにサクラの背筋が凍った。

「そう……なら良いわ、あきらめる。でも、この商売に必要なお金を手に入れるためにサクラの刀を担保にしたわ。商売できないならそれも返ってこないけど良いの？」

「えっ……あああ!!」

サクラが確認してみると、なんと新しく買ったはずの刀が元の竹光に戻っていた。しかもばれないようにするためか、鞘の中に重しの砂まで入っている。

サクラの顔がみるみるうちに赤くなっていた。瞳に怒りの炎を燃やし、頭から湯気が立ち上る。背中に炎を背負っているようにも見えるその姿は、まさに鬼のようであった。

「シィーアアッ!! 今日という今日は絶対に許さんぞオ!!」

「こっ、怖い! 助けてみんな!」

「……これはシアが悪いわね」

「すまん、うちにもフォローできへんわ」

「そつ、そんな……みんな薄情なの！」

……結局、シアは拳ほどの大きなたんこぶを二つもつくった。サクラはたんこぶを押さえて涙目になっているシアを見ると、すすきりしたのか良い笑顔になる。

そうして大騒ぎしているうちに魔王たちは闘技場に着いた。闘技場は大きな円形をしていて、その周りを大群衆が取り囲んでいる。闘技場は大きな屋敷がすっぽりと収まりそうなほどの大きさで、重厚な石で出来ていた。しかも広さだけでなく高さもあり、遠くからでも見上げるような大きさだ。

魔王は闘技場の持つ迫力にしばし感嘆した。魔界でもっとも大きな建物は魔王城だが、この闘技場ほどの大きさではない。それゆえ魔王は闘技場の圧倒的な大きさに感動したのだ。

シェリカたちはお上りさんのように関心しきりの魔王を引っ張って、大会の受付へと向かった。すると、すでに受付の周りには黒山の人だかりが出来ている。だがその全員が出場選手ではないようで、むしろその応援に来ている人の方が多いようであった。

その人ごみの中をシェリカたちはかきわけかきわけ、進んでいった。すると、周りをたくさんさんのギャラリーに囲まれた一人の選手が彼女たちの姿を目ざとく見つける。

「おや……あの娘たちなかなか……。右から八十八、九十、九十三といったところか……むむっ！ あの着物娘、百三だと！」

男の目の色が変わった。彼はキヤアキヤアと騒ぐギャラリーたちを置き去りにすると、一瞬でシェリカたちの前に姿を現す。そして

突然のことにきょとんとするサクラの方を見て、気障ったらしい口調で言った。

「ハーイお嬢さん。今日は出場しに来たのかい？ それともこの僕の応援かな？」

「なっ、なんだお前は？」

「おっと、僕としたことが名乗るのが遅れたね。僕は薔薇十字騎士団団長カルマーセ、これから闘神祭で優勝する男さ。覚えておいてくれたまえ」

「はあ……。それでそのカルマーセさんは私に何の用があるのだ？」

サクラは呆れかえった様子でカルマーセを見た。すでにサクラの隣に立っているシアなどは、カルマーセの白いえんぴ服のような服装と気障過ぎる態度に爆笑している。

だがカルマーセは神経が太いのか鈍いのか、そんなシアたちの笑いにまったく反応しなかった。そして、大袈裟で芝居がかった態度で話を続ける。

「あまりにも美しいお嬢さんがいたのでね、つい声をかけてしまったのさ。どうだい、このあとデートしないかい？」

「……無理だ」

「そっ、即答だね……。一応、理由を聞いておこうか？」

「これからこの男の応援をしなければならんからな、無理だ」

連れの男の話をすればさすがに引き下がるだろうと思ったサクラ。彼女は魔王の方に目を向けて笑いかける。だがカルマーセはそこのナンパ男とは違った。

「ほう、この男の応援を？ ふふつ、それは残念だね。なぜならこの僕が優勝するからこの男が優勝することはないのさ。……そうだね、君には試合で僕の凄さをわかってもらおう。こんな男よりも数十倍強くてかっこいいということをね！ それではさらば、僕の凄さを理解した君が僕の前にまた現れることを期待しているよ！」

カルマーセはそれだけ言い残すと、また一瞬にしてギャラリーたちのもとへと戻っていく。その場には、呆然と立ち尽くす魔王たちだけが残された。

「刀は質に入れられるし、馬鹿男には絡まれるし……。サクラ、今朝はあなた最高についてないわね……」

こうしてシェリカのどこかサクラに同情したかのようなささやきが、寂しく辺りの喧騒に消えていったのだった。

### 第三十話 闘神祭、開始！

#### 第三十話 闘神祭、開始！

群衆の熱気の渦巻く闘技場前。その人波の中で、魔王たちはしびしり呆然としていた。だがずっとそうしている訳にもいけないので、彼らは気を取り直すと受付へと向かう。

受付にはすでに列が出来ていた。いかにもといった雰囲気の様子が並んで、次々とテーブルの上の紙に記入をしている。受付待ちのシーカーたちの数はざっと二十人ぐらいはいるだろうか。

魔王はそのシーカーたちの列の最後尾に並んだ。するとシェリカたちは魔王から少し離れ、彼に向かって叫ぶ。

「良い、あんたは深層旅団の代表なんだからね！ 大丈夫だとは思うけど、頑張るのよ！」

「そうだぞ、私たちの代表なんだからね！」

「サクラの刀がかかってるんやからね！ 頑張り！」

「勝たないと私が儲からないわ。だから頑張る」

四人の声援には様々な思いが詰まっていた。それを聞き届けた魔王は四人に向かって軽く手を振ると、不適に笑う。

「もちろんだ、負ける気はない」

シェリカたちは魔王の余裕のある顔を見ると、どこか安心したような表情になった。そして、手を振りながら闘技場に向かって去っていく。魔王は彼女たちが闘技場の入口に吸い込まれたのを確認すると、改めて前を向き直した。

「次の方、ご記入をどうぞ」

そうして魔王が待っていると、順番はすぐにやって来た。彼は受付の黒服に呼ばれるとすぐに紙に必要な事項を記入していく。さらさらと流麗な筆致で、魔王は記入を完了した。

黒服は記入された用紙を確認するため自分の顔に近づけた。だが、その記入欄の名前と書かれている部分を見ると露骨に眉を歪める。

「プロイス・フリード……」

「魔王で良い。長いからな」

「そうですか。では魔王さん、あちらの選手入場口の方へお進み下さい」

黒服は受付の奥の方向を手で示した。そこには確かに選手入場口と貼紙がなされた入口がある。すでに受付を終えたらしいシーカーたちは、続々とそこから中へと入っていた。

魔王は黒服に軽く会釈すると、入口へと向かうシーカーたちの中に紛れていく。そしてゆつくりと、小さな選手入場口をくぐったのだった。

魔王が受付を終えて闘技場に入った頃、シェリカたちは観客席に

到着していた。しかし、数万単位であるはずの観客席はすでになり埋まっていて、空席はほとんど見当たらない。シェリカたちはそんな辺りを見渡して、しまったという顔をした。

「出遅れたわね。まさかこんなに早く集まってるとは」

「私は初めて来るが……。こんなに混むものなのか？」

「一年に一度の楽しみやからね。毎年超満員で立見が出るんや。……でも困ったなあ、これじゃあ魔王はんの活躍が全然見えへんで」

戦闘の行われる舞台が良く見える前方の席は、例外なく人であふれかえっていた。選手の応援にきたシーカーや一般の見物人の猛者たちが、激しく押し合って席を争っている。その戦いは時折、弾き飛ばされる人が出ているほどだ。

さすがのシェリカたちもその白熱する場所取り戦争に参戦するのはごめん被りたかった。なので彼女たちは仕方なく後方の空いている席へと移動しようとする。

だがその時、シアがとある集団を見つけた。その集団は熾烈な場所争いの中、巨大な岩のようにがっちりと席を確保して動かない。彼らは全員、十字架の描かれた長い帽子をかぶっていた。

その集団を見た時、シアは何かを閃いた。彼女は前を歩くシェリカたちを呼び止めると、そっと耳打ちする。

「みんな、今いくら持ってる？」

「えっ、急に何よ。何するつもりなの？」

「いいから、いくらあるの？」

シアは無言を言わせぬ迫力で言った。まるで目から炎が出ていそうなほどだ。その勢いに押されて、渋々シェリカたちは所持金の額をシアに告げる。

「……わかったわ、私は三万ルドよ。サクラは？」

「私は一万五千だ。エルマはいくら持っている？」

「うちは二万七千やで」

「それだけあれば十分ね。ちょっと行ってくるわ」

「あつ、ちよつとどこ行くのよ」

シアはシェリカの静止を聞かずに、さきほどの集団のもとへと駆けて行った。そして彼女は、集団の中でも一際豪華な帽子をかぶっている老人に話し掛ける。

「神官長、シアですが四つ席を譲って頂けますか？」

「かまいませんよ。ですが……」

神官長は手を差し出して、親指と人差し指で輪を作った。彼はその輪をシアに向けると、わかつているだろうとも言つような顔をする。するとシアも心得たものの、神官長の望んだ通りの答えを返した。

「一席あたり二千九百八十で」

「ダメです、三千九百八十です」

「三千三百、これでぎりぎりです」

「三千五百、これが限度ですよ」

「三千四百。これで目一杯です」

「……わかりました、お譲りしましょう」

神官長は横にいた神官たちに目配せした。四人の神官たちはすぐに立ち上がり退出していく。シアは神官長に頭を下げるとすぐにシエリカたちを呼びに行った。

「みんな、一人三千四百ルドで席を確保してきたわ。ついて来て」

「えっ、ああわかったわ」

シエリカたちは何がなんだか良くわからないままシアに続いていた。そして、神官長に怪訝な顔をしながらもお金を払って席につく。

シエリカたちの手に入れた席は最前列だった。そこからは闘技場全体が見渡せて、舞台もはっきりと見える。舞台の四角いタイルのわずかな欠け具合が確認できるほどはっきりだ。

シエリカたちは席に腰を落ち着けるとそこからの眺めに満足そうな表情をした。だがその後、彼女たちはシアを複雑な目で見る。

「良い席ねえ……。でもちよつと高かったわ」

「あれでも知り合い価格で格安なのよ。……それより見て、そろそろ開会式が始りそう」

シアは舞台に向かって走っている男を指差した。彼は黒いえんぴつ服を来ていて、シルバーの髪をオールバックにしている。さらにその額には『実況魂』と書かれた長いハチマキを絞めていた。

男は円筒形をした魔法具を手にして、舞台の上に駆け上がった。観客席がにわかに静まり、男に向かって視線が一気に注がれる。彼は大きく息を吸って、肺を膨らませると割れんばかりの声で高らかに宣言した。

「おゝまゝたゝしましたア！！　ただいまより、第二百三十回闘神祭の開会式を開始致します！！」

「うおおお！！」

闘技場が大歓声で揺れた。声はさながら津波のごとく、闘技場を飲み込んでいく。散々待たされた群衆たちは騒ぎに騒いで、闘技場の中は留めようのない興奮に覆われた。

だがこの嵐のような状況の中でも、さすがプロというべきか黒服の男は動ずることなくプログラムの進行を開始した。彼は群衆のざわめきにも負けない良く通る声を、力一杯張り上げる。

「まずはこの闘神祭の運営委員長であるシーカーランの長、マルト様より開会の言葉をいただきます！　それではマルト様、どうぞ

！」

黒服の男は後ろの貴賓席に目をやった。すると筋骨隆々とした熊のような大男が立ち上がり、舞台をゆっくりと踏み締めるように上がっていく。そして、彼が舞台の中央につくと黒服は魔法具をそつと手渡した。大男はそれをむんずと受け取り咳ばらいをすると、闘技場の岩にヒビが入りそうなほどの大声を出す。

「諸君！ 今年も闘神祭がやって来た！ 今年もハイレベルで歴史に残る闘いがここで繰り広げられるだろう！ 君たちはまばたきすることなくそれを目に焼き付けてくれ！ それでは第二百三十回、闘神祭の開催を宣言する！！」

「うわあああ！！」

闘技場が爆発した。群衆のもつエネルギーが弾けて、熱狂の嵐が吹き荒れる。見物人たちはみな顔を真っ赤にして、隣と肩を組みながら叫べるだけ叫んでいた。

こうして闘神祭は熱狂と興奮の渦巻く中で始まったのだった。

第三十話 闘神祭、開始！（後書き）

雰囲気を出そうとしたらなかなか話が進まない……（涙）

## 第三十一話 予選開始！

### 第三十一話 予選開始！

開会宣言がなされ、闘技場の熱気は最高潮に達していた。数万の群衆が沸き立ち、歓声が響き渡っている。さらに闘技場の近くから花火が打ち上げられ、いやがおうでも雰囲気は盛り上がったいった。

司会の男は宣言を終えたマルトから魔法具を受け取ると、その金網の部分を軽く叩いてみる。そうして調子がおかしくなっていないことを確認した彼は、再び声を上げた。

「続きましては大会の予定について申し上げたいと思います！ 本日は今から準備ができ次第予選を開始、予選が終わりましたらお昼休憩を挟みまして、本選の準決勝までを行わせていただきます！そして明日の朝十時より、決勝戦を開始致します！」

「うおおお！！」

「それでは予選の準備に取り掛かりますので、しばらくお待ち下さい」

司会の男は舞台から下りていった。それと入れ代わりにつなぎを着た作業員たちが現れ、てきぱきと予選の準備をしていく。実況と横に書かれたテーブルが舞台の脇に置かれ、飾りつけの花などが撤去されていった。

舞台で予選の準備が着々と進行している頃、魔王は選手控え室にいた。アーチ型を多用したホールのような広い控え室は、出番を待

つ屈強な選手たちでいっぱいだ。魔王はそのむさ苦しい選手たちに辟易したのか、部屋の端にある小さな窓の近くに寄り掛かっている。

こうして魔王が渋い表情をして窓からの風に吹かれていると、控え室のドアが開けられた。開いたドアの隙間から、さきほどの司会の男がバタバタと入ってくる。

慌ただしくやって来た男は、手に穴の開いた箱を抱えていた。彼はその箱を控え室にあったテーブルにドンと置くと、選手たちの方をざっと見渡す。

「えーと、選手の皆さん。今から予選のブロック分けを行いますのでここにあるクジを引いて下さい」

「クジ引き？ そんなもん去年はやらなかっただろ」

「今年は出場者が多いので予選の方式を変更したんです。去年までは総当たりのトーナメント方式でしたが、今年は八つのブロックに分かれてのバトルロワイヤル方式となりました」

「ほう、そりゃあいいや！ つまらねえ奴との試合をいちいちやらなくて楽だぜ！」

遅しい体つきをした一部の選手たちは豪快に笑うと、一斉に魔王の方を見た。さきほどから一人で風に吹かれているこの優男風の選手を、彼らは気に入らなかったのだ。彼らは魔王に近づくと、嫌らしい笑みを顔いっぱい浮かべる。

魔王はそんな選手たちの下品な嘲笑に、睨むことも文句を言うこともしなかった。ただ黙って、さきほどまでと同じ態度を貫くのみ

である。馬鹿は相手にしないに限るのだ。

「こいつ怖くて何も言えないのか？ ガハハ、気の弱い奴だぜ。みんな、もうこんな奴ほかっておいてさっさとクジを引こうぜ」

選手たちは魔王の態度を勝手に都合良く解釈すると、大声で笑いながら去っていった。騒がしさから解放された魔王は、若干疲れたような顔をしてクジを引きに行く。

その時、一人の選手が彼に近づいていった。長い傘を手にし、黒いサマードレスのような服を着た艶っぽい女だ。魔王はその色香の溢れるような姿に、どこか見覚えがあった。

「すまんが、どこかで会ったか？ 余ははつきりと覚えておらぬが……」

「直接話すのは初めてですわ。でも、私はいつもユリアス団長の陰にいましたから、顔自体は何回も合わせてますよ」

「ああ、ユリアスの脇にいたあの。名前はなんと言ったかな？」

「アイリスと申します。お見知りおきを」

「アイリスか。余は魔王だ。……して余に何の用だ？」

魔王は怪訝な顔をしてアイリスに尋ねた。するとアイリスは冷ややかな視線を一瞬、さきほどの選手たちに送る。そして魔王に向かって含みのある笑みを浮かべた。

「いえ、あなたがあの馬鹿たち相手に黙っていらしたから気になり

まして。あなたなら睨むだけで、黙らせるぐらいできるでしょうに」

「馬鹿は下手に構うとよりうるさく騒ぐからな。ほかっておくに限る」

「ふふ、たしかにそうですね、私も同感です。……それでは健闘を祈っておりますわ。もっとも、私が祈らなくとも大丈夫でしょうけれど」

アイリスはそういうと、甘い香りを残して歩き去っていった。魔王は彼女の後ろ姿に鋭い目を向けるが、すぐになんでもなかったような表情に戻る。そして彼も、クジを引くために司会の男のもとへと向かった。

「あなたで最後のようですね。さあ、引いちゃって下さい」

魔王が前に立つと、男は箱をズイツと押し出してきた。最後だというのに球はまだいくつか残っていたのだ。参加者がちょうど八で割り切れる数ではなかったのだろう。

魔王は球を手早く何の気なしに引いた。そうして出てきた球には一と書かれている。魔王からそれを受け取った男は、番号を確認して紙に書き留めた。そして軽く魔王に会釈して、舞台の方に向かっていく。魔王はその後を一人、ゆっくりと舞台へと移動したのだった。

長い準備時間の間に、闘技場の中はどこかおだやかな空気になっていた。待ちくたびれた観客たちの目は、おだやかな陽気に緩んでいる。特にシアなどは、船をこいでサクラに怒鳴られたりしていた

ほどだ。

そんな最中、舞台の上に司会の男が戻ってきた。さらに選手らしき姿が舞台の周りに現れる。闘技場の空気がにわかに慌ただしくなつて、観客席の空気も一変した。

「お待たせしました！ 準備の方が完了したのでただいまより予選を開始したいと思います。ではまずルールの説明から。今回のこの予選は本選に出場する八つの選手枠を賭けて争われます。出場した八十三人の選手たちはそれぞれ、第一から第八まで八つのブロックにすでに分かれて頂きました。そのブロックから各一名、合計八名の代表者をバトルロワイヤル形式にて決定するのです！」

男の告げた方式は、これまでの闘神祭の予選とは違っていた。観客たちはにわかに色めき立って様々な話を始める。どうして方式が変わったのか、自分の最期の選手に影響はないかなど、その話の内容は実に多様であつた。

だが、そんな観客席の動揺はすぐに収まった。方式が変わった影響などやって見ればすぐにわかるし、何よりみんな早く戦いが見たかったのだ。観客席のざわめきは急速に消えていき、変わりに待ちわびるような視線が舞台の上に注がれる。

その観客たちの意を汲んだのか、司会の男はすぐに実況と掲げられた席についた。さらに隣の解説席に、どこからスーツで決めた胡散臭い雰囲気のある老人を呼び寄せる。そして彼は、さっそく予選開始に向けたアナウンスを始めた。

「それでは予選第一ブロックの試合を始めたいと思います。この試合に参加する選手は、バルム、メイスト、ケインズ、スルベム、オ

ービス、コール、マイラ、ゴルドン、タリム、キャロル……えっ……  
…プロイス・フリ」

「魔王で良い」

「あつ、そうですか。では魔王選手の以上、十一名です。ではさっそく選手入場！」

名前を呼ばれた選手たちは、次々と舞台上上がっていった。観客席から熱い声援が出場選手たちに飛ぶ。その中には当然、シェリカたちのものもあった。

「魔王、頑張つて！」

「絶対勝つんやで〜！」

「お前が負けるなどありえんだろうが……頑張るのだぞ！」

「……予選はかませ犬ばかりだから応援するのもやる気が入らないわ……。でも一応頑張つて」

一人やる気がないようだったが、おおむね気合いの入った応援を送ったシェリカたち。魔王はそれに手を軽く振って応えた。だが、そんな魔王に一人の選手が忌ま忌ましい目进行ける。その男はさきほど魔王を笑っていた一人だった。

「女とつるんで……これだから優男はダメなんだ。この試合で俺がお前に、ほんとの強さってやつを教えてやろう」

男は腰に手を当てて、魔王の額をビシッと指差した。魔王はそんなわかってない男に疲れたような顔をする。その魔王の態度に男は沸騰したように赤くなり、今にも魔王に殴りかかりそうになった。その時……

「皆さん、準備は良いようですね。試合開始です!!」

実況の男の渾身の叫びとともに、戦いを告げる鐘が鳴り響いたのであった……。

## 第三十二話 圧倒

### 第三十二話 圧倒

陽光を反射して白く輝く舞台。滑らかな石が硬く光っている。その上は今、選手たちの熱気で屋気楼のごとく揺れていた。殺気や覇気が渦巻いて、鮮やかな火花が飛び散っている。

魔王はその緊迫の中で、一人の選手に睨まれていた。選手の男は魔王より頭一つ大きく、使い古された革の鎧を着た体はどっしりと岩のよう。目つきは肉食獣のようでいかにも鋭い。

「うらああ！」

男は巨大な剣を振り上げた。次の瞬間、男の身体がぶれる。男の足元の石が軋み、舞い上がった砂塵とともに巨大な身体が風をきる。質量を忘れたかのような速度と軌道を見せる大剣は、たちまちのうちに魔王に迫った。

「速いが真つすぐ過ぎる」

「なに！」

男が剣を振り落とした時、魔王の姿はそこにはなかった。大剣はむなしく石を砕いて舞台に減り込む。男が青い顔をして魔王の姿を探した時、魔王の足が横から彼の身体に炸裂した。

「ぐはああ！！！」

男の口から血が飛び散った。筋肉の塊とでもいうべきその身体は有り得ない方向に曲がり、空中を滑り始める。彼は直線上にいた二人の選手を吹き飛ばしながら、観客席の壁に叩きつけられた。石でできた壁にヒビが入って、男の身体はその間隙に潜り込む。地震のような轟音が闘技場の空気を激しく揺さぶった。

にわかに闘技場に沈黙が訪れた。選手や観客たちはみな息を呑み、魔王に視線を向ける。彼らの表情には驚愕と衝撃が入り混じっていて、開いた口がふさがらないようだった。

「……こ、これは凄い！ 予選開始からわずか十秒足らずで、三人の選手が舞台から弾き出されてしまいましたア！！ しかも一人の無名選手の手によってです！ こんなことを誰が想定したのでしょうか！！ ……今の流れをどう思いますか、解説のマスター……ごほん！ ではなくミスターXさん！」

司会の男は慌てた様子で叫ぶと、隣の解説席に魔法マイクを移動させた。すると解説の老人は、もったぶるように掛けていたサングラスの位置を直す。そして彼は、落ち着いた重々しい口調で解説を始めた。

「うむ、今のは気を瞬間的に使ったのじゃろうな。おそらくマントを着た男は大男の攻撃をすれすれでかわし、入れ違いざまに気で強化した足で蹴ったのだ。これだけ言う这么简单に聞こえるが、あの大男の攻撃をかわすだけでも達人級の技量が必要じゃぞ」

「なるほど！ 解説ありがとうございました！」

司会の男はミスターXからマイクを受け取ると、再び舞台の上に視線を注ぎ始めた。その額からは汗が滴り落ちて、頬は興奮してい

るのか紅い。

一方、そんな騒然としている闘技場の中でシェリカたちは落ち着いていた。魔王のレベルを知っている以上、これくらいは有り得ると思っていたのだ。そのため周りの観客たちが言葉を失っている中、四人はさきほどの魔王の戦いについて比較的冷静に話をしている。

「サクラ、あなたは魔王の動きが見えた？」

「かろうじてといったところだな……。シェリカの方は？」

「私はダメね。ほとんど見えなかったわ……」

シェリカは手を上げて、文字通りお手上げといったポーズをした。サクラはそれを見ると深刻そうな顔をして頷く。

「姿が消えたようにみえる速さだったからな、無理もない。だがあの攻撃の本質は速さではなく力だろう。一瞬で気を練り上げた蹴りを入れるなど、並大抵ではない……」

「そうね。ほんっと魔王って一体何者なのかしら……」

それきりシェリカとサクラは黙り込んでしまった。俯いた二人は、再び鋭い目を舞台に向ける。するとちょうどその時、舞台の上の選手たちに動きがあった。

「……みんな、こいつを先に片付けるぜ！」

「よしっ！ その作戦のつた！」

「俺も参加させてもらうぜ！」

舞台に残っていた魔王以外の七人の選手たち。彼らの心がわか  
に一つになった。彼らは魔王の周りを取り囲み、武器を構える。そ  
の表情はいずれも強張っていて、魔王に対する明確な恐怖が見てと  
れた。

選手たちによって強固に包囲された魔王であったが、彼の表情に  
は余裕があった。にやりと口を歪ませて微笑むその様子は、かかっ  
てこいと言わんばかりだ。その余裕を選手たちは恐れ、彼らの恐慌  
状態が深まっていく。

そうして舞台の上の緊迫が頂点を極めた時であった。

「行くぞオ！」

不意に一人の選手が雄叫びを上げ、魔王に突撃した。その後を他  
の選手たちも次々と続いていき、魔王に向かって数々の攻撃が繰り  
出される。

まずはじめに魔王に襲い掛かったのは、巨大な斧であった。鍛  
え上げられた丸太のごとき腕により繰り出されるそれは、恐るべき  
速度をもって魔王を引き裂かんと空を切る。

魔王は重心をずらし、それをなんなくかわした。攻撃をかわされ  
た男は前にのめり、バランスを崩す。魔王はその無防備となった背  
中に強烈な手刀を振り下ろした。みしりと嫌な音がして、男の身体  
は舞台の石に崩れ落ちる。

続いてその魔王の背中を目がけて、二人の男が突っ込んだ。男た

ちはそれぞれメリケンサックとナイフを手にして、瞬速で魔王に接近する。魔王といえど後ろに目はなく、背中には隙がある……はずだった。

「あばあ……！」

「ぶぐはああ！」

男たちの腹に、魔王の裏拳がめり込んだ。彼らは腹を押さえながら白目を向き、意味不明な叫びとともに倒れる。その身体は倒れた後もしばらく痙攣していた。

「ちっ、接近戦は無理だ！ 遠距離で行くぞ！」

残った四人は魔王からすぐに離れていった。彼らはある程度魔王から距離をとると、あらためて武器を構えて魔王を包囲する。

魔王と選手たちの睨み合いはしばらく続くと誰もが思った。だがその包囲網は、大方の予想に反してあっけなく崩れさった。

「……やつ、やっぱり無理だ！ こんな奴を倒せるわけねえ！ 俺は棄権する！」

「おっ、おい！」

一人の選手が、武器を捨てて自分から舞台の外に逃亡していった。恐怖が男を支えていたプライドを超えてしまったのだ。さらにその後を、二人の男が恥も外聞もかなくなり捨てるかのように追いかけていく。舞台の上には少し呆れたような魔王と、呆然として固まる一人の男だけが残された。

「お前は逃げなくても良いのか？」

「くそつたれエエエ！！」

最後の男はもはや武器すら持たずに全身全霊、身体の全ての力を拳に込めた。拳は残像を残し、雷を追い越すような一撃となる。ひとたび地面に炸裂すれば、地が裂けるのが容易に想像できるほどだった。

魔王はその拳を避けなかった。かわりに手を出してそれで拳を受け止める。拳が魔王の手にぶつかった瞬間、大砲が撃たれたような轟音と衝撃が闘技場に轟いた。

「なっ……」

魔王の身体は揺れもしなかった。さきほど一寸足りとも変わらぬ位置に、彼は立っている。ほんのわずからぶれも、その時の魔王には存在はしなかった。

男の顔は蒼白となった。そして目もすぐに白目のみとなる。魔王の攻撃により、悲鳴を上げることなく彼は気絶したのだ。

男の身体はゆっくりと地面に倒れていった。魔王はそれをつまらなさそうに見送る。そして試合の終わった魔王がどこか物足りらないような顔をして舞台から立ち去ろうとした時、観客席から割れんばかりの拍手が巻き起こった。

「……凄い……。圧倒的だアア！ 強い、強いぞ魔王！ これほどの試合を私たちは見たことがあったでしょうか！！ どうか皆さま、

彼に盛大な拍手を！！」

司会の男が叫ぶともはや観客席は総立ちであった。観客たちは全員歓喜したように沸き立っていて、その顔は明るい。

こうして魔王の予選は彼の圧勝によって拍手とともに終わったのであった。

### 第三十三話 怪しい選手たち

#### 第三十三話 怪しい選手たち

魔王は闘技場を揺さぶるような大歓声と拍手の中、悠々と舞台から降りていった。彼はそのまま解説席の方に移動すると、未だに興奮した様子の司会の男にそつとささやく。

「本選が始まるのはいつ頃になる？」

「ええっと、一時半頃を予定しておりますが」

男は少しばかり面喰らったような顔をして魔王に答えた。すると魔王は、空を見上げて太陽の位置を確認する。太陽はまだ中天に差し掛かるわずかばかり前であった。

「ならば一時頃までに戻ってくれば出かけても問題ないか？」

「ええ、構いませんよ。ですが時間までには戻ってきて下さいね」

「もちろんだ」

魔王は怪しげに笑うと、闘技場の壁に円く空いている通路に向かって歩き去って行った。司会の男はその背中をどこかぼんやりと見送る。だが一方で、魔王の背中に鋭い眼差しを送っている者たちもいた。

「思わぬつわものがいたぜ……！ はははっ、ユリアスが出なくて  
がっかりしてたがこれは面白いかなあ！」

闇色のロングコートで身を包んだ男が、狂気を孕んだ笑いを上げた。その顔は蒼白で紫がかっており、瞳は血走ったような紅である。だがその紅い瞳には力がなく、人工的な冷たさにあふれている。

さらにこの男のシルエットには違和感があった。コートの右腕に当たる部分が異様に膨らんでいるのだ。しかもコートが風で揺れるたびに、膨らんでいるあたりから鈍い鉛色の光が現れる。実を言うところの男の目は義眼で、右腕も鋼でできた義手であった。

この修羅のような男は、地獄からの叫びのような悍ましい笑いを続けていた。すると、近くにいた少女がうんざりとしたようにゆっくりと男に振り返る。膝までかかる深緑のローブとフードで身体をすっぽりと隠した少女は、不気味な仮面を被っていた。白くのつぺりとした、笑いの表情の仮面である。

「少しうるさいのです。黙れです」

「こりゃあ、ずいぶんと可愛い声のお嬢ちゃんがこんなとこにいたもんだ。……だが俺にはわかるぜ、お嬢ちゃんの強い魔力がよ。おめえ、どこぞの有名な魔法使いだな？」

「戦士で盲目なのによく当てたですよ。そうです、私はギルド紅杖魔法団の団長ルーミスです」

ルーミスは誇らしげに胸を張った。仮面に陽光が当たって、複雑な陰影が生まれる。それはちょうど、仮面の笑いの表情を強調しているようだった。男はその自信に溢れたルーミスの様子を知ってか知らずか得心したように頷いた。

「やっぱりな、あの魔法使い系では最強のギルド紅杖の団長か。道理で馬鹿みたいな魔力のわけだ」

「ええ、それに私の魔力は紅杖でも歴代最強なのです。ですから優勝間違いなしなのです！」

「はははっ、大した自信だなあ！　だがそう簡単にはいかないだろうぜ」

男はずいつと顔を回した。紅いガラスの瞳が、周囲を威圧するようである。その時、男の口もととは歪んでいて微かな笑みを湛えていた。だがそんな男の態度に、ルーミスは不服そうな声を出した。

「どうしてなのです？　ユリアスさんは出場しませんし、いつも準優勝しているあなたは去年の決勝で眼と右腕を失ってるのですよ。さきほどの男は強そうですが、私の優勝は間違いないのです」

「甘い、甘いなあ……。俺の見立てではお嬢ちゃんぐらいの強さの奴は、俺たちとさっきの男の他に四人はいるぜ」

「そんな訳……ない！」

ルーミスはそう吐き捨てるように言うと、ドタドタと足を踏み鳴らし歩き去っていった。それを見た男はますます顔を歪め、壊れたような醜悪極まる笑い声を響かせる。

「はははっ！　子供だなあ！　だが予選が終わったら分かるだろうぜ……ふははあ！」

男が狂ったように笑っている頃、魔王は観客席にやってきていた。そして、数万もの観客の中からシェリカたちの姿を探している。どこもかしこも似たような服装で埋め尽くされた観客席の中を、彼は舞台の上から見ただいたいの位置だけでシェリカたちを探していた。

しかし、彼は意外なほど早くシェリカたちらしき姿を見つけた。大群集の中でもひととき目立つ神官服の一団。その真ん中に挟まるようにして彼女たちがいたからだ。

「おい」

「あつ、魔王！ 戻ってきたのね」

「みなで昼食を取ろうと思ってな」

「そうね、早く出かけないと今日は混むからね。じゃあみんな行きましょうか」

シェリカたちは出かける準備を始めた。彼女たちは席を立てて荷物をまとめ始める。だがその時、シェリカたちの近くに座っていた神官長が慌ただしい彼女たちに声をかけた。

「どこかに出かけられるのかな？」

「あつ、はい」

「そうか、いや実は我々もそろそろ出かけなければならなくてね。席から離れるのであれば、誰か一人を場所取りに残しておくといいだろう」

神官長はそう言い残すと、神官たちを引き連れて去っていった。すると空いた席にすぐに人がなだれ込む。またたく間に人で埋まった空席に、シェリカたちは顔を青くした。

「これは絶対に場所取りがいるわね……。誰か一人が残らないと」

シェリカは目を細くして、隣の三人に目をやった。すると彼女たちは困惑したように互いに顔を見合わせる。

「うっ、うちは困るで！ 対人戦闘力なんてあれへんから」

「私もよ。この群集を追い返す自信はないわ」

二人は揃ってサクラを見た。そして、じっと見つめるような熱い眼差しを彼女に送る。サクラはそれに戸惑ったような顔をしたが、二対一では彼女に勝ち目がなかった。そうして彼女は悔しそうに顔を歪めると、開き直ったように言った。

「……………くっ、仕方ない……。私が留守番をしよう。その代わり、何か食べ物を買ってきてくれ」

「わかった。買ってくるからよろしく」

「ああ、任せておいてくれ」

サクラは大きな胸をどんと叩いた。豊かな膨らみが誇らしげに波打ち、たぶたと音でも立てそうなくらいだった。シェリカと魔王たちはそんなサクラの様子を確認すると、早速昼食を食べに出かけたのであった。



## 第三十四話 シアの食事法

### 第三十四話 シアの食事法

魔王とシェリカたちは闘技場から出て、街へと繰り出した。すでに日は中天へと差し掛かりつつあり、街は人であふれている。あちこちに出た屋台から美味そうな匂いがながれてきては、四人の鼻を刺激した。

「早く何かを食べないと。お腹が空いてたまらないわ」

「そうねえ、どこが良いかしら」

腹をさすりながら不満を言ったシアに、シェリカは少し困ったように言った。だが、すぐに良い店を思い出した彼女は曇らせた顔をまた明るくする。

「ヒヨドリ亭に行きましょう。あそこなら昼からやってるし、なにやり空いてるわ」

「ちょっと待て、マスターがいないのに営業してるわけなからう」

「えっ、どうして魔王がそんなことを知ってるのよ」

シェリカはぽかんとした顔をして魔王を見た。すると魔王は彼にしては珍しく呆れたような顔をする。またそれに加えて、シアたちも冷やかな視線をシェリカに送った。

シェリカは三人の態度に戸惑った。彼女はあたふたと顔を右に左

にと移動させる。そうしていると、エルマが訳知り顔でシェリカに説明を始めた。

「あのなシェリカ、闘神祭で解説してたミスターXとかいうじいさん。あれ間違いなくヒヨドリ亭のマスターやる。うちはマスターにあんまり会ったことないけど、見てすぐ分かったで」

「あれ……そう言われて見れば似てたような……」

シェリカはミスターXと名乗った胡散臭い老人の姿を思い出した。確かにサングラスを外せば、マスターに良く似ていなくもない。そう思ったシェリカの顔はたちまち曇っていった。

「……困ったわね。そうなるとどこもいっぱいよ」

あたりの店はどこもかしこも行列ができていた。しかも行列は時間が経つに連れて短くなるどころかどんどん伸びている。どの店に入ったとしても、ざっと一時間以上は待たねばならなさそうであった。

別に時間があるのならば待てば良いのだろう。だが魔王は本選に出場しなければならぬし、シェリカたちもその応援をしなければならぬ。困ったことに使える時間は限られていた。しかしそんな時、思いもよらぬ人物が四人の前に救世主として現れたのだった。

「やあ君たち、また会ったね！」

四人の前に現れた人物はなんと、カルマーセであった。彼は朝とは違うがやたら光る白銀の鎧に身を包み、長い金髪を盛んに撫でている。しかしその二枚目半程度には整っていた顔はすっかり赤く腫

れて、前歯が一本抜けていた。彼の今の顔を端的に総評すると、かなりの間抜けだ。

「ナンパ男！」

「おバカがうつるわ……近づかないで」

「そんなボコボコの顔で格好つけてもなあ……格好悪いで。というか試合はどうしたん？」

「そこにいる男も強いようだけど、僕はそれ以上に強いからね。あつという間に勝負がついたのさ。……ところで君たち、何か困ったような顔をしてたようだけどどうかしたのかい？」

カルマーセは気障ったらしくシエリカたちに尋ねた。シエリカたちは一瞬、眉をひそめるものの隠すほどのことでもない。すぐに元の顔に戻ってカルマーセに困っていた理由を説明した。

「ご飯を食べようと思って出てきたんだけどどこも混んでてね。それで困ってたのよ」

「ハハン、そういうことかい。それなら僕は良い店を知っているよ」

「えっ、本当？」

「ああもちろんさ。稲穂亭というレストランなんだけど、味も雰囲気も最高でこういう時でもごみごみとしないよ。どうだい、これから四人でランチでも？　もちろん僕の奢りさ」

カルマーセは自信たっぷりに言った。さらに胸元からさりげなく

薔薇を取り出して、シェリカの手に握らせる。その顔は緩み切っていてだらしかなかった。

シェリカたちはカルマーセの態度に引いてしまった。しかしここでシアが二人の前に出て行く。そしてにたにたとしているカルマーセと話を始めた。

「良いわ。ただ四人じゃなくて五人になるけど良い？」

「五人だつて？」

「私たちにもう一人仲間がいたのは覚えてるはず」

「もちろん覚えてるさ。あれだけの巨……失礼、美人だっただか  
らね。あつ、なるほど。彼女も来るから五人なのか」

「ふふふ……」

シアはただ怪しく笑っただけだった。決してそうであるとかは言っていない。しかしカルマーセはその笑いを肯定の意味だと捉らえて、話をどんどん進めていった。

「そうかい、彼女も来るのか。ならば早く行って待っていた方が良いね。ほらっ、こっちだよ」

カルマーセは通りを東に抜けて、稲穂のマークを掲げたレストランの前に移動した。その店はいかにもといった立派な店構えで、大理石をふんだんに使っている。さらにその店先のカウンターには、えんぴ服を着た執事のような男が立っていた。

「さあ、ここだよ。入りたまえ」

カルマーセは店の重いガラスの扉を開けると、中から手招きした。四人はカルマーセに促されるまま店の中に入っていく。そして数十分後……。

「着物の娘は来ないし、野郎はついてくるし……どうなってるんだ……」

「私はただ五人になるってことと、仲間が他にいると言っただけ。サクラが来ると勝手に勘違いしたのはあなた」

店の勘定を終えて青い顔をしているカルマーセに、シアはどこまでも冷たく告げた。カルマーセはその言葉に目を細めるものの、文句は言わない。彼は筋金入りのフェミニストだったのである。

だが彼はここで、自分にとってストレスを発散するのに都合よい相手を見つけた。この集団の中で彼以外には唯一の男である魔王だ。

「くっ……こうなったのは君のせいだ！　きっと本選でメツタメタのギッタギタにするから覚悟していたまえ！」

カルマーセは魔王をバシッと指差して、響くような大声で宣言した。そしてそのまま何故か闘技場とは逆方向に走っていく。しかしその時の魔王は腹が膨れて眠くなっていたので、カルマーセの宣言をほとんど聞いてはいなかった。

こうしてカルマーセに食事を奢らせたシアやシェリカは、ご機嫌で闘技場に戻っていきこうとした。だがその時、体を揺らすかのような爆音が空に轟いた。シェリカたちは身を固めて立ち止まり、辺り

を見回す。

道行く人々もそのほとんどが足を止めていた。時が止まったかのように人々は固まり、闘技場の方向に視線を向けている。さきほどの爆音は闘技場の方から響いてきたようであった。

「予選で何かあったのだな。急ぐぞ」

すっかり眠気の取れた魔王。彼は呆然とした顔のシェリカとシアの手を掴むと、闘技場に向かって走り出した。その後をエルマも急いで追いかけてゆく。闘技場からは煙が上がっていて、何か良からぬ事が起きたようだった……。

### 第三十五話 危険な傘使い（前書き）

今回は少し短めです。

## 第三十五話 危険な傘使い

### 第三十五話 危険な傘使い

魔王たちが闘技場についた時、彼らの目に大変な惨状が映った。白かった舞台の上が黒く煤けて、石があちこちで剥がれている。それらは熱で溶けたのか、ガラスのようになっていた。光をテラテラと反射する黒いそれらは異様な迫力をもって魔王たちの感覚に訴える。

その舞台の惨状の上に、人の残骸のようなものが横たわっていた。彼らは完全に焼け焦げて、もはや形以外には人であったことを感じさせない。その脇に残された鋼の鈍い輝きだけが、彼らが選手であったことを物語っていた。

この世界に地獄があるならば、その見本とも言うべき光景。その惨劇の中心に、一人の女が立っていた。黒いサマードレスを着た彼女は傘を手にしていて、その姿は晩餐会の帰りのようだった。その顔に浮かべられた微笑みは美しく、上品にして優雅。貴婦人と称するのがふさわしいものだ。

しかしその足元には地獄が広がっている。その対比が、彼女の笑みを悍ましく危険なものへと変えていた。観客たちは微笑みの裏に凄惨なものを感じて、背筋を完全に凍てつかせている。

「これは……なんてことよ」

「あつ、あの女一体なんなんや……」

シェリカたちはたちまち表情を固めた。目は裂けそうなほど開かれ、口には手が当てられる。色を失った彼女たちは、慌てて観客席の通路の階段を駆け降りていった。そして見慣れた着物姿の女を見つけると、すぐに走り寄っていく。着物姿の女、サクラの方もシェリカたちに気がついたようでこちらに振り向いた。

「何があつたのよサクラ！」

「ああつ、シェリカか。今、最後の予選が終わったところなのだが……。見ての通りだ、あのアイリスとか言う女が魔法で他の選手をすべて吹き飛ばしたんだ！」

「魔法で？　どんな魔法よ」

「手に持っている黒い傘があるだろう？　あれから光線が出たんだ！」

サクラはアイリスの方向を指差した。シェリカたちも目を細めて、傘に注目する。潇洒で華奢な傘は細い一本の黒木のようにであった。柄は艶のある黒檀のような木で、布地の部分はビロードのよう。布地に何か複雑な紋章のような意匠がどこされてはいたが、なんと言うことのない普通の傘だ。

シェリカたちにはとてもそれが光線の出るようなものには見えなかった。しかし魔王だけはふうむと息をつき、納得したような顔をした。

「ほう、なるほど」

「何かわかつたの？」

「ああ。あの傘は布地の部分に魔法陣が印されているのだ。だから開けば魔法陣が展開されて魔法が発動する。傘から光線が出せたのはそういうことであろう」

「うまく考えたものね。それなら複雑な魔法陣が必要な大魔法も、魔力さえあればすぐに使えるわ」

普通、大規模な魔法を使用する際には魔法陣をその場で描くか、あらかじめ魔法陣の描かれた布を用意しておくものである。この時描く場合はむろん、布を用意する場合でもしわ一つなく広げなくてはならないためなかなか面倒である。しかも一部の攻撃魔法は魔法陣に対して垂直に放たれるため、布を貼る板を用意したりせねばならずいちいち大変だ。

しかし、傘の布地に魔法陣を描けばすべて解決できる。一瞬で布をピンと張れる上に、魔法陣の角度も調整可能。しかも板とは違って畳んでおけば邪魔にならない上に、近接武器の代わりにもなる。

一見奇抜だが、恐ろしいほどに実用的。シェリカたち、特に魔法を多用するシアやシェリカはその事実にあきつくと恐怖を感じた。彼女たちの背筋をにわかに冷たいものがたどり、心が凍る。得体の知れないものへの恐怖がそこにはあった。

「魔王、私の刀のことは考えなくても良いぞ。むろん魔王が勝てると思うならば戦うことを止めはしないが……。」

サクラは懇願するような顔で魔王を見上げた。その目には行かないで欲しいという思いがはつきりと見て取れる。

「無理はしなくても良いのよ……」

「魔王はんのことをなんだかんだ言ってもうちらは心配なんやで……」

シエリカたちもサクラに続いて魔王を見た。不安や心配が彼女たちの心を埋めているようで、その目は潤んでいる。しかし魔王はそんな心配症な彼女たちに、小さくも力強くささやきかけた。

「大丈夫だ、心配ない。必ず勝って戻ってこよう」

魔王は真つすぐな目をしてそう告げると、観客席の階段を降りていった。その顔には微かな笑いが浮かべられていて、戦いを楽しみにしているようである。魔王とはやはり、戦いが好きな種族なのであった。

魔王はしっかりと、それでいて軽い足取りで観客席から消えていった。シエリカたちはその大きな背中を熱い眼差しで見送る。

「魔王……。必ず戻ってきてよ……」

シエリカは微かに口を開けて弱々しくつぶやいた。それはすぐに柔らかな陽射しの中に溶けていく。それはちょうど、冷たい冬の氷が春の陽光に溶けていくようであった。

麗らかに広がる水晶の空のもと、いよいよ波乱の本選が幕を開けようとしていた……。

## 第三十六話 揃った選手と第一試合

### 第三十六話 揃った選手と第一試合

晴れ渡った青いスレートの下、闘技場では昼休憩が終わりいよいよ闘神祭の本選が始まるうとしていた。観客たちはすでにさきほどの衝撃からは立ち直り、落ち着かない様子で司会の男や選手たちが現れるのを待っている。あちらこちらで選手を応援する旗や横断幕が今か今かと出番を待っていた。

観客たちの中には賭け事をしている者もいるようで、時折どの選手が勝つだの負けるだのといった声が風に流れてくる。まわりの観客たちはそれに顔を歪めながらも、内心ではその予想に聞き耳を立てていたりした。

こうして観客たちがそわそわと落ち着かない雰囲気していると、ついに司会の男と選手たちが控え室から姿を現した。彼らは舞台に次々と登っていき、続いて司会の男が闘技場全体に届く声で叫ぶ。

「お待ちせしましたア！　ただいまより闘神祭本選を開始いたします！」

「わあああ！！」

「それではまず、ここまで勝ち残った八人の選手の紹介をさせていただきます！　皆さまから見て一番左がカルマーセ選手！」

司会は彼の右手に居並ぶ選手たちのうち、一番右側にいたカルマーセを示した。彼は回復魔法でもかけてもらったのかすっかり元の

二枚目半な顔に戻っている。司会の手が向けられると、彼は白い歯を光らせて気障ったらしく笑った。その微妙なかつこいと言えなくはない笑顔に司会は苦笑する。そして次の選手の紹介をするべく彼は正面に向き直った。

「続きましては魔王選手！」

司会の男に呼ばれると、魔王は口を歪めて不敵に笑った。いかにも魔王らしい、底の見えない笑いである。シェリカたちはその笑みに応じるかのように声を張り上げた。顔を紅くしながら、手を口に当てて叫ぶ。広い闘技場にも若い女性特有の高い澄んだ声は良く通った。

シェリカたちがそうして必死に応援しているうちに、司会は次の選手の紹介に移った。さきほどルーミスと話していた黒いロングコート  
の男だ。

「三人目はクレイル選手！」

「ハッハッハア！」

クレイルは呼ばれると同時に血も凍るような高笑いを上げた。彼は身体を大きく揺すり、壊れたかのように笑う。その恐ろしいまでの異様な迫力に、司会の男は冷や汗を流して歯をカタカタと鳴らした。だがここで選手の紹介を中断するわけにはいかない。なので司会は震えながらも次の選手の紹介にうつる。

「よっ、四人目はフウタロウ選手です！……おや？」

司会が示した先には誰もいなかった。司会はさきほどまではいた

はずだと首を捻る。彼は消えたフウタロウを探して彼が立っていたはずの場所まで移動した。すると……。

「あつ、あれ？ どこから現れました？」

そこには黒装束の痩せぎすな男が何事もなかったように立っていた。彼は紛れもなくいなくなっていたはずのフウタロウである。司会の男は思わず目を疑って、何度もまぶたを擦った。それを見たフウタロウは消えるような渋い声で司会の男に言う。

「……気配を消しておった。それゆえ汝には我を感知できなかったのだ……」

「はぁ……。今度からは消さないで下さいよ。心臓に悪いですから」

「……善処する」

フウタロウはそう小声でつぶやくと、細い目を閉じてしまった。そのまま腕を組んだ彼は何事かをぶつぶつとつぶやき始める。そのある種の怪しげな雰囲気司会の男はあえずさり、またもといった舞台の中央へと戻っていった。

「……ふう、やれやれ。えゝ続きましては五人目、コウラン選手です！」

中央に戻った司会は一息つくと、五人目の選手を紹介した。その伸ばされた手の先には紅い東方風のドレスを着た女が立っている。大胆に豊満な胸元を露出したその女は、紅い口紅を初めとするきつめの化粧をしていた。さらにその手には大きな扇が握られている。

そんな一見しただけでは踊り子のようにしか見えない女、コウランは司会に呼ばれるとなんと観客席に向かって投げキッスをした。そのなんともなまめかしい行動に観客席の男がどよめく。あるものは興奮に満ちた視線を送り、あるものは鼻の下を伸ばし。甘い空気が闘技場にあふれた。

しかしそんな雰囲気の中でも、カルマーセ以外の男性選手はコウランに警戒しているかのような鋭い目を向けていた。踊り子のような格好をしていても彼女は警戒するに値する達人なのだ。

「ふにゃふにゃ……はっ！ つつ、次は六人目ルーミス選手です！」

一瞬だが色気ではけた司会は不意に我を取り戻すと、慌ててルーミスを紹介した。するとルーミスは白い仮面に覆われた顔をくいつと司会に向ける。表情こそわからないが、どうやら彼女は自分の紹介がおざなりになったことを怒っているようだった。

司会は陽光に笑う不気味な仮面にまたもや冷や汗をかいた。生温い汗が背中を伝ってぽたりと滴り落ちる。だがすでに彼の精神は鍛えられたのであろう。冷や汗はすぐに収まって彼はまた選手紹介へと戻った。

「続きまして七人目はバリウル選手です！」

バリウルと呼ばれた男はいかにもひ弱な文系青年といった男だった。学者が好むようなマントと丸い眼鏡を着用していることがそのような印象を与えるのだ。しかも彼は手に百科辞典のような分厚い本を抱えていた。

明らかに戦闘には向いてなさそうな人種ではあるが、彼は確かに

本線出場選手だ。故に観客たちは何かあるのだろうと期待と不安の混じった目を彼に向ける。しかし彼はそれにたいしてただ柔らかく微笑むだけだった。

司会の男は闘技場に残された雰囲気が落ち着くのを確認すると、最後の選手の紹介をした。もちろん黒いサマードレスを着た女、アイリスである。

「いよいよ最後となりました。八人目はアイリス選手！」

彼女に紹介の手が向けられると、観客席は水を打ったように静まり返った。さきほどの衝撃が抜け切っていないのか、観客たちはアイリスを見つめて戦慄に顔を凍らせる。闘技場は冬の凍てつく朝のような静けさに包まれた。さきほどまでの騒々しさは毛布にでも包まれたようになりをひそめている。

司会の男は深刻な顔をしている観客たちを一瞥すると、大きく息を吸い込んだ。そして十分に肺を膨らませたら、その貯まった空気を一気に叫びに変える。観客席の重苦しい空気を一変させるような声が、舞台から放たれた。

「それではいよいよ闘神祭本選、第一試合を初めます！ 第一試合はカルマーセ選手対魔王選手です！」

司会は拳を振り上げて思い切り叫ぶと、舞台から降りて行った。それに魔王たち以外の六人の選手も続く。舞台にはカルマーセと魔王だけが残され、緊張が張り詰めた。見えない殺気がぶつかり合って緊張の糸が互いに絡まり合うようだ。

その緊張にあふれる舞台を風が吹き抜けた。涼やかな風は男にし

ては長めのカルマーセの金髪を吹き上げる。髪を風になびかせたカルマーセは口をわずかに歪めたあとでゆっくりと開いた。

「僕は疾風とも呼ばれる騎士さ。仲間うちではこの迷宮都市最速なんて言われたりもする。今からそのスピード、とくと楽しませて上げるよ！」

こうしてついに、カルマーセと魔王の直接対決の火蓋が切って落とされたのだった。

## 第三十七話 必殺！ 残影剣

第三十七話 必殺！ 残影剣

「ふふっ……。行くよ！」

カルマーセが齒を光らせて笑うと、その姿が霞んだ。まるで砂漠に揺れる蜃気楼のようにカルマーセの姿が消えうせる。それとほぼ同時に魔王は神業的な速さで杖を振り上げた。

鋼をぶつけたような荒々しく激しい音が闘技場に響いた。魔王の杖から紅い火花が散り、白銀の刃とカルマーセの姿がわずかに霞む。だがそれも一瞬、彼の姿はすぐにまた虚空に溶けた。

そこから人間の感覚を超えた戦いが続いた。常人の目には影しか見えないほどの速さで動くカルマーセと、それを杖一本で捌く魔王。その戦いは観客を初めとする周りの目には、まるで魔王が杖で空を激しく叩いているようにも見えた。カルマーセはほとんど彼らの目には見えない領域で魔王に攻撃しているのだ。

「カルマーセ選手、信じられないほどのスピードです！ これは魔王選手、スピードに手も足も出ないといった状況でしょうか。ミスターXさん、どう思われますか！」

司会は椅子から立ち上がって叫ぶと、となりのミスターXに勢い良くマイクを差し出した。それをまたミスターXは引ったくるようにして自らの口に寄せる。そしてもつともらしく咳ばらいをしてから話をした。

「いや、押されてるのはカルマーセの方じゃな。よく魔王選手を見てみい」

「へっ？」

司会の男は額に手を当てて、舞台の上に目を凝らした。しかし視界に写るのは姿すら霞むほどのスピードのカルマーセに、一方的に攻撃されているようにしか見えない魔王だけだった。それゆえ彼はミスターXの真意をはかりかね、疑わしげな目を何度も向ける。しかしその一方で、ミスターXの言葉の意味を瞬時に理解した者もいた。

「なるほど……。そういうことか」

サクラは魔王の様子を見て、納得したように手をぽんと叩いた。どうやらミスターXの言葉の意味がわかったようである。彼女はフムフムと頷くと感心したような顔になった。すると隣に座っていたシェリカやエルマが身を乗り出してサクラに迫ってきた。

ちなみにこの時、シアはいなかった。試合前に倍率表と書かれた板を抱えてどこかに出かけていたのだ。……一応、シアの職業は神に仕える神官である。

「何がわかったんや、サクラはん？」

「そうよ、一人だけ納得してないで私たちにも教えてよ」

「魔王の足元を見てみるんだ。そうすればシェリカやエルマにもすぐに分かる」

「足元……？ どれどれ」

シェリカたちは魔王の足元を注意深く見た。二人ともシーカーとしての優秀な視力を遺憾無く発揮して、魔王の足元を見つめる。二人の目はさながら望遠鏡のように、魔王の足元にある小さな埃の存在すら彼女たちに伝えた。そうして魔王の足元を見ていると、二人はすぐにあることに気がついた。

「砂が積もってる……？」

どこからか風で飛ばされてきたのだろう。魔王の足元には結構な量の砂があった。それがうつすらと、白い舞台に浮かぶ島のように魔王の周りに積もっている。その島には魔王がつけたと思われる足跡がいくつもあった。

しかし島にはそれ以外のどんな足跡も残っておらず、ずいぶん綺麗に整っていた。魔王が動いたならば掻き消されてしまうであろう、風の波紋などまでくつきりと残っている。

「はーん、さすが魔王はん。押されっぱなしに見えるけど実際には遊んでるんやな。あの場所から一步も動いてへんもの。砂でわかつたで」

「ああ、その通りだ。……見てみる、魔王は余裕だがカルマーセはもう息切れしてきたぞ」

サクラは前の手すりに身体を預けて、前のめりの姿勢で舞台を指差した。シェリカとサクラもすぐに身を乗り出して確認をする。すると舞台の上にはさっきまでよりかなり動きが遅くなったカルマーセがいた。

「ぜえ……はあ……やるじゃないか……。ここまで僕の攻撃を受けきるとはね。パパン以外では君が初めてだよ……」

カルマーセは真つ赤な顔をして息も絶え絶えで魔王にいった。その足はふらふらと震えていてかなり苦しそうである。剣もすでに下ろされいて、軽く叩かれただけで倒れてしまいそうな様子だ。しかし、魔王はそんなカルマーセの様子などお構いなく、かなりきつい言葉を彼に告げた。

「それなりに速かったが一発一発が軽かったからな。あれなら杖でいちいち受けずとも単純に耐えることだってできた」

「なんだとオ!!」

カルマーセの顔がにわかに青く染まった。だがそれも一瞬ですぐさま赤みを帯びていく。顔はあつという間に灼熱のマグマのように熱く赤くなり、頭から湯気が出た。その全身はかくかくと細かく震えて鎧がかちかち音を立てる。

そうして燃え立つ炎のように怒りに染まったカルマーセは、いきなり大声で笑い出すと魔王を睨みつけた。

「ふふふ、いいだろう! 君は僕を怒らせた。その事実がどんなことか、君に今から教えてあげよう!!」

「……三流魔族に良くこんな連中がいたな」

「さつ、三流! 魔族というのは知らないが僕が三流! きつ、貴様ア! 絶対に許さア〜ん!」

カルマーセは渾身の叫びとともに、再び姿が消えるような速さで動き出した。怒りが疲れを忘れさせているらしい。それにたいして魔王もまた瞬時に杖を構えるものの、剣がそれにぶつかることはなかった。

魔王の目には、だんだんと速度を増しながら彼の周りを回っているカルマーセが見えた。その一見すると無駄にしか見えない行動に魔王は首を傾げる。

魔王が首を傾げていると、カルマーセの速度はいよいよ最高点に到達した。つむじ風が起きて、魔王の髪を吹き上げていく。魔王はその髪を抑えるとさらに疑問を深めた。カルマーセの真意を彼はまだ掴みかねていたのである。

だがここで奇妙な現象が起きた。無数に見えたカルマーセの残像が、次々と重なっていくのだ。ひとつひとつと重なっていく残像は、重なる度にはつきりとしていき、やがて本物のカルマーセと区別がつかなくなっていく。そしてその残像が四つにまで減った時には、魔王の目にもカルマーセが四人いるようにしか見えなくなっていた。

「ははは、どうだい？ 僕の必殺技『残影剣』は。僕が四人いるようにしか見えないだろ。本物がわからないから君にも手だしはできないよ！ ハッハッハッハ！」

四人になったカルマーセによる、いつもの四倍は寒い高笑いが闘技場に響き渡った……。

## 第三十八話 カルマーセの脅威

### 第三十八話 カルマーセの脅威

風が吹き抜ける舞台の上で、魔王は四人に分身したカルマーセに睨まれていた。カルマーセたちは分身ゆえかすべて同じように下卑な笑みを浮かべて魔王を見下しているようだ。絶対の自信と余裕が、彼にこのような表情をさせているのだろう。

「プッ……」

魔王はそんなカルマーセたちにふつと息を吹き出した。彼は口を手で抑えて笑いを堪えられないようだ。その目はピエロでも見るようにカルマーセを見ている。

カルマーセはその態度に眉を吊り上げた。彼は肩を怒らせて、炎の燃えるような目で魔王を睨みつける。そして、身体を震わせながら声を絞り出した。

「何がおかしい……。不愉快だ、さっさと行くぞ!」

「四人に増えたからな、どれ少しは相手してやろう」

魔王とカルマーセは互いに地を蹴り、加速した。四人に増えたカルマーセと魔王の身体が交錯する。刹那のうちにぶつかりあった四つの刃と杖は、激しい音を巻き起こした。大気が揺さぶられて五人の足元が軋みを上げる。

「四人分の力がかかっているな。影にも実体があるのか……? ま

あ良い、ふんっ！」

魔王が唸ると、彼の杖がカルマーセの剣を弾き返した。魔王はその勢いでもってカルマーセたちの腹に重い一撃を加える。風を切った杖は、唸りを上げながらカルマーセたちの鎧をないだ。

魔王の一撃を受けた二人のカルマーセ。その鎧の胸は、霞みのごとく消えうせた。杖はわずかに霞みのようなものを切っただけである。その手から伝わる軽い感触に、魔王はわずかに眉をひそめた。

「実体があるようでないか。なかなか面白い」

魔王が口元を歪めて笑っていると、カルマーセたちは隙のできた彼に一斉攻撃を仕掛けてきた。魔王はそれらをすべて交わすと、カルマーセたちに再び杖を放つ。だがその杖はまたも宙を切り、カルマーセにダメージを与えることはなかった。

「とうだい、僕の残影剣は。この影たちはそれぞれ実体がありながらも、攻撃でダメージを受けることは無いんだ。それに君にはどれが本体だかわからない。つまり、僕は君に一方的に攻撃できるということさ！」

カルマーセたちは魔王を取り囲むと、高らかな勝利宣言をした。その人差し指は魔王の顔をまっすぐに示していて、背中では反り返っている。まさに強者の態度の見本とでも言うべき態度だ。

カルマーセの宣言に闘技場は震撼した。一方的に攻撃を加えられる上に、自分は攻撃を受けない。カルマーセの言葉が本当ならば恐るべき脅威である。観客や司会、さらに他の選手にいたるまでがにわかに騒ぎ出した。

「なかなか楽しい特技を持ってるのですよ。一応、敵として認識してあげるのです」

「あの男、口先だけかと思ったらやるじゃない」

「影分身でござろうか……。いや、それとは別か……」

舞台の脇で試合を見ていたルーミス、コウラン、フウタロウの三人は口々に残影剣の批評をはじめた。かなり驚いている様子である。だがその顔に驚きはあっても恐れはない。三人にとっては大した脅威ではないのだろう。

その一方で、観客席のシェリカたちは気が気でなかった。彼女たち三人は額から冷や汗を垂らして、互いに顔を見合わせる。その目にはわずかな不安があった。

「あんな技、反則やで！ 魔王はんでも厳しいんとちゃうか？」

「そうかも……。でもまだ魔王は魔法を使ってないわ。魔法を使えばカルマーセなんて四人まとめて……」

「いや、あの速さでの戦いだ。魔法を使っている間に攻撃されてしまっぞ！」

「確かに……！」

サクラのもつともな話に、シェリカたちの顔が一気に暗くなった。彼女たちはわずかにうなだれながらすがるような眼差しで魔王を見る。その時そんな鬱な彼女たちの後ろから、鈴の音のような透き通

った声がかかった。

「ずいぶん不景気そうね。大丈夫？」

「シア！」

シアは魔王の状況が良くないのに、ほこほことした気分の良さそうな顔をして席に着いた。その手には倍率と書かれた板と膨れたひよこの財布がある。賭けの胴元でもやって、かなり金を集めてきたようだった。

シェリカたちはシアのそんな態度に目を見張った。シアが金を儲けてにやけているのはいつものことではあるが、時と場合がある。今はあまりに場違いだった。そこで、シェリカはサクラやエルマに目配せすると三人を代表してシアに注意する。

「ちょっとシア、魔王が苦戦してるのよ。あんたもちよつとは深刻な顔をしなさいよ」

「魔王が苦戦……？ どこがなの？」

「どこがって……」

シアの呑気な様子にシェリカは頭を抱えた。彼女の額には深いしわが刻まれてその苛立ちを鮮明に表す。しかし、シアはシェリカの気持ちなどお構いなく自分の意見を述べはじめた。

「三人とも魔王がカルマーセごときに負けると本気で思ってるの？ だとしたら三人は魔王を信用していないのね」

「信用してないってそういうわけじゃ……」

「魔王が勝つと信じてるならば、どんな状況でも優しく明るい顔で見守るものよ。それに魔王を見て、彼は笑ってるわ」

「えっ？」

シェリカたちは前の手すりに張り付き、舞台の上の魔王に注目した。するとその顔は確かに笑っている。いつものあの余裕たっぷりの底知れぬ笑いだ。

その笑いを見たサクラは少し複雑な顔をした。そして彼女は隣のシェリカに向かって語りかける。

「ほんとだな……。ということは魔王にはこの状況を打開する策があるのか。私にはまったく思いつかないが……」

「そうみたいね。私にもさっぱりだけど……」

シェリカもお手上げといったように手の平を上にした。その様子に、サクラは首を捻る。シアやエルマもまた同様で、魔王が何を考えているのかわからないようだった。

一体何を考えているのか。それを明かさぬまま、魔王はただ不敵に笑うのであった……。

### 第三十九話 勝利の鍵は……

第三十九話 勝利の鍵は……

「カルマーセ選手、衝撃的な宣言です！ これは魔王選手、大ピンチなのでしょうかアア！」

司会の男は観客席から声を張り上げた。彼の額からは汗が吹き出して、手に汗握っている。その彼が紅い顔をして試合の状況を伝えるたびに、観客はどよめきに包まれていく。大声を上げる者から立ち上がる者まで、数万の群衆に埋められた観客席は揺れに揺れた。

その一方で舞台の上は気味悪いほどの静けさに包まれていた。大気は凪いだ海のように一切の揺らぎもなく、地面も動かない。魔王とカルマーセは互いに笑い、牽制を続けていた。

「ほら、攻撃してきてごらんよ。怖いのかい？」

「良いだろう、だがその前に……」

魔王は杖を高く掲げた。黒紫色の杖はつややかに陽光を反射して煌めく。その光にカルマーセは目を細めた。

「魔法を使うのかい？ 呪文を唱える間に倒しちゃうよ」

「黙って見ている。早い男は嫌われるぞ」

魔王は腕に全身の力を込めて杖を振り下ろした。杖は舞台を穿ち、地震のように揺れ動く。地が裂けるような轟音とともに砂埃が舞い

上がり、石畳が次々と持ち上がっていった。重い石が木の葉のように飛んでいき、地面が現れていく。カルマーセは揺れる舞台の上に膝をつき、険しい顔をしたまま動けなかった。

二人のいる舞台の上は、たちまち膨大な砂埃に包まれた。火山の噴煙のように濃密な砂埃は、魔王とカルマーセの姿を覆い隠してしまう。砂埃はしばらくの間、舞台の上をすっかり隠していた。

風が吹き抜けた。砂埃は残らず掻き消されて、舞台の上の様子があらわになる。その時、舞台は一変していた。石畳が剥がれてその下にあった地面が晒されている。ちょうど円形をした白いさらさらとした砂地が晒されていた。

その地面に膝をついていた四人のカルマーセたちは、その円の中にいる魔王を忌ま忌ましがね目で睨みつけていた。彼らは剣の鞘を杖がわりに立ち上がると、魔王に向かって同じことを寸分違わぬタイミングで吐き捨てる。

「何をするんだ！ 僕に勝てないからって八つ当たりかい！」

「そうではない。まあ、戦ってみればわかるだろう」

「ふっ、それもそうだな！」

再び杖と剣の激突が始まった。カルマーセたちは次々と入れ代わり立ち代わり魔王に突撃していく。本体が誰であるのか悟られぬように、素早く位置を交代しながら魔王へと果敢に挑む彼らは実に統制が取れていた。姿が伸びて見えるほどの速さであるにも関わらず、彼らはぶつかることなくそれでいて絶え間無い攻撃を魔王へと繰り出していく。

幾重にも重なる白銀の煌めきが、魔王の身体を目掛けて放たれていく。曲線を描き出す剣は、刹那の間に雲から差し込むような陽光のようになつて魔王の杖とぶつかりあつた。剣と杖は弾き弾かれ、原始の打楽器よろしく激しい音をうち鳴らす。光が弾けて大気が揺れ、闘技場の観客たちは息を呑んだ。

魔王とカルマーセたちは一進一退の攻防を続けた。いや、四人分の攻撃を捌きながらも隙をついては攻撃を決める魔王の方が、実は優勢だったのかもしれない。しかし魔王が攻撃したカルマーセたちはいずれも分身で、攻撃されても一瞬にして元に戻つてしまった。そのためカルマーセたちは本体をうまく匿いながらも、圧倒的な実力の魔王にたいして互角以上に戦つていた。

「手も足もでないじゃないか。このままじゃ負けるのはもうすぐだね！」

「それはどうだろうな？」

魔王はシンクロしているように同じことを言つたカルマーセに余裕の笑みを浮かべた。カルマーセはそれがカンに障つたらしく、顔を紅く染め上げてさらに激しい攻撃の嵐を決めていく。

手数が多いというのは圧倒的なまでのアドバンテージである。レベルならばカルマーセは魔王の五分の一もないが、それを四人に増えることで彼は見事に補つた。彼らはわずかづつではあるが魔王を圧倒し始める。もっとも、魔王は終始余裕の表情をしていたので精神的にはカルマーセの方が追い詰められていたのかもしれないが。

こうしてカルマーセは魔王を舞台の端の方にまで追い詰めてきた。

魔王はここにきて、ようやく魔法を使ってカルマーセを吹き飛ばしてしまおうかと考え始める。呪文を唱えながらも魔王ならばカルマーセの攻撃くらい、余裕で捌くことができるのだ。つまり、魔法を使うと決断すれば確実に魔王は勝てる。しかしそれでは原始的で面白味にかけるのでそのやり方を魔王は避けていたのだ。

そうして魔王が悩み出した時、ようやく彼の策が身を結んできた。彼はにやりと、いつもの不適な笑いをカルマーセに向ける。

「お前が本体のようだな」

「なっ、馬鹿な！」

魔王は一人のカルマーセに向かって杖を突き付けた。杖を突き付けられたカルマーセは驚きで目を見開き、よたよたと後ずさっていく。

だが魔王から少し距離を取った彼は、自身の分身を呼び寄せるとまた目にも止まらぬ速さで場所の入れ換えを始めた。分身と本体が入り乱れて、すぐにまた本体がどこへ行ったのかわからなくなってしまう。とても、目で追いかけられる速さではなかった。

「どうだ、わからないだろう。偶然見つかった時の備えも万全なさ。よほど慣れていなければ、超人的な動態視力の君でも本物の僕がどこにいるのかはわからないはずだよ！」

「こいつだな」

魔王は自分から見て左の奥にいたカルマーセを何のためらいもなく杖で指した。カルマーセは今度こそ本気で狼狽し、顔を青くする。

四人同時に頭を抱えた彼は、化け物でも見るような絶望的な顔で魔王を見つめた。そして認めたくないとはかりに魂からの雄叫びを轟かせる。

「馬鹿な！ どうしてわかる、わかるんだア！」

「簡単なことだ。今のお前には目印がついているからな」

「目印だと！」

「そうだ、足元を良く見てみる」

カルマーセは魔王に促されるまま自分の足を見下ろした。すると特別に何も起きていない自分の足がある。膝の当たりまで砂にまみれて汚れてはいるが、目印となるような物は見当たらなかった。

「目印なんてないじゃないか！」

「わからぬのか。ならば分身の足も見てみるのだな」

「目印は分身の方にあるのかい？ どれ、見てみようか……」

カルマーセは隣に立っていた分身の足を覗き込んだ。彼の目にはさきほどまでほとんど変わらない足が映し出される。しかし、カルマーセにはそのわずかな違いに気がついた。

「……そうか！」

本物のカルマーセと分身の間にあった違い、それは足の汚れだった。本物のカルマーセが膝ぐらいまで砂や土で汚れているのにたい

して、分身の方はまったく汚れていないのだ。分身のカルマーセは魔王に攻撃を受けるたびに実体を消すため、汚れがたまらず下に落ちてしまったのだろう

それに気づいた瞬間、カルマーセの頭の中で一つの謎が解けた。魔王がさきほど行った不可解な行動、それは恐らく自分の身体を汚すためだったのだろうとわかったのだ。石畳より下が地面の方が数段足元が汚れるのだ。

カルマーセの顔は深い絶望に包まれた。海の底に沈んでいくような先の見えない感覚によって、彼の心は埋められていく。泥のように黒くて粘着質な絶望感が彼に纏わり付いた。分身はすぐに消えてなくなつて、彼は絶海に漂流する船の孤独や絶望を理解するまでに至る。

魔王は膝をついて魂が抜けたようになってるカルマーセ元に歩み寄った。そしてその首筋に杖を突き立てて冷ややかに宣言する。

「余の勝ちだな？」

「ああ……そうだな」

カルマーセは力なく剣を手放した。剣は地面に横になり、寂しい光を放つ。それは敗者となったカルマーセの悲哀を表しているようだった。

こうして魔王は意外にも粘ったカルマーセを倒し、二回戦へと駒を進めたのであった……。

## 第四十話 憑かれた女

### 第四十話 憑かれた女

「決まったアア！ 一回戦第一試合は魔王選手の勝利です！ 皆さま、どうか魔王選手に拍手を！」

司会の男はその場で立ち上がると、マイクを振り上げて叫んだ。それに応じて観客たちも一斉に立ち上がり魔王に盛大な拍手が送られる。数万の観客たちは総立ちとなり、地鳴りのような拍手が響いた。それにはときおり歓声も混じり、魔王に暖かい応援の数々が捧げられている。

シェリカたちも例外ではもちろんなく、魔王に向かって声の限りに叫んでいた。普段はあまりしゃべらないシアまでもが声を張り上げている。四人は身を乗り出しながら、魔王に手を振って必死にアピールしていた。

魔王はシェリカたちに気づくと、手を挙げて笑った。いつもの得体の知れない笑いではなくどこか温かみのある笑みだ。彼はそうしてシェリカたちの声援に応えると、舞台からさつと下りていく。そして闘技場の端にいくと、彼は観客席との間にある高い壁にけだるい様子でもたれたのだった。

「えー、ただいまから舞台の復旧作業を始めますので第二試合は三十分後からとします。繰り返します……」

司会の男がそう連絡すると、通用口から次々と作業員が現れた。彼らは手際よく瓦礫の除去などを進めていく。魔王はその様子を壁

にもたれてぼんやりと眺めていた。昼下がりの太陽に照らされた、細くなった目はいかにも眠そうだ。

するとそんな魔王にどこから現れたアイリスが近づいてきた。彼女は長い金髪を揺らしながら、そつと魔王の傍に立つ。魔王は横を向いて彼女の整った顔を見ると、怪訝な顔をした。

「何だ？」

「時間がありますから、少しお話でもと思ひまして。私と話すのは嫌ですの？」

「いや、そんなことはない。余も暇をしていたところだ」

魔王は苦笑すると、アイリスの方に改めて向き直った。アイリスは自らの方を向いた魔王の顔を軽く見つめると、冷え冷えとした笑いを浮かべる。そして彼女はからかうような口調で話をはじめた。

「あなた、さきほどの戦いでずいぶんと手間取ってましたけど……。私にはわかりましたわよ？ あなたはまだほとんど力を出してない」

「ああ、そうだ。一割と少しといったところか」

「やっぱりそうですね。でもどうして？ わざわざ長引かせることないでしょう？」

「あの男の技が面白かったからな、興がのつた」

アイリスは一瞬、目を細めた。わずかにだがその身体から殺気が

にじむ。だがすぐに彼女は気を取り直すと、魔王にゆったりとした口調で語りかけた。

「私はああいう技は嫌いですわ。弱さをごまかすためにしか思えない」

「ほう、ということはそなたは弱いことは嫌いかな？」

「ええ、罪だと思ってます」

きつぱりとアイリスは断言した。そこに一切の躊躇いや思考はなく、その考えが身体全体に染み渡っているようだった。魔王はその毅然としたアイリスの顔を見ると、不意に目を逸らして上を向く。眩しい陽射しに目を細めているその顔は、遠い過去に思いを馳せているようだった。

「……余もそういう考えだった。だがある時から何を持って強いのか、何をもって弱いのかかわらなくなってしまっただけ。だから今は何でも受け入れている」

「へえ、なら今はずいぶんと寛容ですね。何でも受け入れるその寛容さが混沌に合っているのかも知れませんか」

「……余が混沌に属すると知っていたのか？」

魔王は眉を吊り上げた。その目は鋭くなり、射るような眼差しがアイリスに向けられる。魔王の周囲は殺気立ち、底冷えのするような雰囲気となる。

アイリスはそんな魔王の殺気をもともしなかった。彼女は至極

優雅な立ち振る舞いで、懷から手の平より少し大きい程度の袋を取り出す。彼女はそれを顔の前に掲げると、なにかに憑かれたような光の無い目をして言った。

「この袋の中には私がユリアス様より預かった至宝がおさめられておりますの。それが私に教えてくれるのですわ。あなたが混沌の加護を受けていると」

「物の意思が分かるのか？」

「もちろん。今、この至宝の意思と私の意思は同調しておりますわ。だからあらゆることがわかるんですよ」

「悪いことは言わぬ、そのような物はユリアスに返すが良からう。そなた、憑かれておるぞ」

魔王は袋の中から背筋をそばだたせるような気配を感じていた。聖なる物のようだが深遠の闇を感じさせる気配。強烈な光に射す陰のようなそれは、魔王をしても奇妙で気味が悪かった。アイリスが手にしている物の正体はわからないが、ろくな物ではないことだけは魔王にもはつきりとわかった。

アイリスはそんな魔王からの忠告を聞くと、何故か笑いはじめた。けたけたと笑うその様子はどこか魂が抜けてしまっているようで、そこに彼女の意思を感じることはできない。もはや完全に、なにかの意識に乗っ取られているようであった。

「あははっ、返せですって？ これは素晴らしい力を与えてくれるんですよ！ たとえユリアス様が返せと言っても、もう手放しませんわ！」

「ふむ、ますます精神を犯されているな。急いで返さねば取り返しがつかなくなるぞ。それで良いのか？」

「しつこいですわね、殺しますわよ？ 最近の私は少しばかり凶暴ですよ。さきほども予選の選手をみなごろしにしたおかげで、少し落ち着いていたのですから！」

アイリスは傘を手にすると、魔王の首筋に突き付けた。光なき目をして殺気を放つその姿からは、すでにさっきまでの余裕は失われている。彼女は今にも、魔王の首を傘で刺しそうであった。

魔王はアイリスからすつと身を引き、距離を取った。もはや手遅れだと悟ったのだ。彼は疲れたような顔になると、アイリスに告げる。

「どうやら遅かったようだな。もはや戦うしかないらしい」

「もとからそうではありませんか？ まあでも、もし私が恐いのならば棄権して下さっても構いませんわ。もっとも、あなたが混沌の加護を受けている限りそのうち殺しますけどね……」

アイリスはそう言い残すと、どこへともなく去って行った。その後ろ姿を、魔王は眉間にしわを寄せて見送る。ちょうどその時、舞台の整備が終わり第二試合が始まったのだった……。

## 第四十一話 修羅と忍び

### 第四十一話 修羅と忍び

「お待たせしましたア！ ただいまより第二試合を開始させていただきます！ 第二試合はクレイル選手対フウタロウ選手です！」

司会の男が、修繕の終わった舞台の上で絶叫した。それと同時に舞台の両端からクレイルとフウタロウが舞台の上へとあがる。試合の開始を待たされていた観客たちはにわかに色めき立ち、闘技場に活気が満ちあふれた。あちらこちらから応援の声が上がリ、旗や横断幕が翻る。

魔王はそんな熱狂渦まく闘技場の通路を素早く走り抜けていった。階段を駆け登り、通路にはみ出した観客たちを掻き分けながら全速力で闘技場を走り抜ける。そしてどうにか、選手の二人が動き出す前にシェリカたちの元にたどり着いた。

「あつ、魔王！ どうしたのよ」

「シェリカに一つ聞きたいことができてな。ただ、遅くなったから試合を見てからにしよう」

「そういうこと。じゃあみんな、場所をちょっと空けるわよ」

シェリカが促すと四人は少しずつ場所を詰めて、魔王が座る場所を確保した。もとかからゆとりを持って長椅子に座っていたので一人分くらいはなんとかあったのだ。魔王はそうして長椅子の通路側に空けられたスペースに細い身体を押し込む。

「ちょっときついけど大丈夫ね。あつ、いよいよ始まるわ」

シェリカは声を上げて舞台を指差した。それはちょうど、司会の男が舞台から下りていくタイミングのことであつた。いよいよ舞台には選手の二人だけが残されて、緊張が高まっていく。一触即発、今にも激しいぶつかり合いが始まりそうであつた。観客たちも高まる緊張に息を呑み、闘技場が一瞬だけ静かになる。

「はっはははア！ さて、まずは貴様を蜂の巣にしてやろうか！」

「……笑止」

クレイルはコートの中から大型の魔銃を取り出した。彼は一抱えほどもあるそれを正面に構えると、神業のごとき速さで引き金を引いた。軽快な発砲音が続け様に重なりながら響き渡り、黒い銃口が絶えることなく白い光を放つ。

無数の魔弾が筋を描き出しながらフタロウに迫つた。さながら雷のようなそれらは、刹那のうちに接近してフタロウの身体を穿とうとする。しかしその瞬間、その身体が遥か上空へと舞い上がった。

「陰影流・刃雨」

フタロウの手から無数の手裏剣が放たれた。黒雲のようなそれらは重力に従い、舞台めがけてまっすぐに降り注ぐ。濃密な密度をほこる手裏剣の群れは、激しい雷雨のような音とともにクレイルの頭上近くへと至る。

「かアッ！」

「……何？」

クレイルはコートから何かを取り出して上に放り投げた。直後、黒い楕円形をしたそれは手裏剣とぶつかり爆風を巻き起こす。嵐を倍にしたような風が舞台上空を吹き荒れて、手裏剣の雲はあとかたもなく消し飛ばされる。

手裏剣は散り散りになって闘技場に降り注いだ。観客たちは巻き添えを食うまいと椅子の下に隠れたり、頭を何かで隠したりする。観客席はある種の恐慌状態に陥った。観客たちの怒号や悲鳴がこだまして状況すらもよくわからなくなっている。それはシエリ力たちも例外ではなく巻き込んでいた。

「サクラならきつと大丈夫！」

「うわああ！ 私を盾にするなああ！」

「シアはん何をやっとなるんや！ 椅子の下に避難するで！」

エルマが逃げ遅れたシアとサクラを強引に椅子の下へと引っ張り込んだ。二人はもつれたり、椅子に肩をぶついたりしながらも何とか避難に成功する。二人はぶつけた場所をさすりながらほっと息をついた。

「よしこれで大丈夫……。あれ、魔王はどうしたのだ？」

「そうね、姿が見えないわ」

「ああ、魔王なら大丈夫だとか言ってそのまま座ってるわ」

シェリカは自分の脇に垂れているマントの端を掴んだ。それを見たサクラたちは尊敬したような呆れたような、何とも表現しがたい顔をする。いくら大丈夫だとは言え、刃物の降り注ぐ中で座っているのは少し呑気過ぎるように彼女たちには思えた。

一方の魔王はそんなシェリカたちの考えをよそに試合を集中していた。彼の目はクレイルやフタロウの動きを追って、右へ左へと視線を走らせている。観客たちが大騒ぎをしていようが、それに関係なく試合は進んでいるのだ。

「もらったア！ バインドハアード！」

クレイルは身体を弓なりに反らせて右腕を大きく振りかぶった。その次の瞬間彼の腕は唸りを上げて振り下ろされ、その手の部分が弾丸のように飛び出していく。

飛び出した右手は繋がれている鎖を鋼の蛇のように揺らしながら、宙を飛んだ。カシャカシャと耳障りな金属音を鳴らしてその鋼の魔の手は、バランスを崩して動けぬフタロウのもとへと向かっていく。

「くっ……！」

フタロウは身体を無理矢理にねじ曲げた。上半身が下半身に対してありえない角度で曲がって、どうにかクレイルの手の軌道からはずれる。だがやはり身体にかかる負担は大きかったのか、その口からは苦悶の声が漏れて曲線を描いていた眉は真一文字になってしまった。

しかしその甲斐あってクレイルの手はフウタロウの身体を捕らえることはなかった。手はフウタロウの身体のアツた場所をすり抜けて、虚空を掴む。それを見たクレイルは、観客にも聞こえるような大きな舌打ちをした。彼はそのまま鎖を巻き戻して手を元に戻すと、人を殺せる目ですでに地上に戻っていたフウタロウを睨みつける。その目は醜い感情で燃える炎のようであつた。

「見苦しく足掻くやつだ。あそこで捕まっておれば楽だつたのを」

「……勝たねばならぬからな。だが、真正面から挑んだのでは不可……。ここは忍びらしく行くとしよう」

フウタロウの指が盛んに動き出した。彼の指は互いに絡まりあいながら次々となにかの形を現わしていく。数が増えて見えるほどの速度で、指は踊るように素早くなめらかな動きをした。

「陰影流・影隠れ」

フウタロウの小さくも重みのある声が響いた。すると彼の身体は晴れた日の雪のように、溶けてどこかに消えてしまったのだつた……。

## 第四十二話 危険、破滅の光

### 第四十二話 危険、破滅の光

「消えた！ フウタロウ選手、完全に消えてしまいましたア！ さらにその足音なども私の耳にはまったく聞こえてきません！ これは一体どういうことなのでしょう、ミスターXさん！」

司会の男は額の汗を拭いながら絶叫した。彼はそのまま勢い良く司会とかかれた席から立つと、隣のミスターXにマイクを手渡す。マイクを渡されたミスターXは、額のしわを深くするともっともらしい咳ばらいをした。

「ごっほん、これはある種の魔法で光を曲げ、姿を見えにくくしておるのじゃろな。そしてさらに気配や存在感を完全に消して、その存在すら認識できんようにしておるのだろ。これならば盲目のクレイルにも有効だ」

「なるほど！ それではこの戦いはフウタロウ選手が断絶優勢ということでしょうか？」

「おそろく……」

ミスターXは深刻な顔をして、わずかばかり自信なさげに言った。彼もこの試合の展開は読みかねていたのだ。司会の男はそんな彼の態度に何も言うことができない。どうにも先の見えない切迫感があったりを包んでいった。

一方、手裏剣の落下から落ち着いてきた観客席では魔王が笑って

いた。声こそださないが、非常に滑稽そうである。その微笑みを近くで見たシェリカたちは、たまらず魔王に笑いの理由を聞いた。

「どうしたのよ、そんなに笑っちゃって」

「なに、これから試合が面白くなりそうなのでな」

「面白くなる？ もうすぐに決着がついちゃうわよ」

「そうはならないだろうから面白そうなのだ」

魔王は体を揺らしていつもの不適な笑いを顔に浮かべた。軽薄そうだが、それでいて深みのあるいつもの得体の知れない笑いだ。それを見たシェリカたちは、なにかあるのだろうと舞台の上に視線を注ぐ。

そうして彼女たちが熱い視線を注いでいると舞台の上で動きがあった。クレイルが突然、狂ってしまったような高笑いを始めたのだ。彼はそのままどこにしまったのだろう、コートの中から大砲を思わせるような魔銃を取り出す。黒い銃身が陽光にきらめき、目が覚めるような冷たい光を放った。さながらそれはフウタロウへの死刑宣告をしているようだ。

「それで見えなくなっただつもりか？ わしには感じられるぞ、お前のかすかな動きや脈拍さえもな！」

「……はったりだな」

どこからともなくフウタロウの声が聞こえた。どこから発せられ

たのかまったくわからないそれは、舞台の上を包み込むかのように重く響く。重い声の響いた舞台は、さながら鉛の布団をかけられたように静まった。

その声の響きが消えると同時に、クナイがクレイルへと飛んだ。背後から放たれたそれは一切の物音を立てることなく、瞬時にクレイルの背中へと殺到する。クレイルの背中に穴が開くのは観客たちの目には必定的のように思われた。だが……。

「甘い！」

「……む」

クレイルの鋼の右腕が一閃してクナイをはじき返した。紅い火花が散って、クナイがはたりと舞台の石畳に落ちる。それと同時にどこからフタロウの悔しげなうなり声が聞こえてきた。物音がしないどころか気配すらないフタロウの存在を、クレイルはたしかに感知できているようであった。

「どうしてわかるのだ、私の隠密は完璧のはずだ。この術は気配や足音すらも消すから盲目のおぬしにも通用するはずなのだが……」

「わしは視力を失ってから気を感じする技を身につけてな。今のわしにはその程度の術、児戯にも等しいのだ」

「……そうか。ならば！」

フタロウは再び舞台の上に姿を現した。それはちょうど、細かい積み木が一瞬でつみあがったようなさまであった。その術の見事さに観客たちは度肝を抜かれて歓声を上げる。闘技場の緊張した雰

団気が一瞬、やわらかいものになつた。

しかし、クレイルはそんなことに興味はないようであつた。いや、盲目の彼にはわからなかつたのかもしれない。ともかく無関心に見えた彼は、再び姿を現したフウタロウを黒光りする銃口で向かえた。それに対してフウタロウも印を結び、手際よく術を完成させていく。舞台の上の空気がざわめき、にわかには空白の時間ができた。

「死ねい、ジェノサイドカノオン！」

「陰影流・豪炎滅波！」

青い極彩色の閃光と紅く燃えたぎる炎の塊が真正面からぶつかりあつた。雷が落ちたような衝撃音が闘技場を揺らして、観客や司会の耳を直撃する。彼らはたまらず耳を押さえて身を小さくした。さらに砂漠の熱波のような風が吹き荒れて闘技場はさながら熱の海とくす。

「粘るな！　だがこれならどうだア！」

クレイルはコートを熱風にはためかせながら、魔力をその身体に満たしていった。膨れ上がった魔力はほのかな炎のようになり、銃へと注がれていく。銃口から放たれる閃光が急速に太さを増して、炎を押しはじめた。

「くっ……あああ！」

身体にかかる膨大な圧力に、フウタロウが押され出した。彼は顔をしかめながら、ギシギシという音とともに舞台を滑っていく。鉄

の入った足袋が火花を散らして、石畳がわずかつつではあるが削られていった。

「ぬおお！　まずいつ！」

とうとう、フウタロウは舞台の端にまで来てしまった。彼は端にある石のわずかな出っ張りを足場にして、なんとかクレイルの攻撃に耐える。顔から汗を吹き出している彼には余裕が一切なく、限界は間近であった。さらに彼が足場になっている石も、いつ剥がれ落ちてもおかしくない状況だ。

「もう限界のようだなア！　はははっ、消えろオ！」

「……もはや、これまで！」

フウタロウはもはや抵抗することを諦めた。彼はすばやく懷から黒い球を取り出すと、地面に向かってたたき付ける。すぐさま球が炸裂して白煙が沸き上がった。フウタロウの姿は白煙の内に消えて、閃光は虚しく彼の影だけを貫く。

妨げるもののなくなった光線は、金属的な音を轟かせながらそのまま観客席へと直進した。光は石畳の石や地面の砂を吹き飛ばしながら、距離をまたたく間に詰めてくる。くしくもそのあたりの席にはシェリ力たちも座っていた。

「ひええ！　あかアゝん！」

「これはだ、だめだわ……！」

「今から防ぐのは無理！」

「くっ、もう私たちは終わりなのか……」

「……仕方ないな」

シェリカたちがにわかに絶望したり悲鳴を上げたりする中、魔王は目の前の手すりに飛び乗った。銀色の髪と深紅のマントをたなびかせながら、彼は眼下に迫る青い光を確認した。そして薄い唇を震わせるように素早く動かし、息もつかせぬうちに魔法陣を編む。

「守護陣二式！」

魔王が叫びを上げると、深い闇色の杖から紫と紅の混じったような魔力が放たれた。それはすぐさま薄い銀色の鏡のような膜を造る。蝙蝠傘のごとく一瞬で広がったそれは光の前にふさがり、そのつややかに輝く表面をもって光を上へと弾いた。

ほぼ直角に打ち上げられる格好となった光は、周囲を太陽のように照らしながら空の深くへと消えていった。その光がさながら流れ星のように完全に消えたところで、遙か彼方より音だけが闘技場に届く。その腹を打たれたような音の衝撃は、遠くで起きた爆発の規模を物語っていた。

そうして光が消えた時、舞台の上にはクレイル以外には誰もいなかった。その代わり、舞台の下に黒い影が見える。その痩せぎすな後ろ姿は間違いなく、逃亡するフタロウのものであった。

「どうやら逃げたようだな。情けないやつだ」

クレイルはそう言い残すと、魔銃を担いで舞台から去っていった。

彼の厭味な高笑いだけがこだまして、観客や司会の耳に残る。その残響があらかた消えたところで、司会の男が舞台に上がった。

「……しよ、衝撃の結末です！フタロウ選手の逃亡によりクレイル選手の勝利です！」

観客席を襲った攻撃により今だ衝撃を受けている観客たち。その半ば呆然としている彼らの間を少し戸惑ったような司会の声が抜けていったのだった……。

## 第四十二話 危険、破滅の光（後書き）

この小説もだいぶ話数が増えてきたなあ……。私が目標にしてた  
とある迷宮物の小説の話数を今回で越えました。これは私的には結  
構感慨深いものがありましたよ。なのでこれを機会に、そろそろ設  
定をまとめたものを作ろうかと思っています。かなりいろいろと増えて  
きましたからね。

ただ、設定集を別に作るとパソコンが壊れているためシリーズ機  
能が使えないので、読者の皆さんが読んでくれるか不安です……。  
かといって本編に挟むとそれを嫌がる方もいるんですよ。結構な  
ボリュームになりそうですし……。

本気でどうしたものか……。もし読者の方で意見のある人は感想  
やメッセで送ってくださいとありがたいです。どうしようか本当に  
迷っているのです……。

## 第四十三話 ユリアスの謎

### 第四十三話 ユリアスの謎

第二試合にともなう舞台の破壊により、大会は三十分間の休憩となった。さきほどまで沸騰していたような観客席もいまは落ち着いて、観客たちはしばしの休息をとっている。それは魔王たちと例外ではなく、彼らは深く椅子に座ってほっと息をついていた。さらに試合中の緊張感から解放されたためか、女の子四人はいずれもうとうとうとしていた。

シエリカはそのアンティーク人形のように気品にあふれた顔を、あたたかな日差しに照らされていた。彼女はまばゆい太陽にその紅い瞳を細めながらも、実に心地良さそうである。するとそれを見た魔王は、小さな声で彼女に耳打ちした。

「すまぬが起きてくれんか？」

「ふえ、なんで……？」

「試合前にも言ったであろう。聞きたいことがあるとな」

「……そうだったわね。うー、ふわああ」

シエリカは両腕を伸ばして背伸びをすると、そのあとで口を抑えて大きなあくびをした。基本的には荒くれ者の多いシーカーだからかも知れないが、女の子としては少々がさつな行動だ。だが、魔王はそんなことには頓着せずにさっそく話をはじめた。

「実は聞きたいことというのはユリアスについてなのだ。知っていることを余に話してくれないか」

「いいけど、どうしてユリアスのことなんて聞きたいの？」

「さきほどな……」

魔王は試合前のアイリスとの出来事をシェリカに伝えていった。するとシェリカの額にどんどんしわが刻まれていって、顔つきも陰しくなっていく。そうして魔王が話を終える頃には、シェリカはすっかり渋い顔をしていた。彼女は俯き加減になるとフウツと息をつき、魔王に話を始める。

「そうね、あいつならどれだけ怪しい物を持ってもおかしくはないわね……。あいつ自身が謎の塊だし」

「謎の塊？　どういうことだ？」

「……いやさ、あいつに関しての情報は驚くほど少ないのよ。今の歳とか経歴とかでさえ、知ってるって人をあいつ以外に聞いたことがないわ」

「歳はともかく経歴を知らない？　あれだけのギルドを率いているようなシーカーなら知られていると思うが」

シェリカは魔王の疑問に対して両手を上げて、顔を横に振った。彼女は魔王に、わかってないと言わんばかりに疲れたような顔をする。

「それが聖銀騎士団の団長になる前のユリアスのことは誰も知らない

いの。前の団長が死んだ時、どこからともなく現れたのよ。それで何故かすんなりと跡をついで、団長をやってるわ」

「面妖な話だな」

「ええ、さらにそれだけじゃないわ。ユリアスについての記録は神殿やギルドにさえもまったくないのよ。ギルドはなんだかんだいつても営利組織だから何とかなるかも知れないけど、さすがに神殿は無理よね？」

シェリカは横に座っているシアをわずかに疑わしげな目で見た。

「――シアならお金を渡されれば記録をごまかすかもしれない……。悲しいことにシェリカは仲間のシアを完全には信用しきれていなかった。」

疑いの目を向けられたシアは、ビクツと身体を起こした。彼女は顔をぶんぶん振ったあとで、少し向きになってシェリカに反論する。

「私は違反スレスレのセコいはやるわ。でも違反はしないの。それに神殿のシステム上、記録をごまかすのは神官長でも無理」

「違反スレスレのセコいことってそれはそれで……。いいわ、今は置いときましょう。疑って悪かったわねシア。……。あれ、でもそうなるとユリアスは洗礼を受けてないことになるわ……。洗礼を受けたら記録に残るはずだもの」

「ううむ、しかし神の加護がなければ迷宮には入れぬぞ。それは余自らが体験済みだ。さすがにギルドの代表が迷宮に入れぬというのは無理があるぞ」

「そうよね。第一、ユリアスが迷宮に入るのを見たことあるわ。…ねえシア、あの神殿で洗礼を受けないと絶対に加護は得られないのかしら？」

シエリカがそういうと、シアの顔が曇った。彼女は額に手を当てて何やら考え込み始める。そうしてしばらくシアはうんうんと唸りながら、足をパタパタとさせて考え事をしていた。そしてそのあと、俯き加減になっていた顔を上げるとゆっくりと小さく口を開ける。

「……他の街にある神殿でも加護を受けられることはあるわ。でもすごく低確率な上に年数もかかる。それこそ信仰熱心な神官が生涯をかけて授かるといったレベルよ。ユリアスの見た目から考えるとまずありえないわね」

「他に方法はないの？」

「すごく眉唾もの話になるけど……。神の加護は人の魂に与えられるの。だから位の高い神の加護を受けた人間は、生まれ変わっても加護を受けたままになるって話は聞いたことがあるわ。でも生まれ変わりなんて荒唐無稽で非現実的」

シアはきつぱりと断言した。シエリカはその様子にため息をついて頭を抱える。魔王もまた、上を向いて何か思案を巡らせはじめた。

ちょうどその時、舞台の上での修復作業が終わった。立ち去っていく作業員たちと入れ代わりに、選手二人と司会の男が現れる。それを目にしたシアは、いまだに悩み続けているシエリカたちに声をかけた。

「試合が始まるわ、集中するべき。……気になるなら、闘神祭が終わったあとに神殿の地下図書館にでも行きましょう。あそこならたいがいのはわかるわ」

「……わかったわ。そうしましょ」

「余もそれに賛成だ」

魔王やシェリカたちはシアの意見に賛成すると、まだうとうとしていたサクラとエルマを起こした。起こされた二人は慌てて姿勢を正すと舞台の上に真剣な眼差しを送る。

こうして五人が集中したところで第三試合が始まったのであった。

## 第四十四話 仮面魔導士

### 第四十四話 仮面魔導士

「お待たせしました、ただいまより第三試合を開始致します！ 第三試合はコウラン選手対ルミス選手です！ それでは試合はじめ！」

司会の男はそう叫ぶと舞台から駆け降りていった。代わりに二人の女が舞台の上に加ってくる。片方は仮面をかぶった少女、もう片方は胸元の開いたチャイナドレスを着た東洋風の美女だ。

「一撃で灰にしてあげますです！」

「まあ恐い！ でも簡単にはいかないわよ？」

ルミスは付けていた白い仮面を、素早く紅いものと取り替えた。彼女は取った仮面を懷にしまつと魔力を練り上げ、手の平に火の玉を造る。赤々と燃え立つ炎の塊が次々と生成されて、コウランの元へ飛来していった。

飛来する火の玉を一通り交わすと、コウランは胸元から緑の扇を取り出す。彼女は一瞬でそれを開くと、思い切り仰いだ。

「むっ、風の魔法具ですか！」

扇から猛烈な風が放たれた。それに吹き飛びそうになるロープを抑えつけると、ルミスは顔をしかめる。彼女がすでに放った火の玉はすべて掻き消されてしまった。暴風は砂や埃を巻き上げて竜巻

のようになり、ルーミス自身も吹き飛びそうな状況となってくる。

そんな中、ルーミスは今度は黄色の仮面をつけた。その次の瞬間、彼女の指先から青い稲妻がほとばしる。稲妻は独特の轟音を響かせながらコウランのドレスを焦がしていった。コウランの顔がたちまち驚愕に歪み、凍てつくような眼差しがルーミスを射抜く。

「雷！ あなた二属性の魔法を無詠唱で使えるの！」

「正確にはそうじゃないですが、まあ似たようなものですよ！」

ルーミスは指先から雷を次々と放った。コウランはその光をなんとかすれすれで交わしながら、ルーミスに接近していく。くるくると回るようにして身体をずらしていき、コウランはルーミスの目の前まで近づいてきた。

ルーミスはコウランが接近してくると後ろに下がった。だが、雷は命中率に難があるのかある程度以上には離れない。着かず離れず、二人はダンスでも踊るような状態となった。人が五人くらい入れるくらいの距離を開けて、二人は互いを出し抜こうとステップを踏みながら死の舞を踊る。

「これではラチがあかないのですよ！ だから遊びはここまでにするです！」

互いに千日手となってきたところで、ルーミスは雷を弾幕代わりにして素早くコウランから離れた。コウランはめちゃくちゃに放たれた雷をかわすので精一杯で、ルーミスに近づけない。そうしてある程度離れることに成功したルーミスは、またもや懐から青い仮面を取り出した。彼女はそれを手際よく装着すると今度は手から鋭利

な氷柱を打ち出す。

金属質な音を立てて、弾丸並の速度で迫った氷柱。それをコウランは完全にはかわせなかった。わずかに移動の遅れた彼女の純白のふくらはぎを氷柱がかすり、柔らかな肉をえぐる。肌を破られたそこからはずぐに紅い鮮血が滴り落ちて、舞台の石を紅く変えた。コウランはその醜い傷を見るとたちまち眉をひきつらせる。

顔を強張らせたのはコウランだけではなかった。試合を見ていた残りの選手や一部の観客たちも彼女と同様に、背筋を冷やす。シェリカとシアもその一部に含まれていたようで、彼女たちは揃って青い顔をした。

「あつ、あの女三属性の魔法を無詠唱で使ったわよ！ 一体どうなってるのよ！」

「……私にはわからないわ。だけど恐ろしいわね」

普通、上級の魔法使いでも詠唱を完全に破棄するのは難しい。一部の天才と呼ばれる者たちが成功する程度だ。だがそれも加護を受けた属性か、自分が先天的に得意とする属性に限られる。そのため三属性の魔法を完全無詠唱で自由自在に使いこなすルーミスは天才を超えて化け物とすら言えた。

魔法を得意としているシェリカとシアはすぐにそのことに思い至り、肝を冷やした。だがその時、パーティーの中でもっとも魔法を得意としているはずの魔王はそうではなかった。彼は青くなる代わりにフムフムと頷き、満足そうな顔をしている。シェリカとシアはそんな魔王に、心底不思議そうな顔をした。

「魔王？ 何かあったの？」

「いや、あの魔法使いの戦い方が面白いのでな」

「面白い？ どんな風によ？」

「あの女、戦闘中に得意属性を変えているのだ」

「えっ！」

シェリカとシアは慌てて手すりに寄り掛かると、舞台の上のルミスの姿をよく確認した。彼女の姿に特におかしな点はない。だがすぐにシェリカはあることに気がついた。彼女ボンと手をつくとき、どうだと言わんばかりの顔でまだわからないシアに説明をする。

「シア、仮面よ！ あの女は着けてる仮面によって得意属性が変わるんだわ。赤なら炎、黄なら雷、青なら氷が得意属性になるのよ」

「なるほど、だからいちいちあの女は戦闘中に仮面を着け変えていたのね。確かにこれなら全部説明がつくわ」

シアとシェリカは互いに納得すると、もとの表情に戻った。そして再び試合の流れに注目する。二人が集中を取り戻したちょうどこの時、試合の方も動きがあった。どうやらコウランもこのことに気がついたようだ。

「……わかったわ、あなたその仮面で属性を補助してるのね。だったらこれでどうかしら？」

ルミスの視界を埋めるような熾烈な攻撃をかわしたコウランは、

胸元から二本目となる赤い扇を取り出した。彼女はそれを先ほど持っていた緑の扇に重ね合わせる。そして二つの扇が淡い光を放った瞬間、彼女は空を地面にたたき付けるように扇であおいだのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3388q/>

---

迷宮の魔王さま 改訂版

2011年3月30日23時47分発行